圍棊獨習 第七卷

795.
Su882i6
W

寄贈
瀬越憲作殿

國立國會
38.8.14
圖書館藏書

617890

圍碁獨習 第七卷 目次

手筋篇（その二）

置碁定石……（一）

地取篇（その五）

八目の布石……（六三）

基礎篇（その八）

着手……（九七）

——第七卷目次終——

圍碁獨習 第七卷

七段 鈴木爲次郎

手筋篇（其の二）

置碁定石

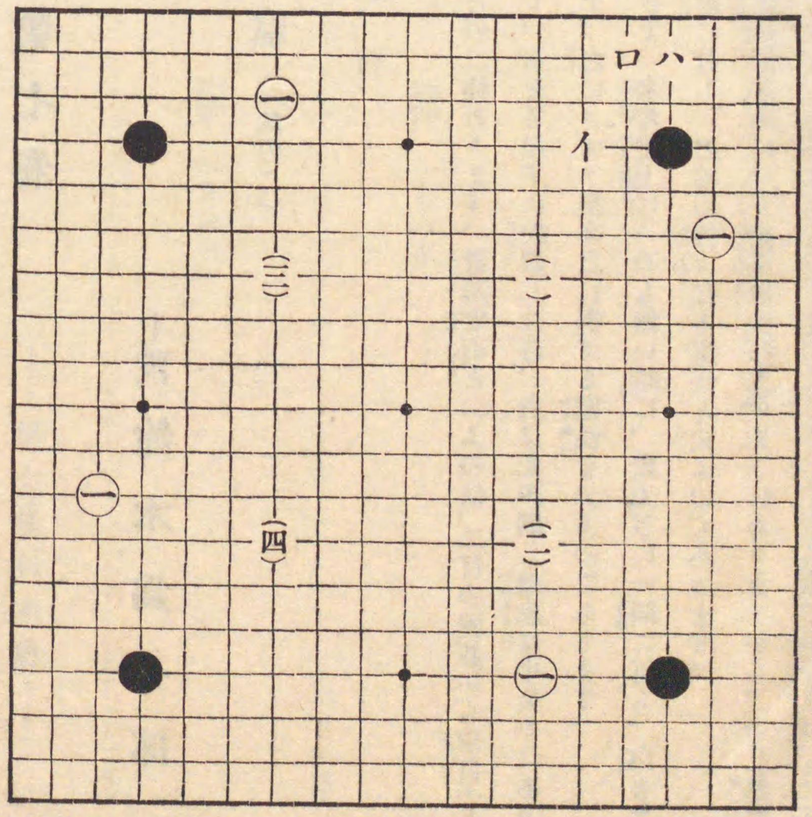
定石には、置碁定石、互先定石との二種あります、置碁定石と云ふのは、二目の置碁から聖目（九目）置碁まで、黑が其力に相當して、石を各星子に配置した時、白は此四隅（邊或は中央ではありませぬ）の置石に對し、色々な形で、之にカヽリ黑亦之に對する應法を云ふのであります。

互先定石と云ふのは、對等の手合で、未だ盤上に一石も無い時に、黑先きに一隅に打ち、白も二と其時々の趣向によつて、色々な形に打ち、之等の種々なる應法と云ふのであります。

で置碁定石と互先定石との異る處は置碁では、元來多數の味方が先きにありますから、若し無事平穩に進行し、大した變化無く互に地取で終局すれば、勝となる筈であります。隨て置碁定石も、成

るべく難かしい、紛はしい變化は避けて、分り易い、確かりした形となる樣に打つを主眼とし。互先定石となると、双方互角に對戰するのでありますから其定石も、隨つて少しのユルミもなく、攻むる處は攻め、戰ふ處は戰つて、手強く打つのを主眼としなければなりませぬ。

第一圖　置碁定石での初めの懸りには、(一)、(二)、(三)、(四)の白一の四つ、之が普通であります。其他には時々の形勢により、色々に打つ手もありますが、之は皆變則で、定石としては、此四つの懸りをもとゝし、研究するが善いのであります。



手筋篇第一圖

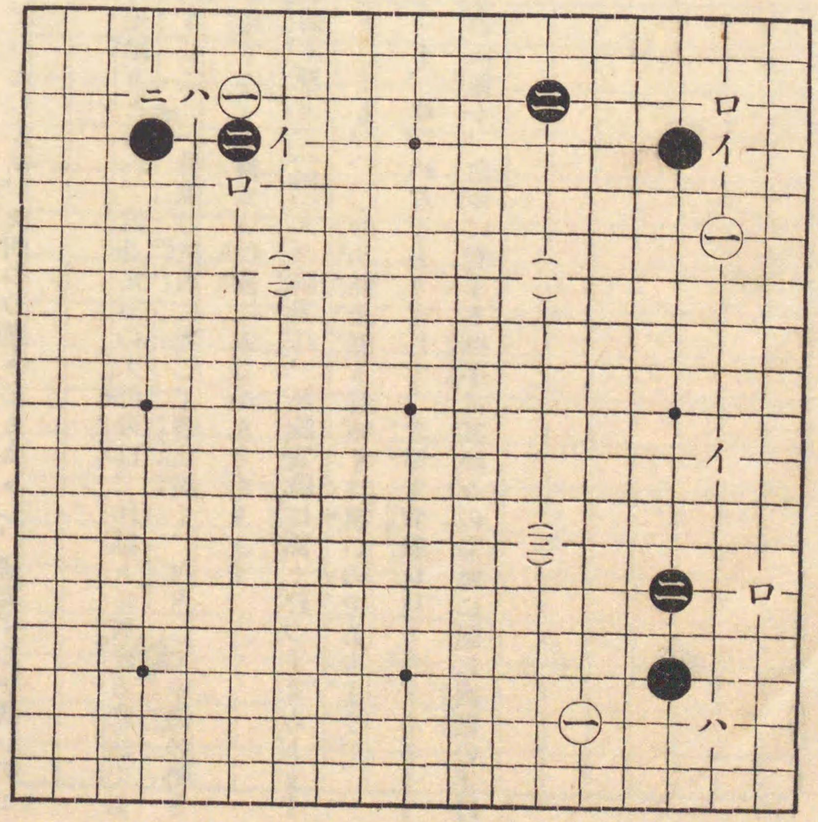
其中でも、(一)白一の懸りを小斜走懸りと稱へ、置碁定石の大部分は、此懸りに對する應法であります。之は、斯ふ一と小斜走に懸る手は、一番隅の置石に對して變化廣く、白として中邊の勢を損せず、又隅に向ひ種々なる手段を施すに、一番宜い位置にあるからであります。

其他の、(二)二間高懸り、(三)大斜走懸り、(四)大々斜走は、無論實戰に能く打つ手でありますが隅に對しては變化狹く、隨て定石としても、(一)の小斜走懸り程多くは無いのであります。

猶此外に置石に對する打方として、イ、ロ、ハなどありまして、之等も實戰に見る手でありますが、定石としては、別に決まつたものは無く、之等に對する應手は其時々の形勢に應じ適當の手段を選ぶ外は無いのであります。

第二圖　（一）、先づ白一の小斜走懸りに對しては、黑は圖の樣に二と大斜走に應ける手。（二）、黑二と、白一の上に附ける手。（此時には白は當然の手筋としてイに綽ね、黑ロ、白ハ、黑ニとなる形）（三）、黑二と一間に高く應ける手との三つあります。

斯樣に、白一の小斜走懸りに對し、黑に三つも應け手のあるのは、甚だ煩はしい樣でありますが、碁は、其時々の方針によりて打方を異にし或は置石の多少によつて、其差



手筋篇第二圖

意に强弱の差あり。今一つは其碁の形勢のの變化により打方を異にするのは云ふまでもないので、隨て黑の應手に、之等の三つ或はそれ以外の別があるのであります。

で此處に此三つの應手の着意を、簡單に區別しますと先づ（一）、黑二の大斜走應は、場合によりては、次にイに締つて隅を守り、且つ白一を攻め。又場合によりては、白にロに打込ませ、黑イと約へ、隅に白を活きさせて外を厚くしよふと云ふ、攻守の意味を含んで居ります。

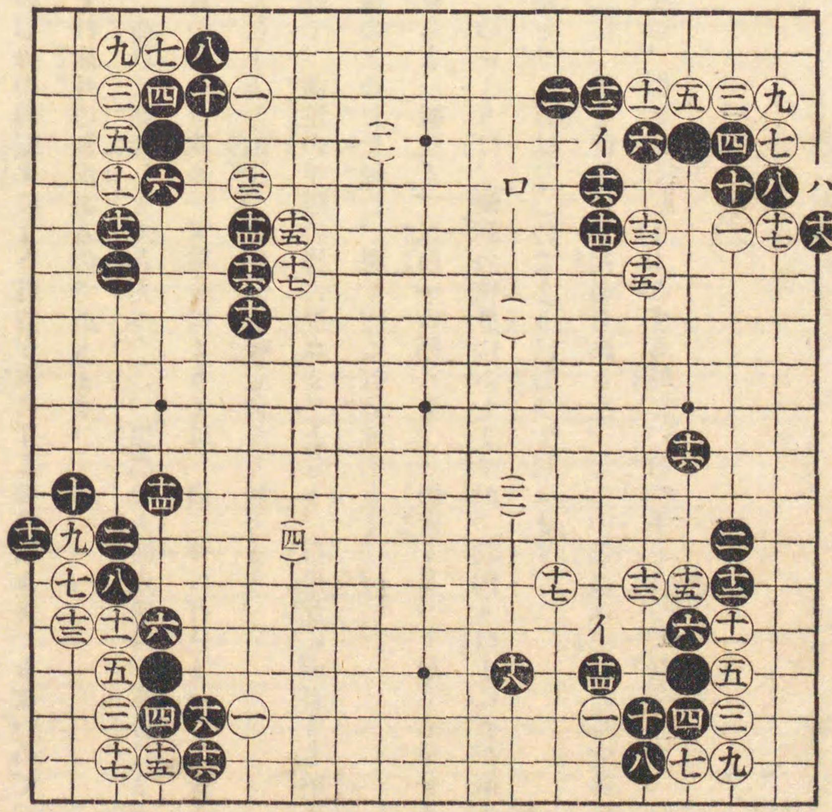
次に（二）の黑二の附けは、斯ふ打て、前述の手順の樣に黑ニまでとなり、白黑互に應答する中に自然に其形を固くするので此手は他の二つに比較し、堅く守る打方であります。

（三）の黑二は、（一）の黑二から見ると一線高く、又白一の懸りも、一路近くなつて居りますから此手は一の白を攻める爲には、（一）の一よりは、便利の位置にありますが、其代り白イに石が來ますと、黑はロと、ハに隙が出來、地を守るには（一）の二よりは劣つて居ります。

以上の通りで、初めの（一）の黑二は、攻守何れにも用ゐられる手、（二）の黑二は主として守勢に用ゆる手、（三）の黑二は、白一を攻め、中を厚くしよふとする時に、打つ手となつて居ります。

第三圖　（一）、先づ黑二の大斜走定石から揚げる事と致します。白三を三ノ三の打込と云つて、隅の地を破り、且つ場合によりては、黑を攻める着意であります。此時黑は無論四と打て、一と三を隔て、白五、黑六、白七、黑八白九、黑十、白十一の時、黑十二に突當り外を圍みます。

白十三の時、黑十四の附は善い手で、之を若し捨て置きますと、白に十六と覗かれ、黑イ、白にロと飛ばれて、却て白に攻められます。黑十八



手筋篇第三圖

は、同じく白の盤りを止める手としては、八と下るより、優つて居ります。

（二）、黑十四、次に白十五と綽ねた時は、黑は十六と行、白十七、黑十八と行び、黑は好形となります。

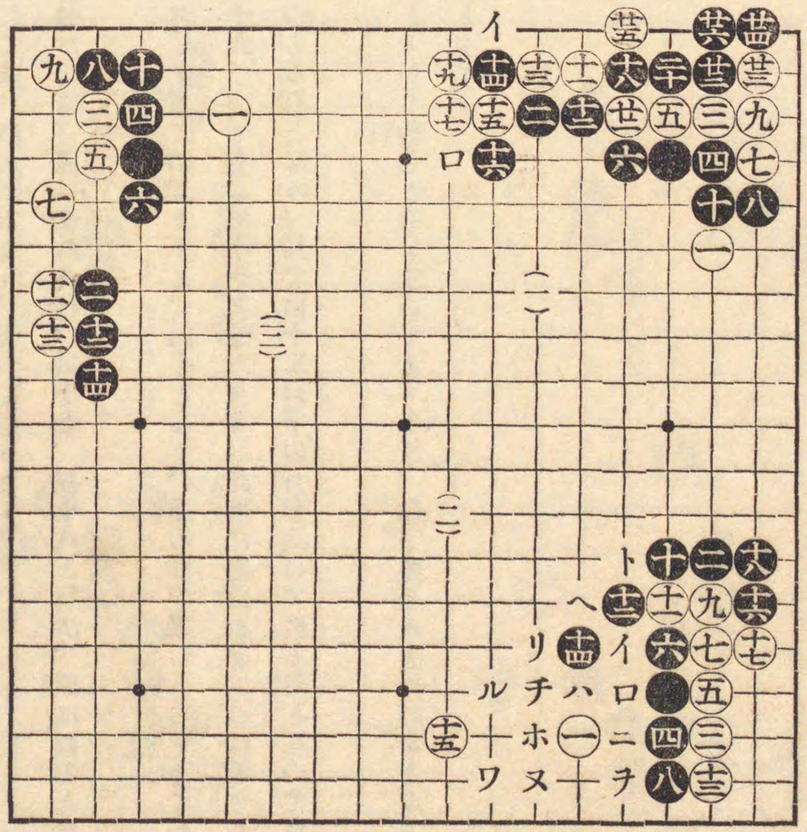
（三）、白十三と打つた時に、黑若し十五に粘ぎますと、白イとなり、黑の形が惡しくなりますから、黑は十四に綽ね、白十五、黑十六、白十七、黑十八となります。此形は黑は石を二つに隔てられましたが、此二つとも各々根據のある石となり、却て白十三以下の石を攻めて居る形となつて居ります。

（四）、白七と斜走した時は黑八と上から約へるのが定石であります。以下黑十八までの形となりて、外勢は（一）より黑は優つて居ります。

第四圖　（一）、前圖（四）の變化、白十五の手で圖の様に切る手もあります。此時は黑十六と綽を打ち、白十七、黑十八と約へます。

（此黑十六の綽の手順肝要でありまして、此手を若し直ぐに十八と約へますと、白十九、黑十六なれば白イ、黑二十一、白ロとなり、猶隅の白に活が殘つて居ります。）

以下圖の黑二十六の粘ぎまでゞ、攻合の形となり、此攻合は黑は二手、白は三手で白先でありますが、此形は白



手筋篇第四圖

からは、何れからも、直ぐに攻める手無く、之で黑勝となつて居ります。

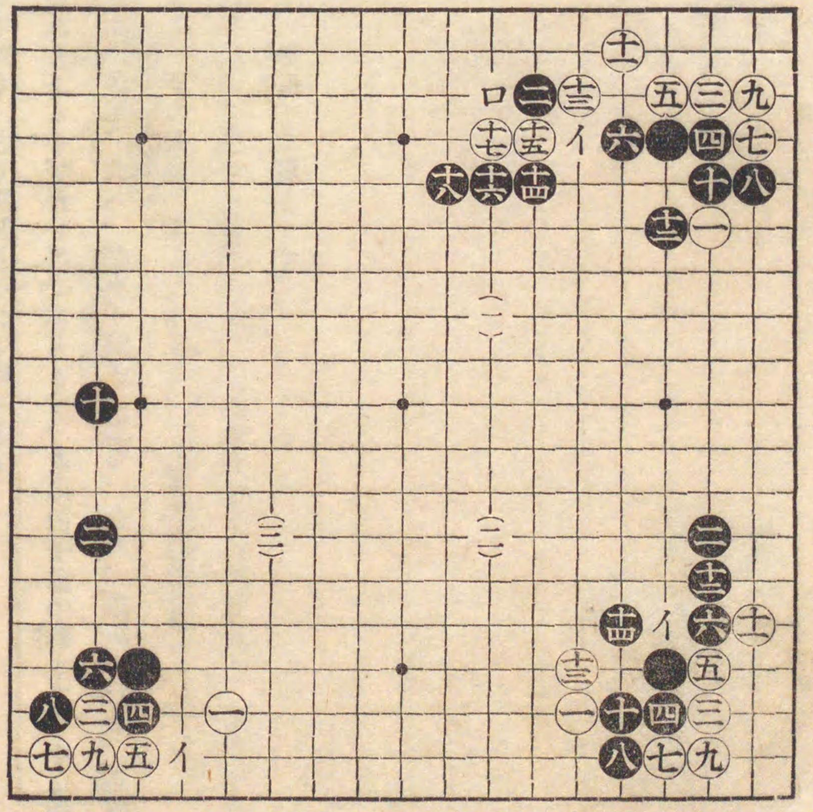
（二）、白七を先きに打つ時は、黑八と下る手が善い手であります。なほ白十三の約へで、イに切りますと、黑十四、白ロ、黑ハ、白ニ、黑ホ、白ヘ、黑ト、白チ、黑リ、白ヌ、黑ル、白ヲ、黑ワとなり、黑は四目を取られるけれども、大に優勢の形となります。（此變化次圖參照）

（三）、白七に尖んだ時は、黑は八、白九、黑十と綽粘の形で、次に白十一に附ければ、黑堅く十二、白十三、黑十四と行びて居つて、黑優つて居ります。

第五圖　（一）、白七、九の綽粘を先に打て、次に白十一に尖みますと、黑は十二と綽ねる手が大層善い手であります。

黑十四では、對等の碁では無論イと約へ、白十五なれば黑ロに行び、戰つて惡しくありませぬが、前述の通り堅い打方を主とする場合には、黑は圖の樣に十四にハズシ、以下十八に打つて二の一目を捨て、上を厚くして惡しくありませぬ。

（二）、黑六に約へる手も定

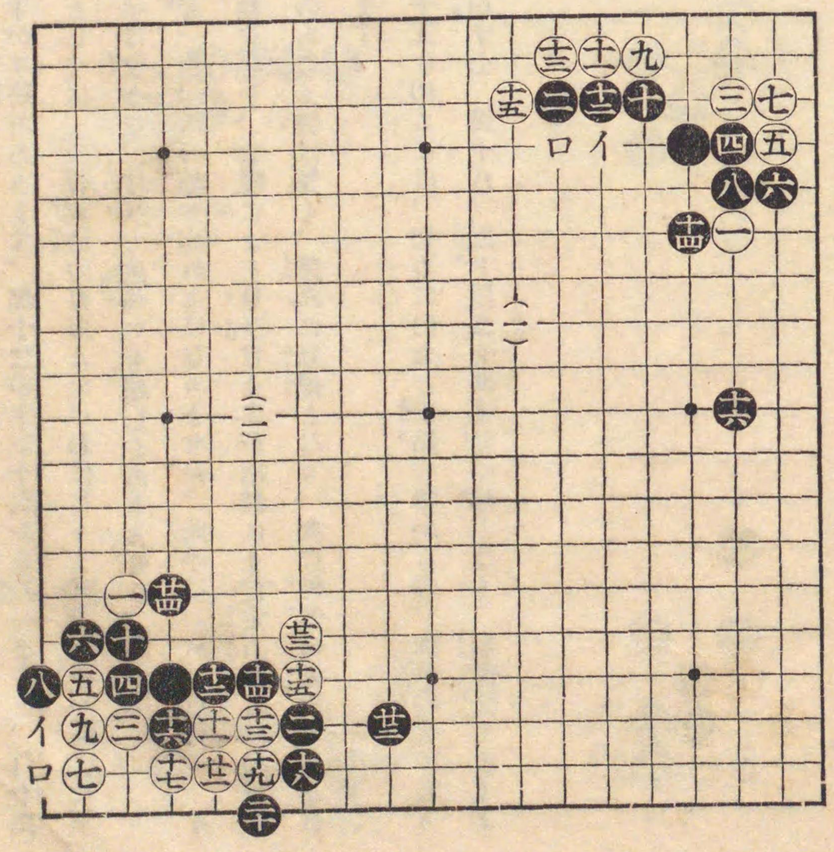


手筋篇第五圖

石であります。次に白十一の綽で、イに切る手はありますが、之は以下定石の中の變化にある通り、黑が其應接を誤らなければ、無理となつて、遂に隅の白を取られてしまいます。

（三）、黑四に約へた時、直に白五に綽ねますと、圖の樣に黑六に約へ白を盤らし、以下黑十に打て惡しくありませぬ。又黑六をイに約へ前の定石の樣に打つ手もあります。

第六圖　（一）、黑六と約へ、白七、黑八、白次に九と



手筋篇第六圖

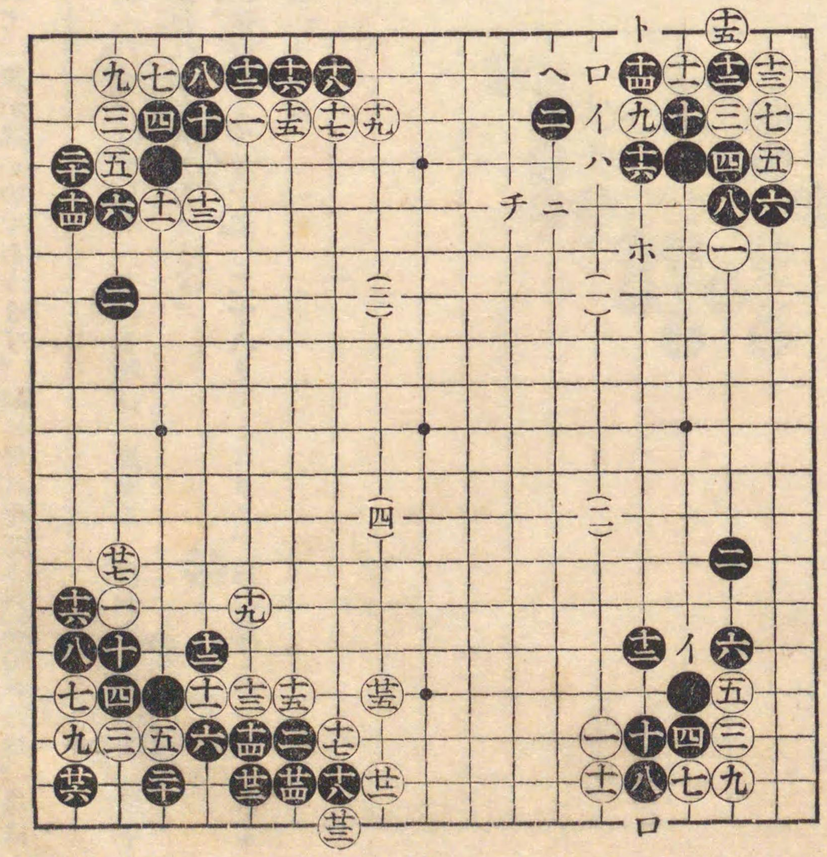
斜走した時は、黒は十に尖附ける手が手筋であります。黒十二の手で十三から約へますと、白十二黒イ白ロに切るので、此形は置碁としては、先づ危險の打方と云はねばなりませぬ。黒十四は此形での第一の好點でありますが、此手は又十五と行びて居つても惡しくありませぬ。

（二）、白七に掛粘げば、黒は是非一着、八の綽を忘れてはなりませぬ。此手は、次に白九で、イと劫に打たれる手を恐れて只十に粘ぐのを、實戰によく見受けますが斯樣にまだ定石を打つて居る初めの布石の間では白に善い劫拋のあらふ筈は無く、黒九に劫提となり、次に何處の劫拋にかまわず、黒ロと打拔いて善いのであります。

白十一、十三に突當り、次に白十五に切る手は、初めに白七と掛粘ぐ時からの、豫定の手でありますが、此時は、黒十六に出で、白十七、黒十八、以下黒二十四までの綽となり、黒優勢であります。

第七圖　（一）、白七に粘次に白九に飛ぶ手は、次に黒に十と出られ、切られる手があつて、面白くありませぬ。黒十六と抱へた時、直ぐに白イに逃出しますと、黒ロ、白ハ、黒ニと門に掛けて黒勝となり。又白ホの飛があつて後に白イに逃出しますと、黒ハ白ロ、黒ヘ、白ト、黒チと打つので、何れにしても黒は此處の打方を誤らなければ、安全であります。

（二）、白十一は、次にイに切る準備の手で、若し黒十二



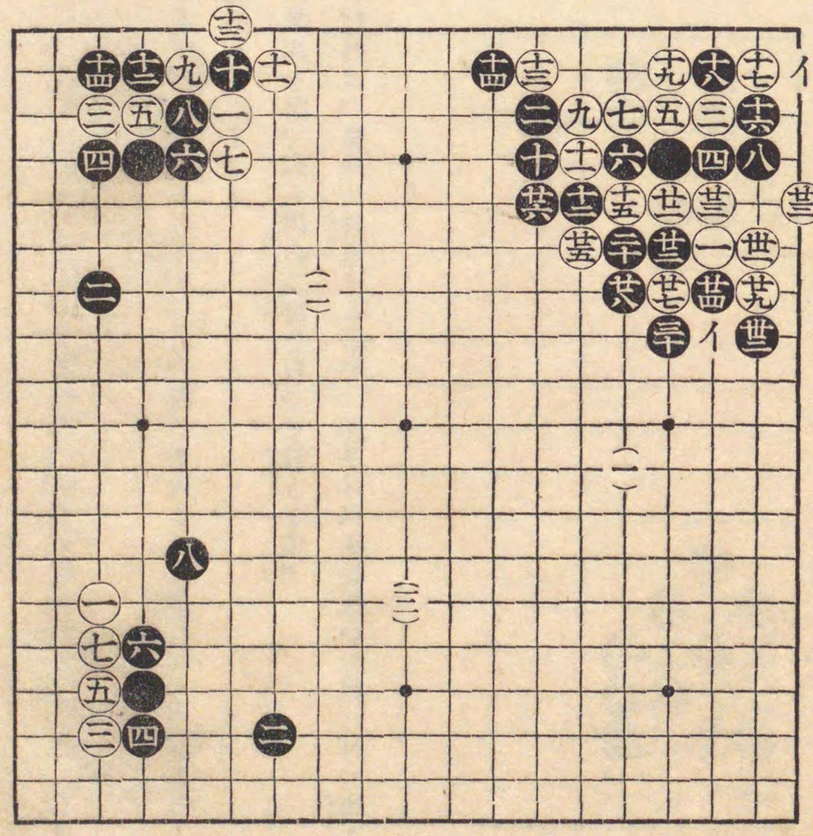
手筋篇第七圖

をロに打ちますと白にイと切られて、黑が惡いのであります。故に黑は十二と掛粘白ロの時、黑は先手を取つて他に打つたのであります。

（三）、前圖の樣に白は十二の處へ打ず、直に白十一と切る時は、黑十二、白十三、黑十四、以下黑二十に曲り、隅を取るので、此分れは有利であります。

（四）、圖の樣に打ても、結局隅は取れますが、然し二十八までとなりて、白に厚く外を圍まれる形となつては黑優つて居るとは云へませぬ。

第八圖　（一）、此形は、第四圖變化の中に說明致しましたが、此圖では黑十六に曲り白十七、黑十八に切を入れたので、此手は後に劫となる時、劫拋を打つ準備の着手で極く安全な打方であります。其劫の變化と云ひますと、黑二十以下二十四に約へつけ、白二十五に切り、以下黑三十と一目を打拔いた時に、白三十一でイに當るとすると、黑三十一に切り、白二十七と取つた時の劫でありまして、圖の樣に打てば黑イに綽ねる確



な劫抛があります。

然し此黒十六以下の手は無くとも、白イに當りとすれば、黒十六に曲る手があつて黒は惡しくはありまぬ。

(二)、黒四は先手を取らふとする時、又は中央の形勢が白の優つて居る時に稀に打つ事もありますが、次に白五の盤となつて黒損であります。

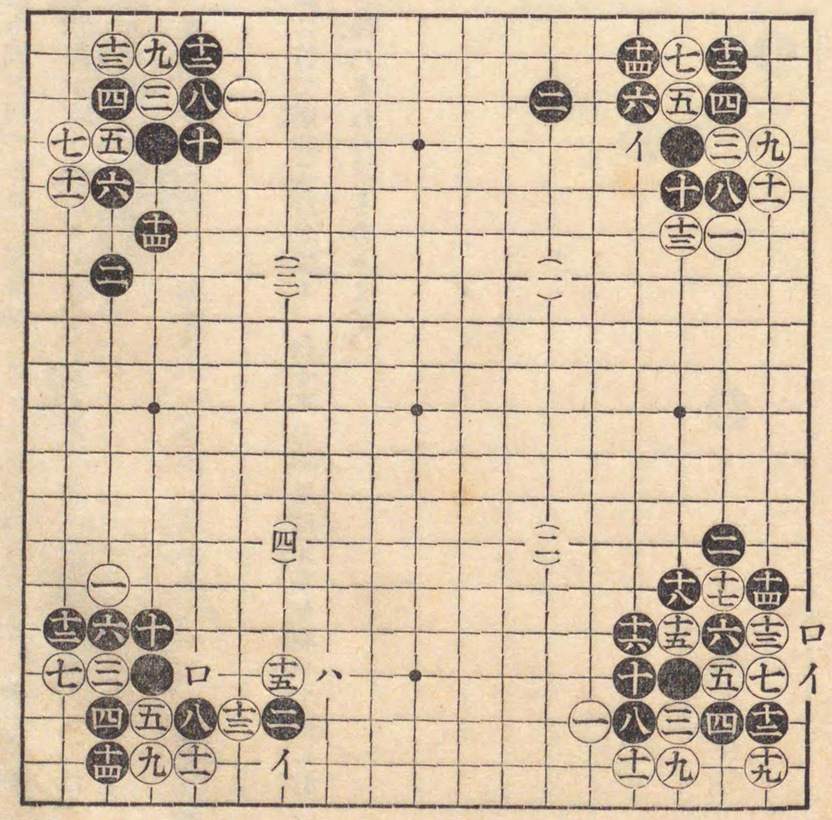
黒六、白七と押せば、圖の様に黒八と出、以下隅の二目を取つて替ります。

(三)、又圖の様に、白七に粘いだ時は、黒八に斜走するので、此手は又手を拔いて他に打つ事もあります。

第九圖　(一)、白三と附け、黒四、白五に切る手を、附切の定石と云つて、白は斯ふ打つ事もあります。

で此附切の手に對し、黒は圖の様に六、八と打つ手と、又六を只イに行びて居る手との二つの應手があります。イは紛れの無い堅い手でありますが、手筋としては圖の様に六、八に打つ方が優つて居ります。

白十三に押し、黒十四に提となり、此分れは幾分黒が優つて居ります。



手筋篇第九圖

（二）、白十三に曲り、黒十四、白十五と切つた時、黒は征にカケル手がありますと、十六でイに打ち、白十七、黒ロに三目當り、白六黒十六と征にカケます。又前方に白の征の當りのある時は、黒は圖の様に打つので、此結果矢張り黒優つて居ります。

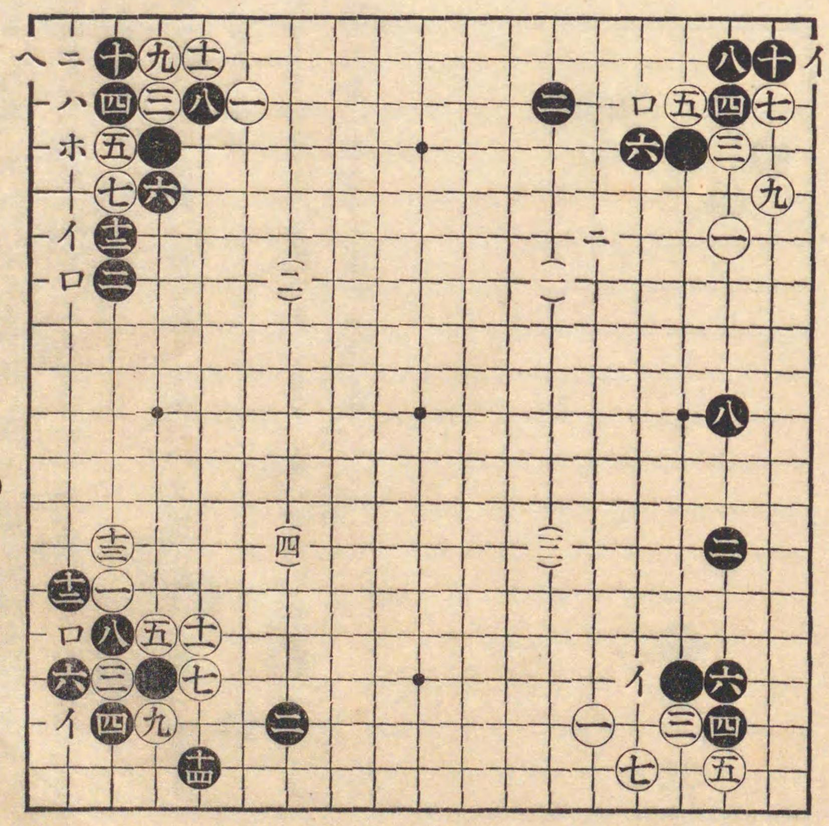
（三）、圖の様に白十一に曲れば、黒先づ十二に約へ、白十三、黒十四に掛粘となつて、之も黒優つて居ります。

（四）、白十三に綽込むと、黒十四に打て隅の二目を提り、白十五の時黒は先手を取つて他に打つ手もあり、又直にイに下り、白ロ、黒八と打つ手もあります。

第十圖　（一）、六ヶ敷變化を避け、分り易く打たふとするには、黒は六に行びる方が確であります。

で此變化は極く簡單で、黒十まで丶一段落となつたのであります。此時に白イに綽れば、黒ロの提、又白イをニに打つ時は、手を拔いて他に打ちます。

（二）、白七に打つと、黒八白九、黒十と約へ、白十一の時、黒十二と打て攻合黒勝となります。で此攻合は前の死活の中にもありましたる通り、



手筋篇第十圖

十粘　黒六手强して好し

此時白**イ**に綽れば、黑**ロ**、白**ハ**、黑**ニ**、白**ホ**、黑**ヘ**に下る手が善い手で、之で黑勝となります。

（三）、白三、黑四、白五と二段に綽ねる手もあります。で此手は**一**の白を堅くする時に打つ手で通常は前變化の樣に打つ方が優つて居ります。

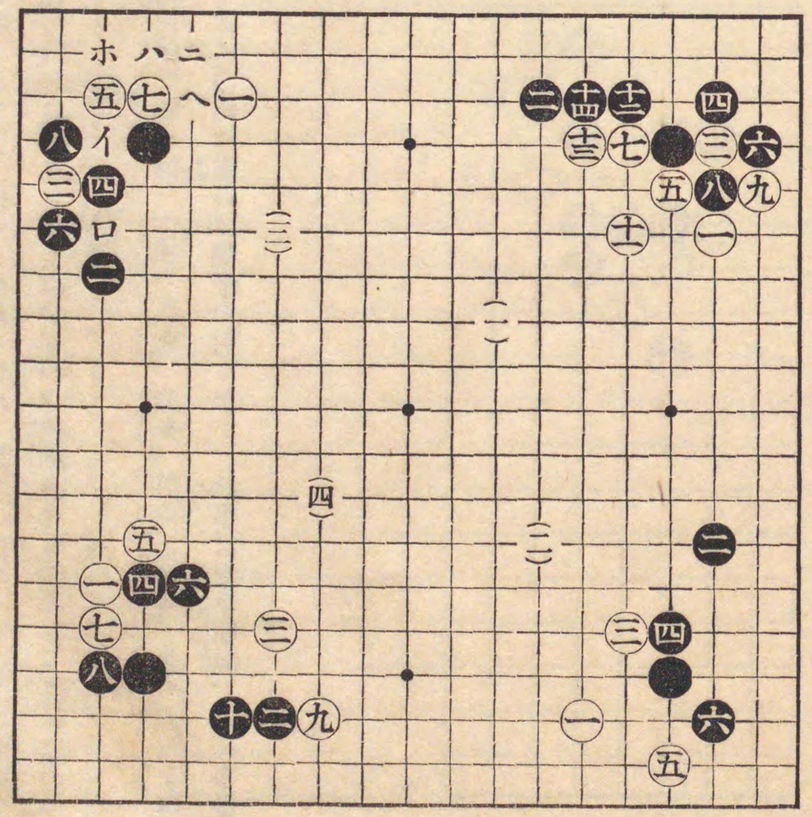
黑六に粘、白七の時、黑八に二間に拓いたのは善い處でありますが、又此手は**イ**と行びるのも、白を攻める意味があつて、好い處であります。

（四）、白三、五は劫含みの手でありますが多くは白損であります。黑六で若し七に行びますと、白は劫拋の工合で、**イ**に綽ね、黑六、白**ロ**に劫とする手があります。

第十一圖　（一）、白九から當りとしても、同じく黑十に粘ぎ、白十一に掛粘ぎ、以下黑十四の粘となるので、此形となつても隅の地は確で、黑有利の分れであります。

（二）、白三と掛け、黑四、白五と走る手もあります、之に對し、黑は六に尖んで居ります。

（三）、白三に打込手も、面白い手筋であります、此手に對しては、黑は四に尖附けるのが確で、善い手であります。

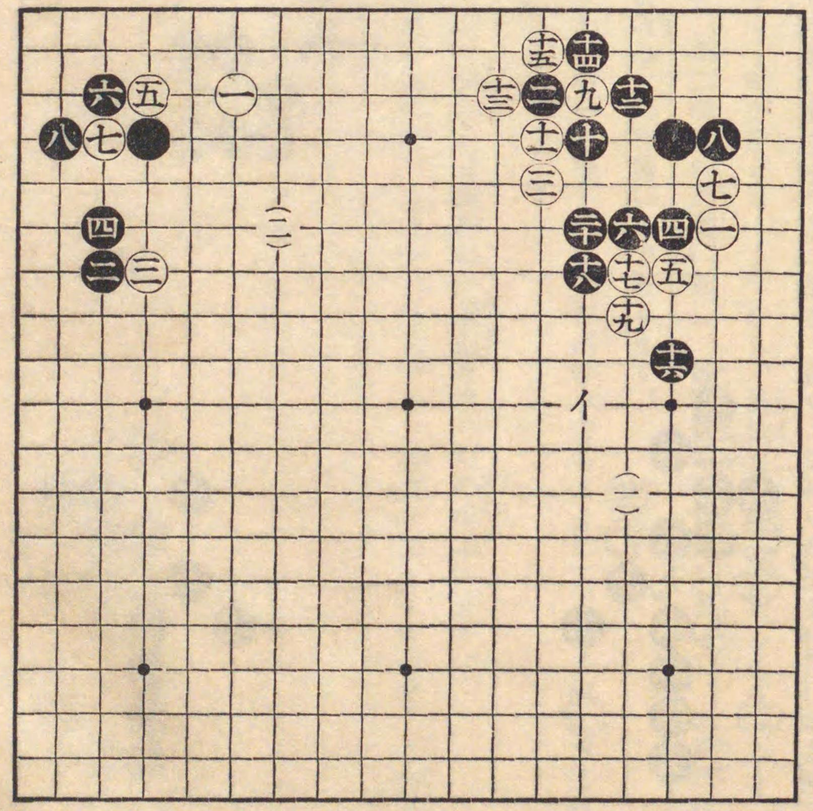


白五と打つた時に、黑六で、七に打ちますと、白イ、黑ロ、白八、黑ニ、白ホ、黑ヘとなるので此形は五圖(二)と同形となり、又圖の樣に六、八と打てば白を一に連絡させる代りに、黑は三の一目を提り、其形は確となりました。

(四)、白三と高く懸れば、黑は圖の樣に四に附、白五、黑六、白七、黑八と打ち。此一と三を隔てゝ打つのが、善い手であります。次に白九に附れば黑十と引くので、此手は簡單明瞭、白に手段の餘地はありませぬ。

第十二圖　(一)、圖の樣に、白九と內側から附けた時は、黑十、白十一、黑十二に當りとします。白十三黑十四白十五に當りとすれば、黑は劫を粘がず、先づ十六に攻め白十七、黑十八、白十九、黑二十に粘ぐので、此時に白九に劫を提るも、此勝敗は黑に大して影響の無い處でありますから、手を拔き、イと打て攻勢を取ります。

(二)、白三と、上から附ける手もあります、之に對しては、黑には色々劇しく打つ手

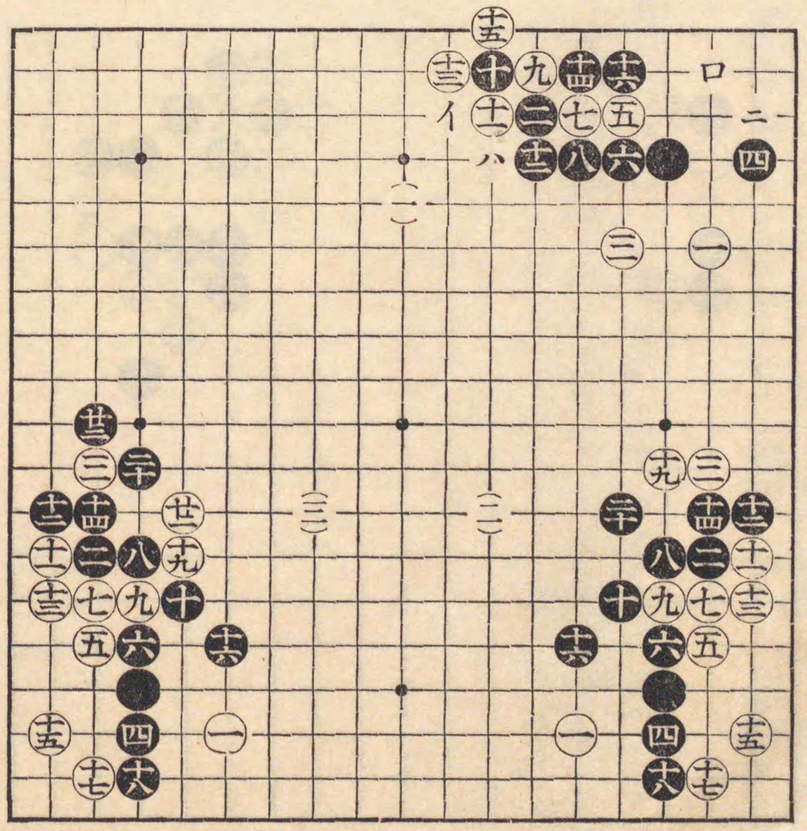


手筋篇第十二圖

もありますが、一番分り易い手は、黑四に引くので、斯ふ打て置けば、少しの變化もなく確であります。

白五、七は、一子を捨石にして黑を礙形にしやうとする手段でありまして、之に對し黑は無雜作に八と取る手が一番簡單で善い手であります。

第十三圖　(一)、白三と一間に飛んで居る手もありますす、斯ふ打つた時は、黑は四に飛んで隅を守る手が確であります。白五に打込、以下白九に綽ねた時に、黑十の二段



手筋篇第十三圖

綽は手筋であります。白十三で若し十四に粘ぎますと、黑イ、白ロ、黑ハに打拔次に白にニと隅で活となりますが、黑は八の打拔により、外が厚くなりますから、此結果黑優つて居ります。

(二)、白三を夾返しの定石と云ひ、黑二の大斜走應に對し、普通見る手でありまして、此手は碁をあまり急にせず、種々なる意味を含み、大層善い手であります。

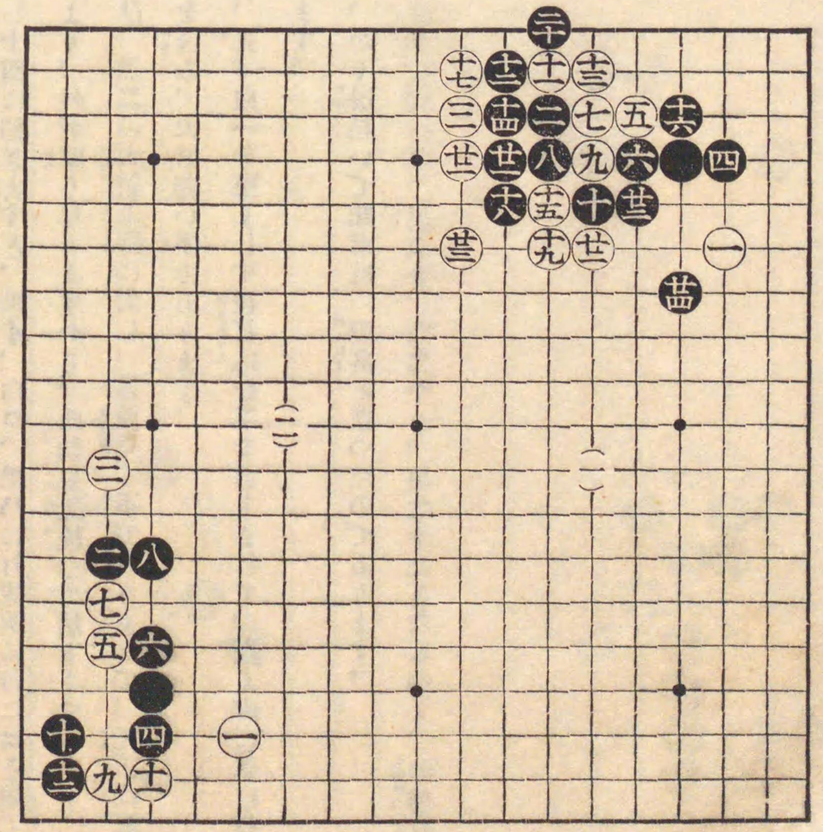
白五の打込は、實際の對戰では、先づ白一を堅くして後打込む手でありまして、斯く直に五に打込む手は、多く無理となつて居ります。

黑二十までが、此一隅の變化で、かく掛粘いて此形は一段落となつたのであります。

(三)、前の變化で、圖の樣に白十九に切れば、黑二十、白二十一、黑二十二となるので、此結果黑が優つて居ります。

第十四圖　(一)、白十五に切れば、黑十六に約へて攻合黑勝となります。で圖の結果、白に二十三と圍はれる形になつては、黑は五目を取つても、大して得ではありませぬが、只黑は先手を取り、二十四に掛ける事が出來る丈に、稍黑の良い分れとなつて居ります。

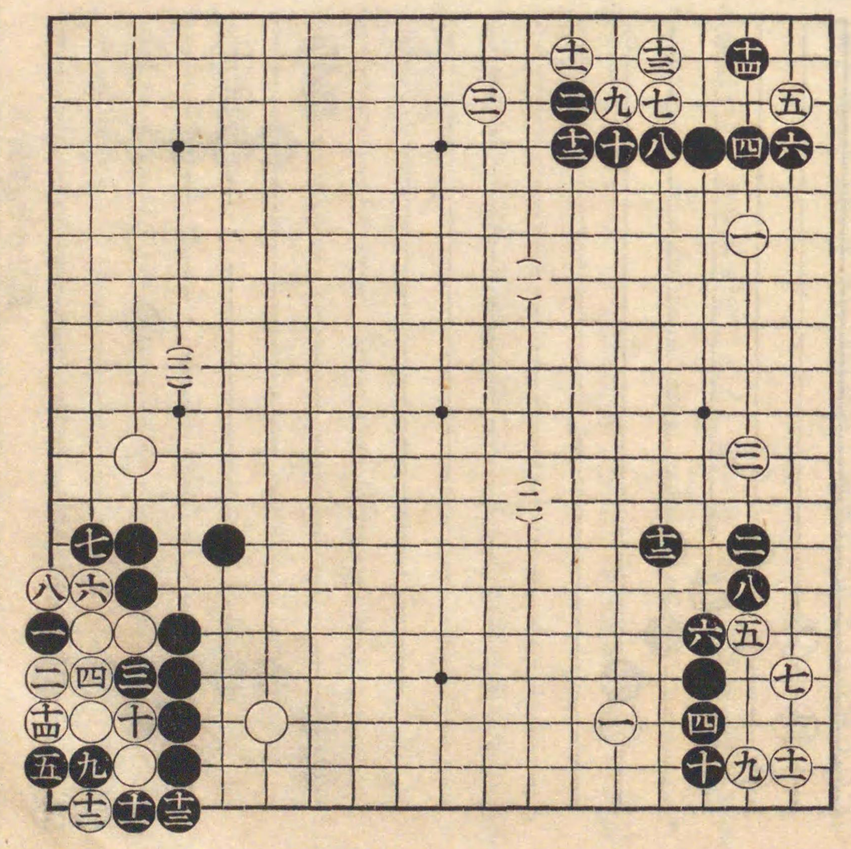
(二)、白五の打込を先にし黑六、白七、黑八の時に、白九と打てば、黑は十に打て、五、七の二目を取り、白九を連絡せしめて黑有利の形であります。



手筋篇第十四圖

第十五圖　(一)、又圖の樣に五の打込を先にし、後に白七、九と打込みますと、黑は白を盤らして後十四に打て之も黑の善い形であります。

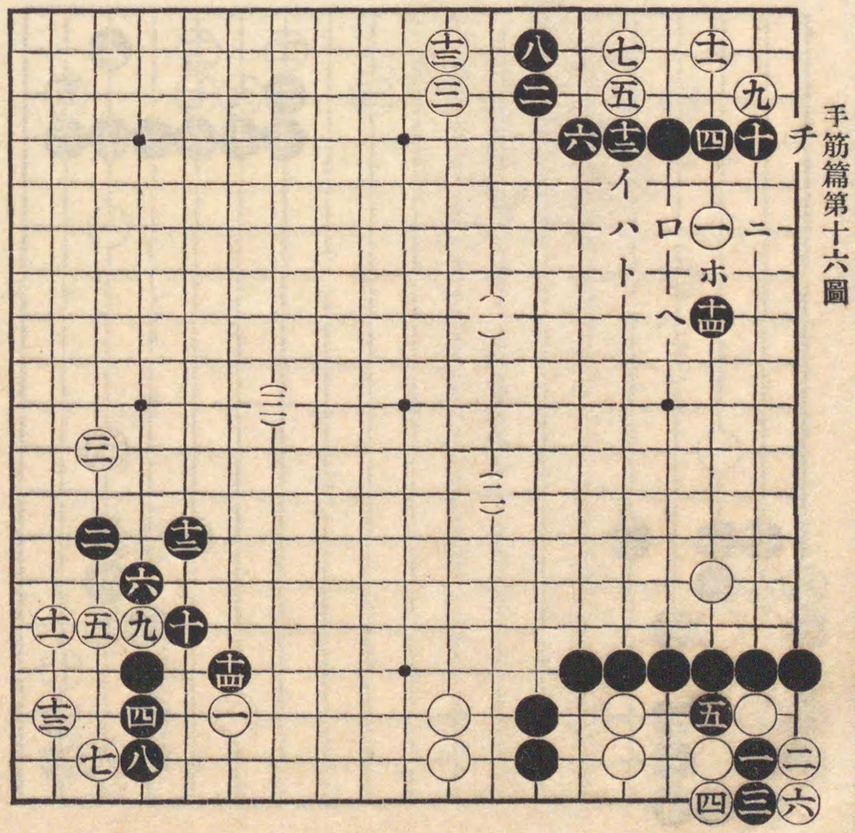
(二)、白七に打ち、黑八、以下白十一に打ても、同じく隅で活となります。然し此活は、次に黑堅く十二に飛んで居て、後に、(三)圖の樣に、外を厚くする手がありますから、斯うなつては、白は隅に活きても、決して善い結果とは云へませぬ。



手筋篇第十五圖

（三）、前圖の形を、其まゝ●○として現はしたので、此形、黑一に附ける手が、面白い手筋であります。黑五は此石を捨石にして、外を堅くする手で、此手により、黑は全部外を圍む事が出來ます。

第十六圖　（一）、白五の打込に對し、黑は六に尖んで白を攻める手もあります、此手と、前の變化にある黑十二に打つ手とは、何れも一得一失はありますが、何れにしても白を圍み攻める意味には變りはありませぬ。



白十一と活きる手で、若し十二に出、黑イ、白十一に打てば黑ロに掛粘ぐので、之は圖に比して一層好い形となります。

黑十四は此場合、攻、且つ守りを兼ねて打つた手で此時に白ハに飛べば、黑ニに盤りて隅の黑を確にし。又白ハの飛でホに突當り、黑への時、白ハと飛べば、黑トに尖附けて善いのであります。

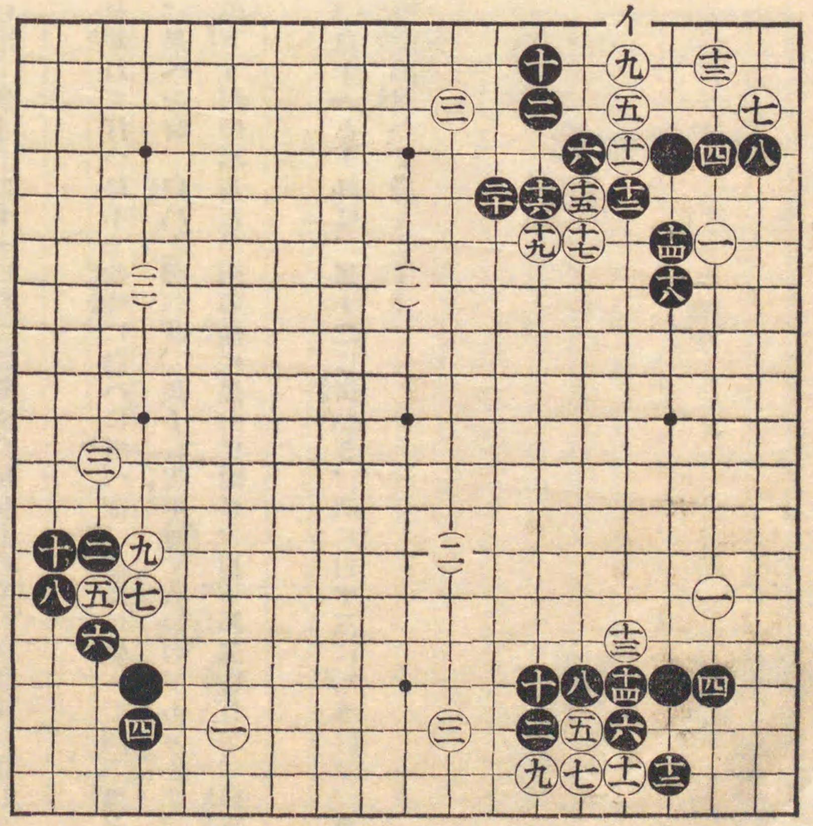
（二）、前圖の形で、若し黑にチの下りが出來ると、圖の樣に黑一に附け、以下黑五に打て、白死となります。

（三）、初めに白九と出で、黑十、白十一と下れば、黑十二に掛粘ぎ、次に白十三に活きれば、黑十四となり、此形は（一）より、一層黑が優つて居ります。

第十七圖　（一）、前圖（一）で説明しました様に、白十一に突當り、次に白十三に活きれば、黑は十四と掛粘、白十五と切れば、黑十六、白十七黑十八と打て、白十五、十七を攻めます。

次に白十九、黑二十となり此石は互に中央に出す形となつて居りますが、只後に黑よりイに附けて、白の眼を取る手（十五圖（三）參照）がありますから、其丈此形は黑が優つて居ります。

（二）、白五に打込めば、黑

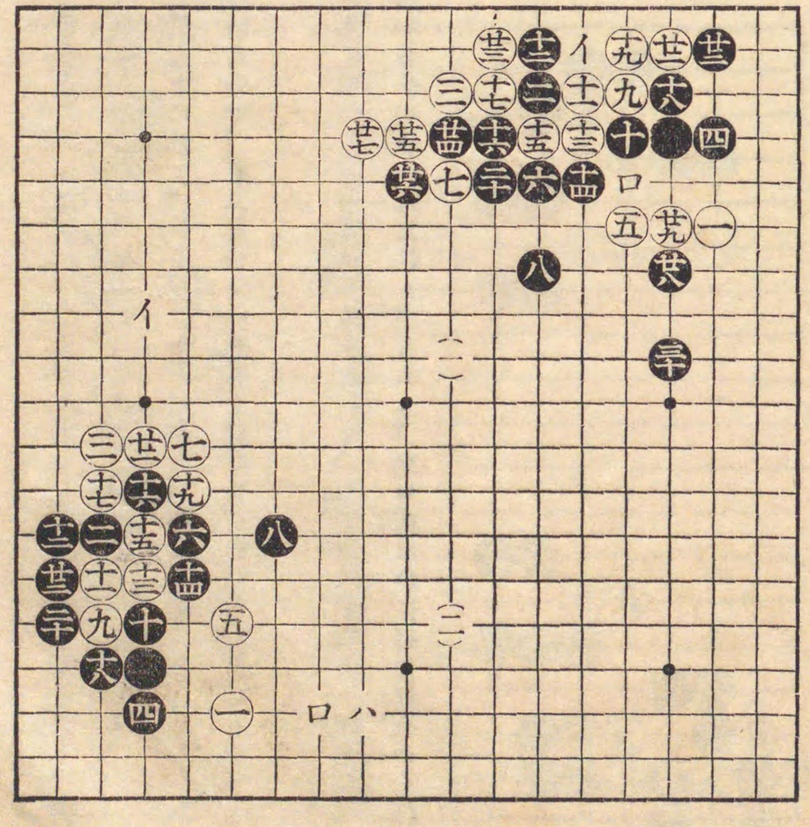


手筋篇第十七圖

六と尖附、以下黑十と粘ぎ、白十一、黑十二、白十三、黑十四となり、之は双方平穩の分れとなります。

（三）、白七と上へ行びれば黑は無論八に盤り、白九、黑十となるので、之も黑の形は確であります。

第十八圖　（一）、白五と一間に飛びますと、黑も六に一間飛、白七、黑八に飛出します。白九は適當な時機を見て打込む事もありますが、圖の様に急に打込む手は、却て黑を堅くして面白くありませ



手筋篇第十八圖

ぬ。

黑十二は善い手であります、次に黑十八に約へた時に、白二十に切りますと、黑十九に當り、白二十四、黑イ、白四目を粘いだ時、黑ロとなるので、斯ふなつては黑は安全な形となります。

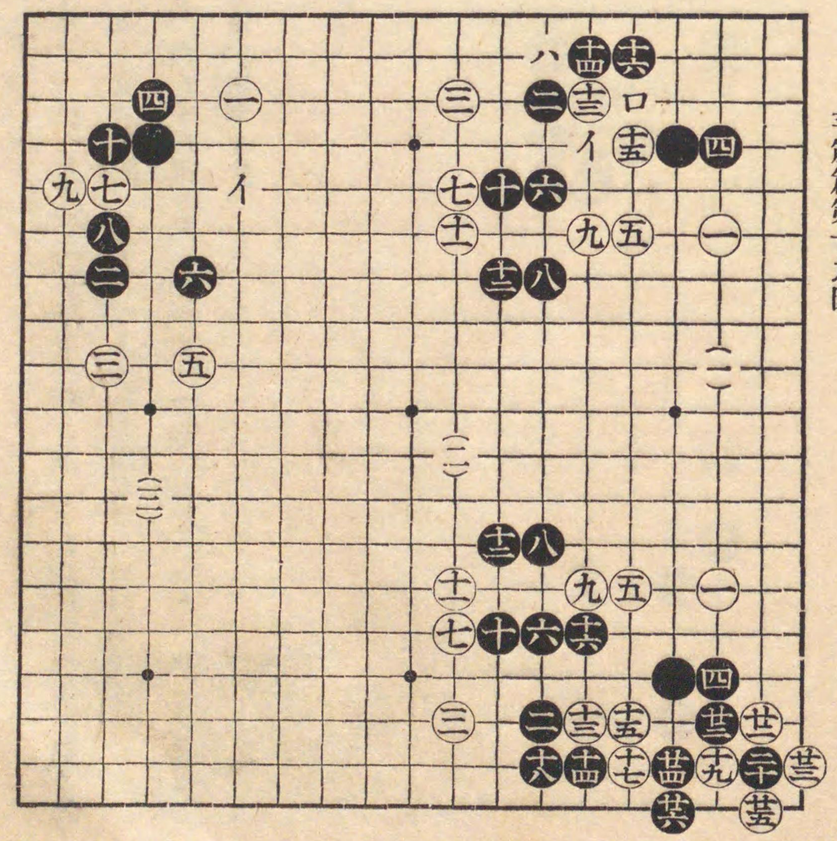
又圖の樣に、白十九に下りますと黑二十に粘ぎ、以下黑二十六に切り、白二十七、黑二十八、白二十九、黑三十と打て白の三目を攻めるので、斯ふなつては此石を逃げるに白は甚だ困難であります。

(二)、前の說明にある通り、白十九に切つた時の變化でありまして、此形白は十六の一目を取つたものゝ、却て礙形となり、後に黑からイの邊に打たれる手もあり。又ロ或は八に打たれ攻められる手も出來て來ます。

第十九圖　(一)、白九の覗きは、次に十五に打込む準備の手で、之に對しては、黑は十に突當り、白十一、黑十二に二重粘するのが善い手であります。白十三の打込みには、黑は十四と綽ね、白十五黑十六と打て宜いので、此形となりますと、黑は石の連絡も、亦隅の地も、共に確となつたのであります。

處が此黑十四の綽で、イに打ちますと、白ロ、黑十五、白八の盤となります。

(二)、白十五と行びれば、



手筋篇第十九圖

黑は圖の樣に十六に打て白の三目は死となります。

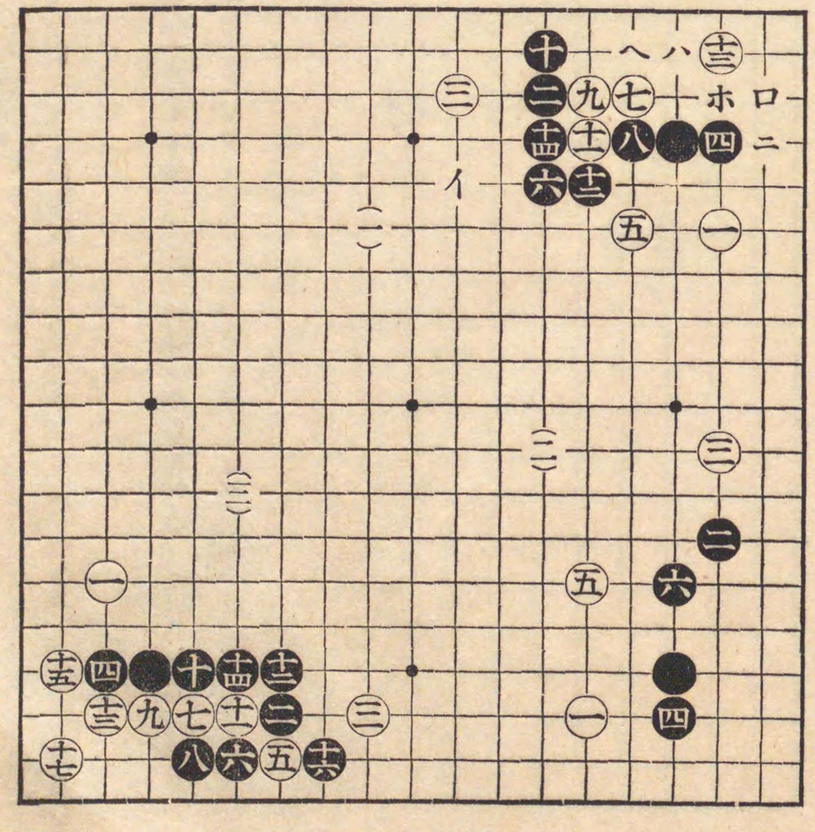
次に白十九に打てば、黑は二十と附け、以下黑二十六の下りとなるので、此結果は、白は隅で先手で活となりましたが、白十三以下の三目は持込となり、白は可なり損となつて居ります。

（三）、圖の樣に黑に六の飛があり、白にイの飛の無い形では、白七の打込に對し、黑は八に突當り、白九、黑十と打て、二目を取る事が出來ます。

第二十圖　（一）、同じく黑六の飛があり、今度はイの飛の無い形では、白七の打込に對しては、黑は八に突當り白九、黑十に下り白七、八の二目は死となります。

白十三と斜走すれば、黑十四に粘ぐので此時白ロに尖めば、黑八、白ニ、黑ホとなり又白ロを、ヘと打てば、黑ロに尖み白死となります。

（二）、白五に二間に飛ぶ手もあります、此手に對しては黑は六に尖む手が一番確で、斯ふ打て置けば隅は安全で、



手筋篇第二十圖

次に白一、三、五等を強く攻める手も出來ます。

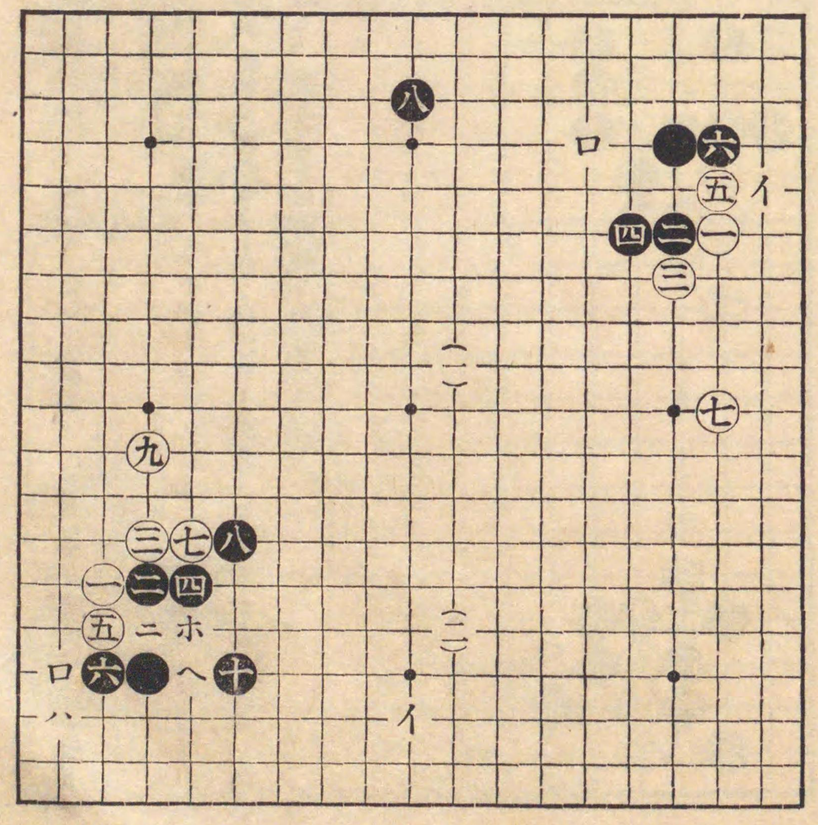
(三)、白五に附け、黑六の時に、白七に打込む筋もあります、此時には黑八と打つ手が一番善い手で、次に白九、黑十と約へます。

白十一以下の手は、白黑共に斯け打つ位のもので、以下白の十七の掛粘まで丶此一隅の變化は、一段落となりました、此處で、黑は先手となりましたから、手を拔いて他の大場に打つ事も出來ます。

第二十一圖　(一)、黑二に附、白三以下の變化を前述の通り附定石と云ひ、黑としては極く堅い手段であります。

黑四は、形勢によりて五に約へる手もありますが、之は特別の形勢の時打つ手で普通は四と行びるのが手筋となつて居ります。

白五では、以下の定石の中にもある通り、六と附ける手、又イと尖む手もありますが、其意味は略同じく何れも、白一を確にし、隅に侵入する手



手筋篇第二十一圖

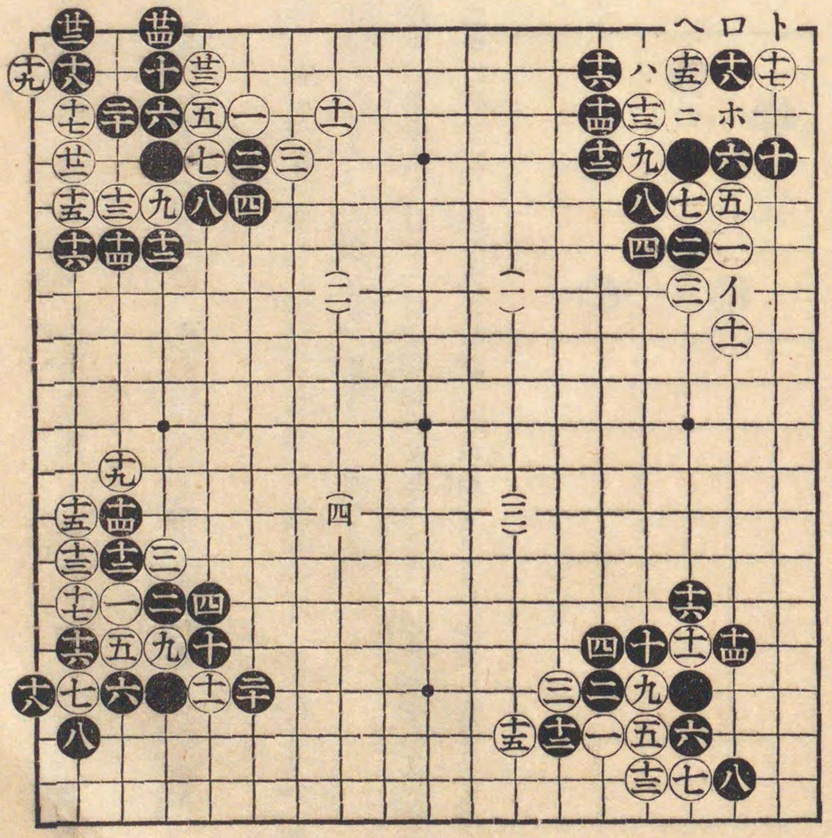
であります。

白七と守れば、黑も八と廣く、地の位を保つたので、此點は置碁では唯一の大場となつて居ります。

（二）、白七に押し、黑八、白九と狹く守つた時は、黑も十と守るのが本手で、此形では黑イに廣く打つ手は、無理であります。若し斯ふ廣く拓きますと、白はロと綽ね、黑八、白ニ、黑ホ、白ヘと切る手があつて、碁が紛はしくなり、黑としては面白くありませぬ。

第二十二圖　（一）、白七と出、黑八白九に切る手は、碁を六ケ敷して、其間に黑の應手如何により、其隙に乘じようとする手段でありますが、此切は無理でありまして、若し黑が應手を誤らなければ、白九の石か、或は白七と切つた方の石が死となるのであります。

で斯く白に九に切られた時は、黑十に下る手が、分り易い善い手であります。白は次に十一に粘いてイの切りを防ぎ、黑十二、以下黑十六に下



手筋篇第二十二圖

り、白十七の時、黒十八とワリコミます。

此時に白ロに打てば、黒八、白ニ、黒ホ、白ヘ、黒トに打込んで勝。又白ロをホに打てば、黒ニ白八、黒ロと打て勝となります。

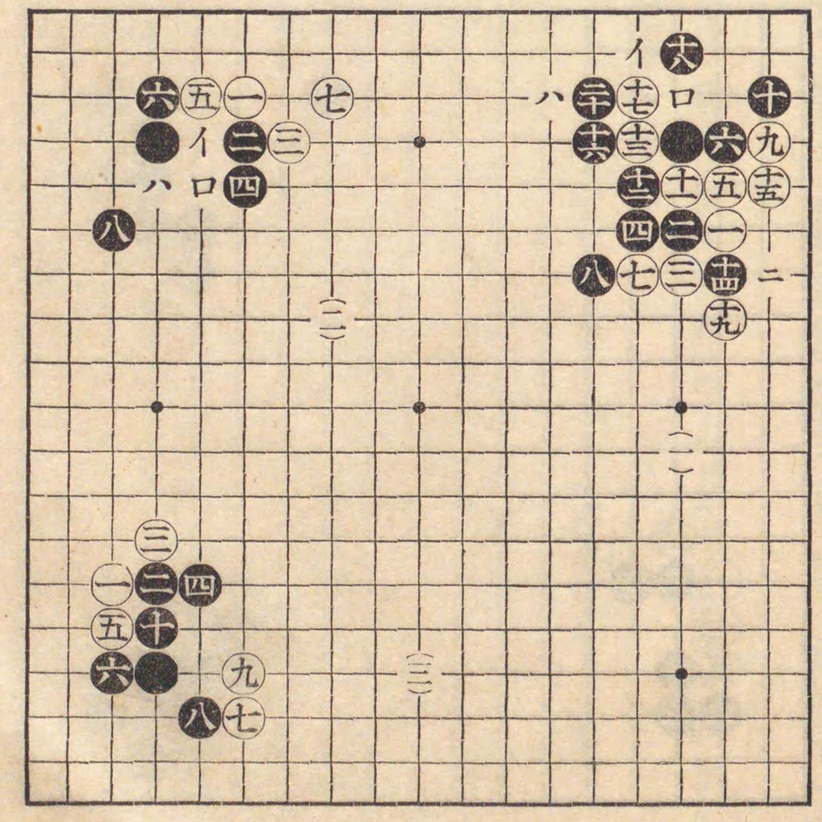
（二）、前の變化のつゞきで、圖の樣に白十五に下れば、黒十六、以下黒二十に下り、眼有眼無の攻合として、黒勝となります。

（三）、白先づ七に綽ね、黒八の時、次に白九、十一と出て切る時は、黒も先づ十二と切る手が善い手であります。以下十四まで振替りとなりて、此替りも、黒優つて居ります。

（四）、白十三に綽れば、黒十四以下、黒十八と打て一目を切提つて居ります。次に白十九と綽れば黒二十と提り。又白十九の手を二十に打てば、黒十九と行び、之は前よりも白の惡い形となります。

第二十三圖　（一）、白七に押し、黒八、白九に綽ね、黒十の時に、白出切りを打てば、黒は同じく十四と切る手が善い手であります。白十五黒十六、白十七、黒十八、白十九の提、黒二十の替りとなります。又此變化の中、白十九をイに打ちますと、黒ロ、白八、黒ニと打て黒勝となります。

（二）、白七は堅い手で、之は後にイに出、黒ロ、白八と切る手を狙つて居ります。故に黒も八に狹く打て、此切に

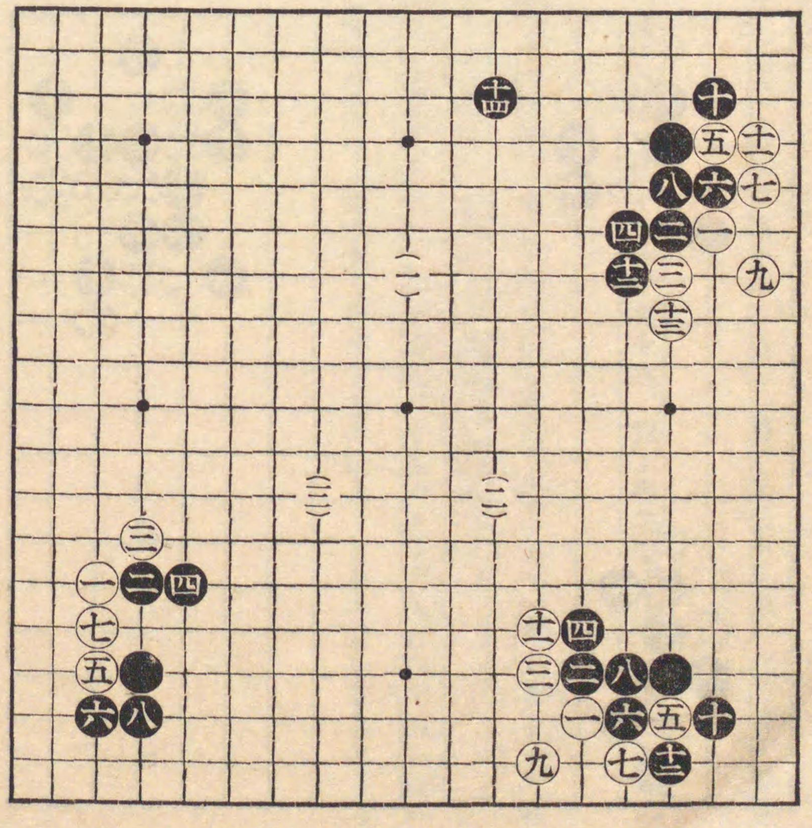


手筋篇第二十三圖

備へ、且つ隅を確にしたのであります。

(三)、白七と、猶一方から掛つて來た時は、黒八に尖附白九、黒十と粘いで居るので之で黒の形は隅にも根據を持ち、又外にも發展し、且つ白を兩分して居り、形として少しも申分はありませぬ。

第二十四圖　(一)、白五に附けた時は、黒は圖の樣に六に綽込む手と、今一つ(三)の樣に六と隅から約へる手とあります。圖の樣に六に綽込んだ時は、白は無論七と打ち



手筋篇第二十四圖

黒八、白九、黒十と打ちます。白十一に粘げば、黒十二の曲りを打ち、後に十四に拓くので、之は附定石の中、極く普通に見る形であります。

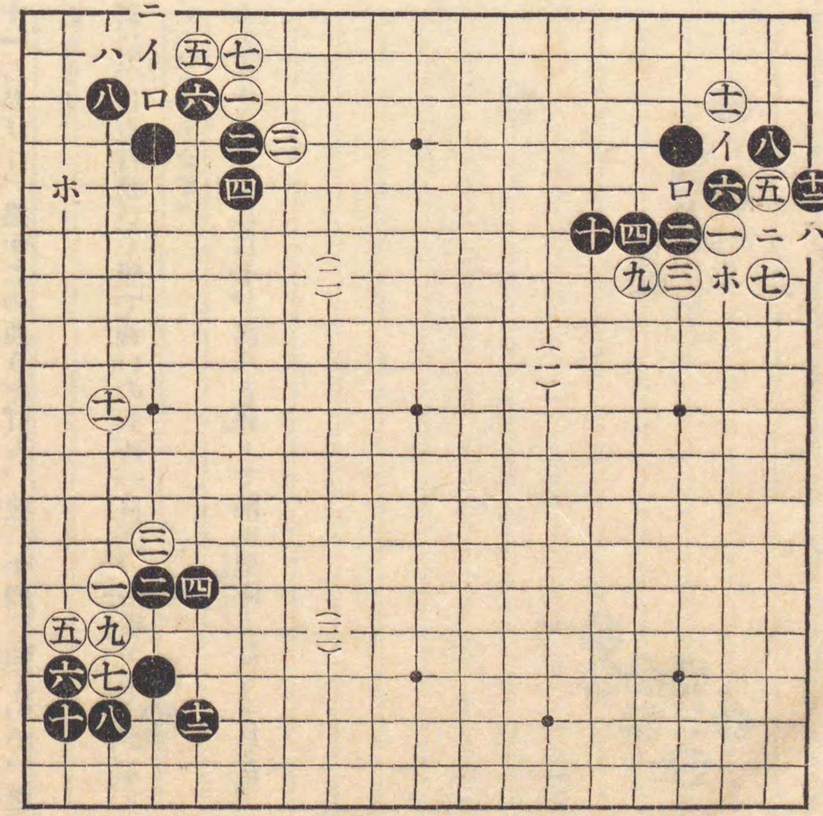
(二)、白十一に押せば、黒は十二に一目を打拔いて居て善いので此一目は、損益からばかりでなく勢の優劣から見ても、非常に好い石であります。

(三)、黒は六と隅から約へる事もあります。次に白七、黒八と至りて隅は黒確となりました。

第二十五圖　白五に尖めば、黑は六に尖附ける手と、八に附ける手との二つの應手があります。黑六に尖附けた時は、次に白イに當りとしますと、黑ロ、白七、黑十一となり、二十四圖(一)、(二)と同形となります。

又圖の樣に、白七に掛粘げば、黑八に約へます、白九、黑十、白十一と覗いた時、黑は先づ十二に綽を打つのが手順であります。

次に白に八と劫を打たれる手はありますが、前にも説明



手筋篇第二十五圖

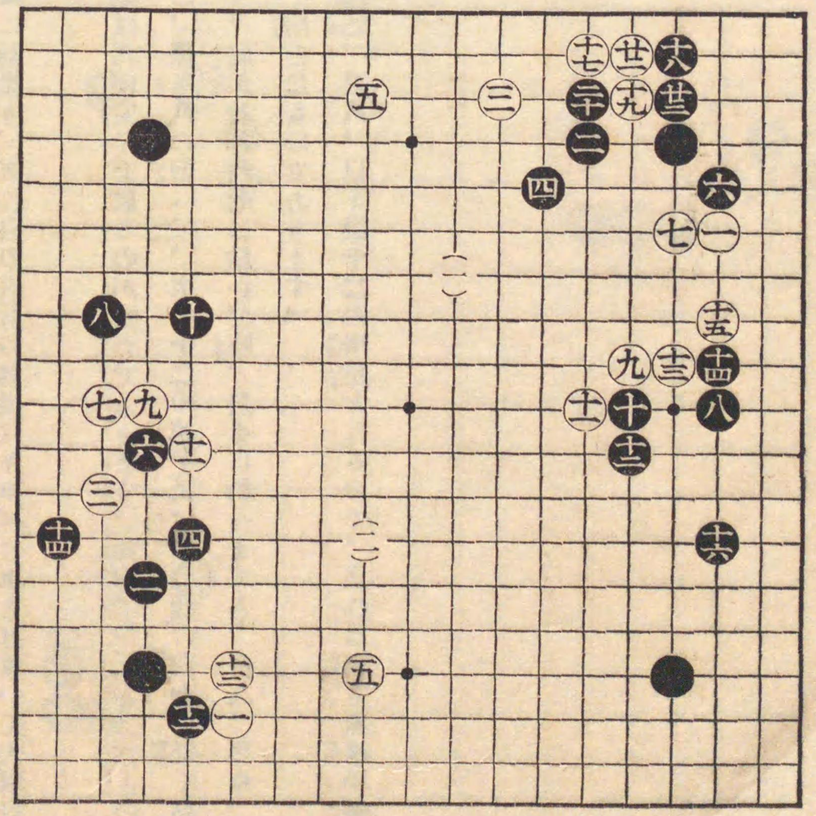
致しました通り、斯かる劫は、黑二に劫提り、次に白の大低の劫拋はキカズに**ホ**と打拔いて大層好いのであります。

(二)、白七と堅く粘いだ時は、黑は八に尖んで居るのが定石であります。此形で(一)と(二)との相違は(一)では白七に掛粘いだ爲に、黑は八に約へて、次の十二の綽を見。圖の樣に白七と堅く粘げば、黑も八に守つたのであります。處が若し白七に粘いだ時、黑イに約へますと、白八、黑ロ、白八、黑二、白ホとなり、白は隅で活となるのであります。

(三)、黑六に附ければ、白七に綽込、黑八、以下黑十二の掛粘となるので、之れは双方無事平穩の分れとなります。

第二十六圖　（一）、黑二と一間に應ける手もあります次に白三と猶一方から懸れば黑は圖の樣に四に尖む手と、今一つ五に夾んで白を攻める手とあります。

黑四に尖む手は、極く確かな應手でありますが、然し次には劇しく白を攻める意味を含んで居ります。圖の樣に白五に打てば、黑六に尖附、白七、黑八と三間に夾み、白九黑十と打ち、白を攻めながら隅を固くするので斯うなると黑四の尖みも、双方を隔てゝ

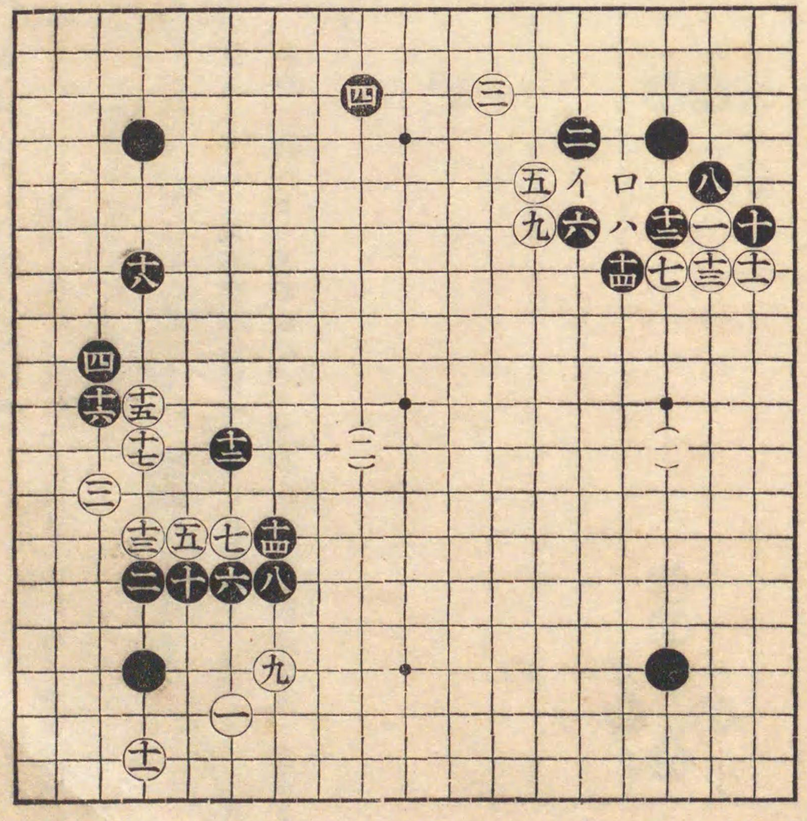


手筋篇第二十六圖

居る大切の一着となつて居ります。

（二）、又圖の樣に白五に守れば、黑六にカケ、白七、黑八、白九の時、黑十と打つて同じく上隅を地にする事が出來ます。

第二十七圖　（一）、黑四に攻め、白五と掛けた時、黑六の飛は手筋であります、白七でイに出、黑ロ、白八に切りますと、黑十二、白十四、黑七となつて、下の白一は大層惡い手となつてしまひます、故に白は此出切を含んで、七



手筋篇第二十七圖

に尖み、黑も八と應けたので、此七、及び八は共に手筋であります。

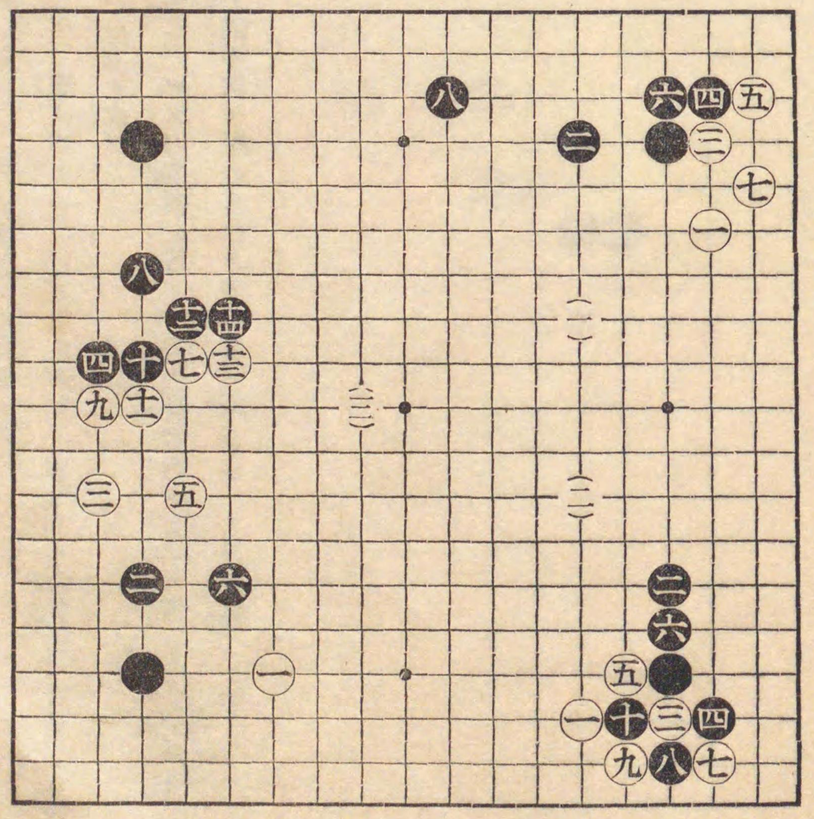
次に白九で、若しイに出ますと、黑十と下から綽ね、白ロ、黑十一となり、又白ロの手を十一に約へますと、黑十二、白十三黑ロに打つて黑は好い形となります。

（二）、白七に押し、黑八、白九と尖んだ時は、黑は十に粘ぐ手が一番確かであります。

黑十二は、變化に富んだ好い手筋であります。で此着手の意味を簡單に說明致しますと、白の五、七を一旦十三に接續さして、次に十四に約へようとするので、之を單に黑十四に曲り、白十二となるよりは、大いに優つて居ります。

第二十八圖　（一）、白三に附け、黑四、白五と二段綽する手もあります。此手の意味は、前にもありました通り只白一を堅くしようとする丈で、少しも黑を攻める意味はありませぬから。隨つて黑も其形は堅くなり、双方無事の分れとなります。

（二）、白三、五は劫含みの手でありますが、然し圖の樣に直に、白七と劫を仕掛ける手は、黑八、白九、黑十の劫提となつて、此劫は大層大きい處でありますから、白の大



手筋篇第二十八圖

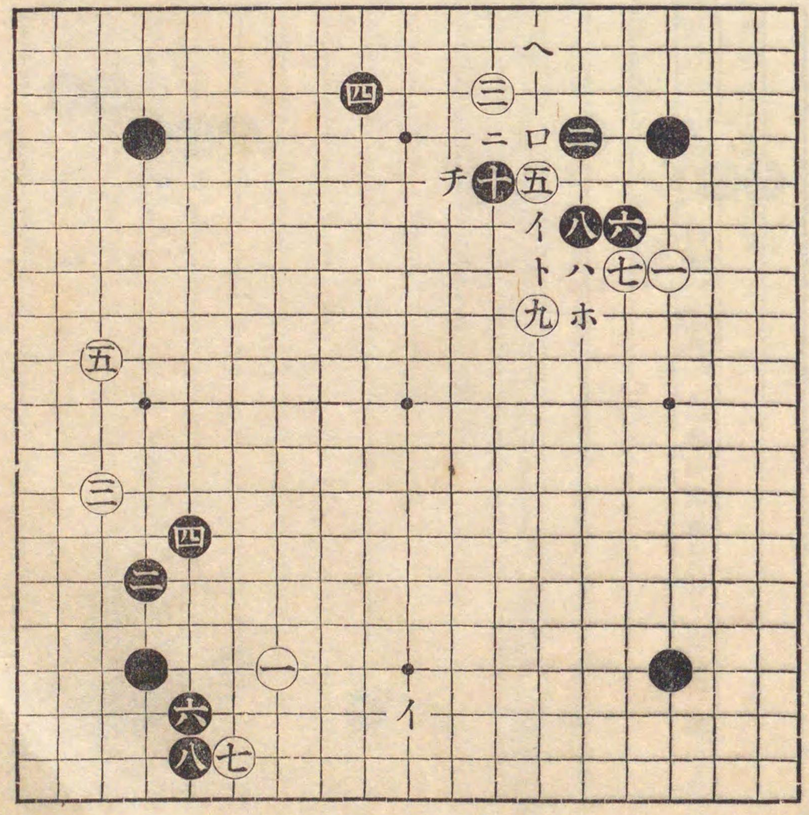
抵の劫抛はキカズに、黑三に劫勝粘とされて、白は面白くありませぬ。

（三）、白一の二間高掛りに對しては、黑は二と一間に應ずるのが、普通で、此高掛りに對する應手としては、二の手が一番宜いのであります。

白三に打てば、黑は是非四に夾擊し、白五、黑六と打ち、以下黑十四に押しつけるので、此形は黑としては、紛れなく、又自然に上隅の地を堅められますから、斯うなつては黑優つて居ります。

第二十九圖　（一）、白五に掛けた時は、黑は先づ六に斜走に出で、白七、黑八と打ちます。次に白九に打つた時黑十の附けるのが手筋で、此手に對し、若し白ロに引けば黑イと打ち。又白ロをイに打てば、黑八、白ホ、黑ロ、白ニ、黑チ、白ヘ、黑トに突出します。

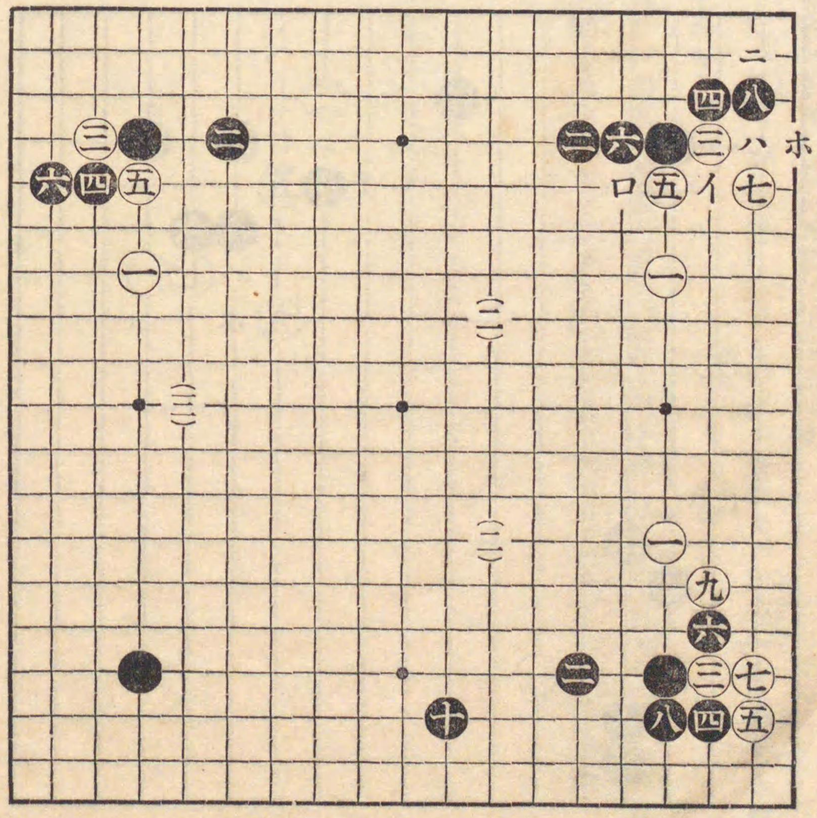
（二）、黑四は、白の二間高掛りの應手としては、堅すぎる打方でありますが、時には斯う打つ方が、紛れなく、善い事もあります。



手筋篇第二十九圖

白五に二間に拓いた時は、黑はイと夾む方が、本手であります。が又圖の様に六、八と打つ手も、堅固で、黑として斯う打つても決して惡い事はありませぬ。

第三十圖　（一）、白三に附ける手もあります、此手は隅の黑の地を縮め、白一を堅くする意味でありますが、然し黑も、圖の様に四に應け、白五、黑六、白七、黑八と下つて隅は堅くなり、又地の廣さも普通線以上でありますから此形黑は優つて居ります。



手筋篇第三十圖

又此變化の中、白五でイに引きますと、黑八、白五、黑ロに打ち。又次に黑八の下りでは、八に當りとし、白イの時、手を拔いて他に打つ事もあります。

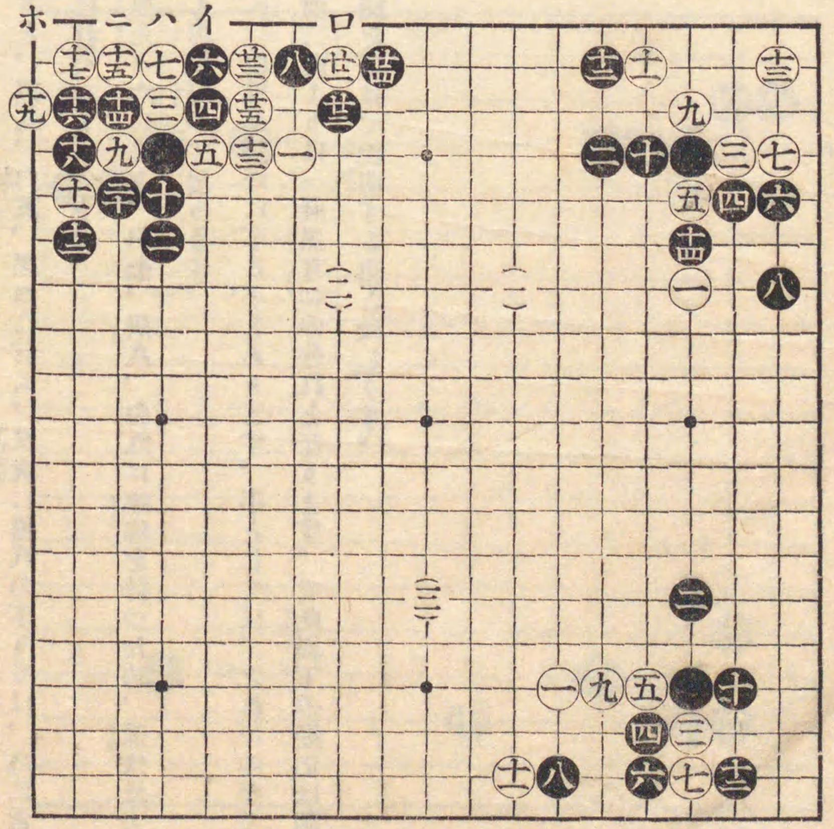
（二）、白五に二段綽する時は、黑先づ六に當り、白七、黑八、白九に連絡を計つた時、黑は此方面は其儘にして、十と拓いて、之も黑が優つて居ります。

（三）、黑は手强く四と外から約へ、白五、黑六に下る手もあります。手としては、之れが本手で若し以下の應手を誤らなければ、前二圖よりは一層黑有利の分れとなります。で此以下の變化は割合に複雜して居りますから、次に圖を分けて說明する事と致します。

第三十一圖　(一)、黑六の下りに對し、白は同じく七と此石にソッて下つて居る手が、一番變化多く、好い手であります。

で此時には、黑は八と一間に飛ぶ手が善い手であります。白次に九と綽ね、黑十、白十一、黑十二、白十三と隅に活きた時、黑十四と打つて五の一目を征に取ります。

(二)、白十三と、隅には手入れをせずに、圖の様に粘ぎますと、黑は十四に切り、白十五、黑十六に打ちます。以

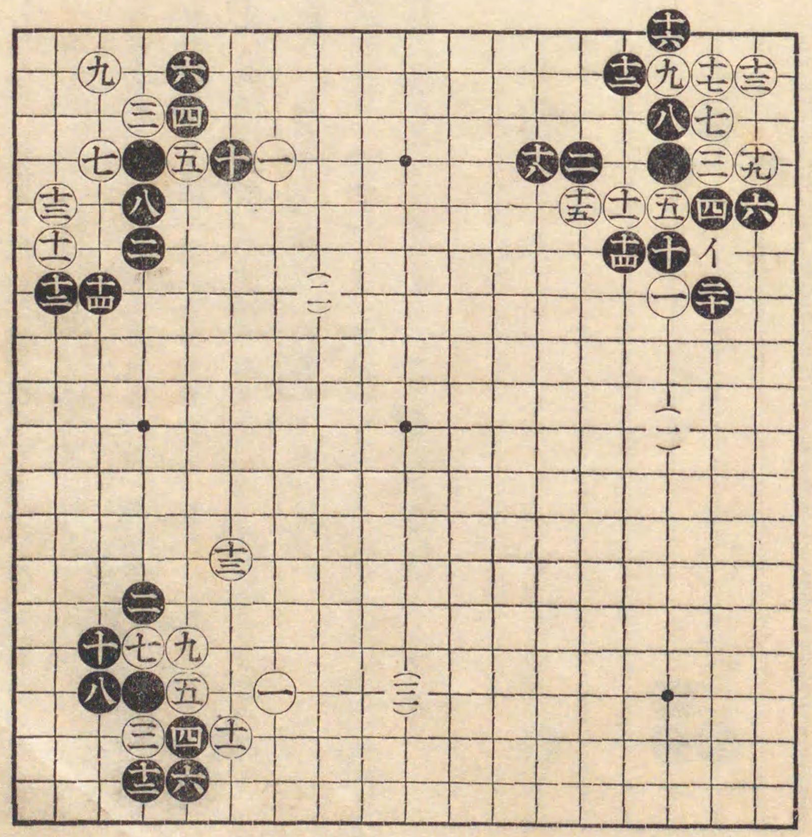


手筋篇第三十一圖

下白二十一に附ければ、黑は此一目を提り、四、六の二目を捨てゝ宜いのであります。又白二十一の手を二十二に尖みますと、黑二十一、白二十四、黑イ、白二十五、黑二十三、白ロ、黑八、白ニ、黑ホに打つて黑勝となります。

(三)、白九に粘げば、黑十白十一、黑十二となるので此分れも黑有利であります。

第三十二圖　(一)、白七に打てば、黑八に約へます、次に白九に綽ねた時、若し直に黑十二と約へますと、白イ



手筋篇第三十二圖

黑十七、白十三、黑十六、白十九となつて、此四、六の二目を提られます。故に黑は先づ十と打ち白十一の時、黑十二と約へたので、斯う打てば、黑四、六の二目は安全であります。

白十三以下、黑十八と行び、白十九と約へて、隅を活の形とした時、黑二十と綽ねたので、斯うなつては白五以下の三目も弱く、且つ隅もまだ活ではありませぬから、黑大いに優つて居ります。

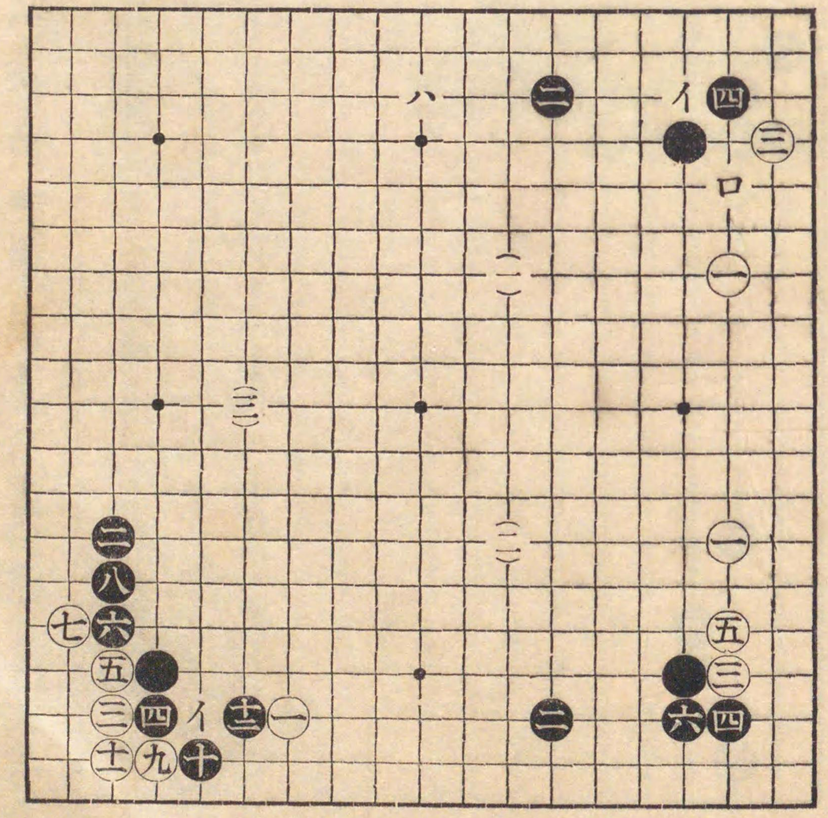
（二）、白七、九と打つた時の變化は前圖に比較して簡單でありまして、黑は十と一目を提り、白十一、黑十二、白十三、黑十四と打ち、外を圍んで黑の形は確かであります。

（三）、之も同じく、白七に綽込みし以下、黑十二まで、黑は斯う應ずるの外なく、又之迄の形も黑は三の一目を抱へて、隅に十數目の地を持つて居りますから、黑有利の分れであります。

第三十三圖　白一と大斜走に懸れば、黑も低く二と大斜走に受けるのが定石となつて居ります。

白三は無雜作な手の樣でありますが、黑からロと尖まれる手を防ぎ、且つ隅を先手で消す手で、時には斯う打つ事もあります。

之に對して、黑は四と尖むのが普通の應手となつて居りますが、此手は又手を拔いて他に打ち、白四に尖めば、黑イ白ロ、黑ハと拓いて居ても惡しくありませぬ。

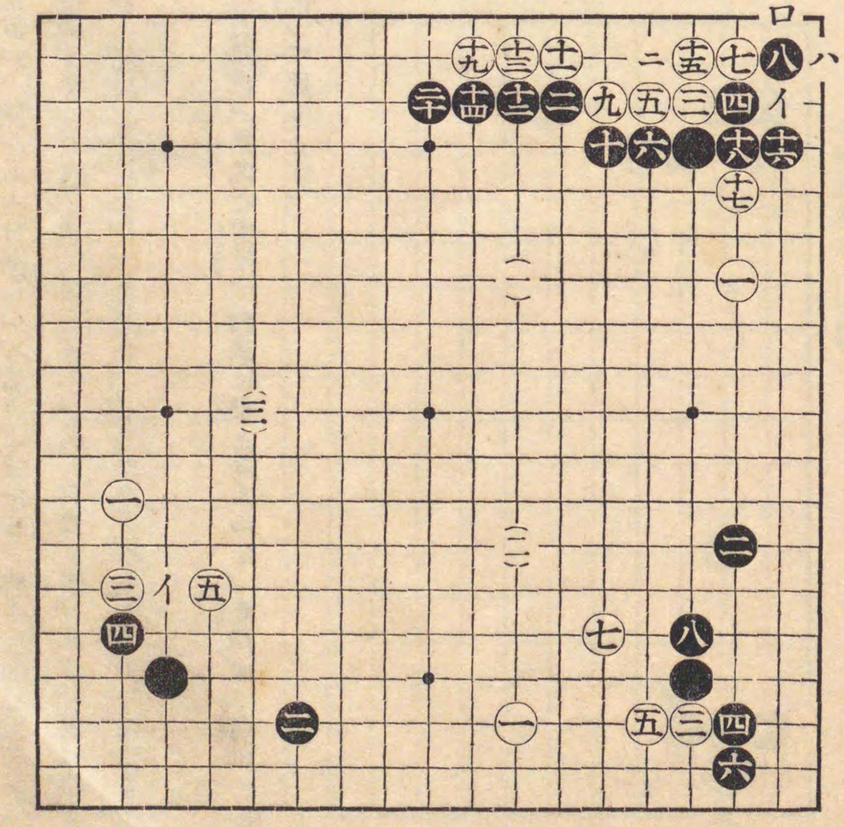


（二）、白三に附ける手もあります、此時には、黑は四と隅から約へ、白五、黑六となるので、此形は双方無事の分れであります。

（三）、白三に打込む手は、白一と大斜走懸りになつて居る形では、多く惡手となつて居ります。夫れは、白十一の粘までとなつた形で、白一が若し十二にありますと、黑イに粘となり、幾分黑の形も惡しくなりますが、圖の様に白一にある時は、黑に十二と好便に、掛粘がれる形となるからであります。

第三十四圖　（一）、白三に打込む時は、黑四と隅から約へ、白五、黑六、白七、黑八と二段に約へます。此時に白若しイに切り、黑十八、白ロと打ちますと、黑十五、白八、黑ニと打つて二目提ります。

又圖の様に白九に打てば、黑十、白十一、黑十二と打つて、何處までも白を約へつける形に打つので、二十までの結果、白先手で隅に活となりましたが、黑は外側が非常に厚い形となりました。



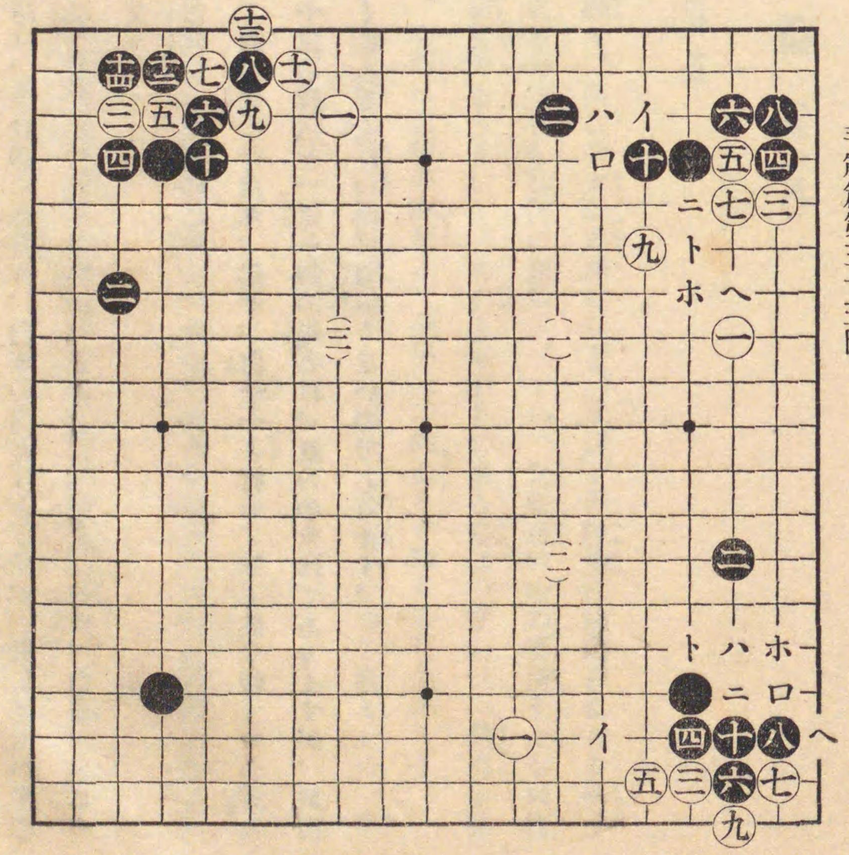
手筋篇第三十四圖

（二）、白一の大々斜走掛りは、位置が、隅から大分隔たつて居りますから、此手は隅で損得を爭ふと云ふより、寧ろ中の邊の形勢を主とする時打つ手であります。次に白三に附ければ、黑は堅く四と隅から約へ、白五、黑六、白七、黑八と應けたので、之で、隅の黑地は確かとなり、又白も中に形勢を得た形となりました。

（三）、白三と、再び小斜走に懸つた時は、黑四に尖附、白五に飛となるので、此飛は、白が一にある時は、イに行びるより、幾分優つて居ります。

第三十五圖　（一）、大々斜走の懸りでは、白三と低く走る手もあります。此時は黑四に附けて隅を守り、白五、黑六と隅から應け、白七、黑八となります。

白九の時に、黑十の應けは前圖（二）と同意味でありまして、此手は、白から十と附けられ、黑イ、白ロ、黑ハ、白ニと約へらるゝ手を防ぎ。且つ黑は斯う打つて置いて、後に黑ホ、白ヘなれば、黑トに斷切る、筋を狙つて居る手であります。



手筋篇第三十五圖

（二）、白三と、深く隅に走つた時は、黒は四に突當り、白五の引となりますが、若し此五の手で六の方に行びますと、黒五、（若し征の惡い時はイ）、白ロ、黒イ、白八、黒八に附越、白十、黒二、白七、黒ホ、白ヘ、黒トに打ちます。

（三）、白三と、直に隅に打込んだ時は、黒は四に約へ、白五、黒六、白七、黒八と二段に約へる手が此形では善い手筋であります。圖の樣に、白九、黒十、白十一と打ち、以下黒十四までの替りとなつた時に、其形を見ると、白十三の打込と、黒十四の提とは、互角の分れてありますが、只白一の一着があまり此打込の石に近くにある丈に、白は面白くないのであります。

地取篇（其の五）

八目の布石

第五局第一圖　白一の小斜走懸り、黒二の大斜走應けなど、又以下の變化は前定石にある通りでありますが、此布石の研究は、之等の定石を如何に應用すべきか、又全面の中の要所々々を如何に巧みに占領すべきかについての研究でありまして、布石と定石との異る點は、定石は一局部の變化及び手筋を知るのでありますが、布石は之等の應用と、全局面の釣合とを知るのであります。

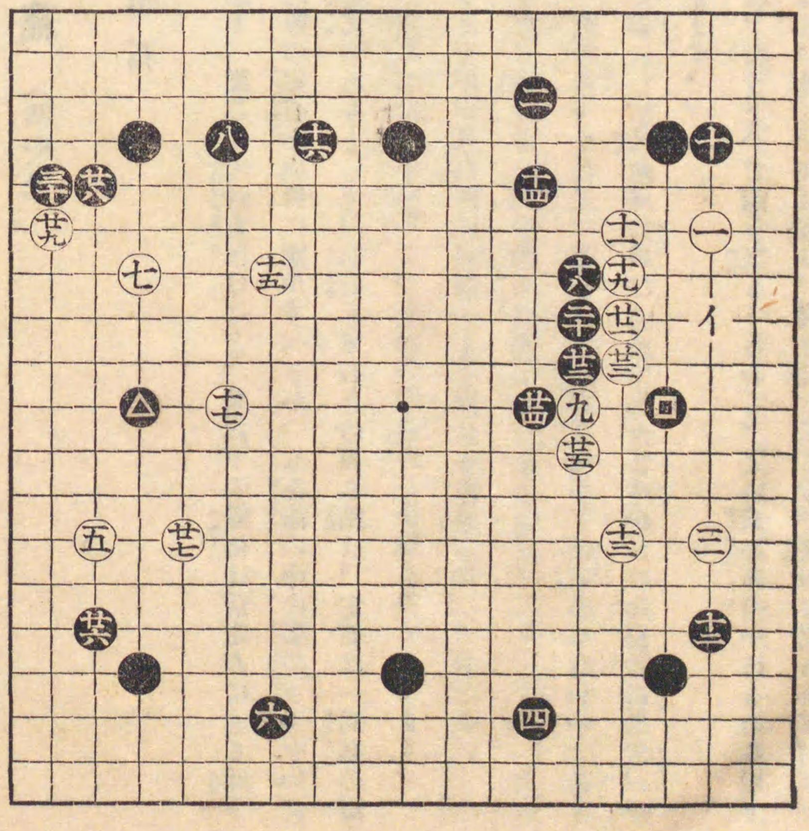
次に白三、黒四、前と同樣でありますが、只白三は、白一より隅に一路遠くなつて居る丈に、中邊に向つては便利の位置にありますが、隅には一程の効力は無いのであります。

斯樣に、此一と三とには、一得一失がありまして、是非は、只之丈の形では定めにくいのでありますが、布石の順序としては、隅を先にし、次に邊に展びるのでありますから、此意味に於て、一を正着とし、三を次とするのであります。

黒十は、白一と小斜走にある時は、斯う下つて隅を堅くするので、之は前定石の中にもある通りでありますが、若し白三とある時には、黒は十二に尖み、隅を堅くする方が優つて居ります。

黑十八以下、二二、二四に綽ねて、黑回の一目を捨てる手は、黑は八目も置いて居りますから、無事平穩に、地取りで終局すれば勝となりますから、斯う打つたので、若し之が四目以下三目、二目の置碁となりますと、斯く一子を捨てゝは黑損でありますから十八では強くイに打つて、黑回を活動するのであります。

次に黑二六の尖み、白二七黑二八と尖んで隅を堅くし、黑△を放棄したのも、前十八以下の趣向を追ひ、黑△を捨



三十手

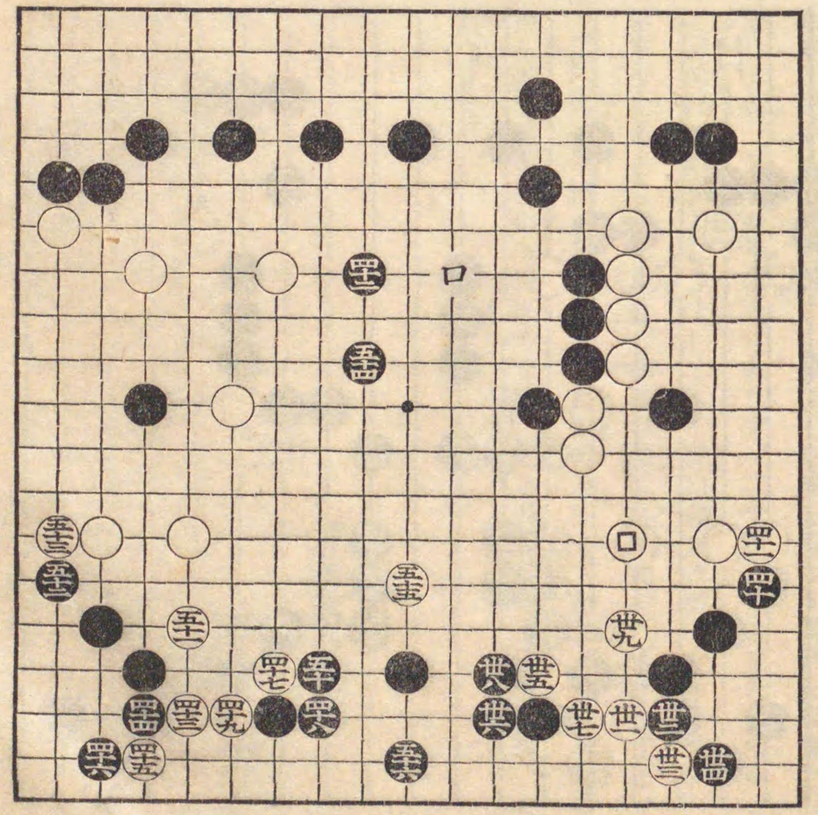
地取篇第五局第一圖

て、隅を堅くしたのであります。

第二圖　白三一の打込は上にある白回(前圖十三)の石と相應じ、黑の缺點を狙ひ、打込んだ手であります。

で此石に對し、黑は如何應けるのが宜いかと云ふと、圖の樣に三二と約へて、先づ隅を堅くします。黑は斯う打つて置けば、假令此石を逃げられても隅は安全であります。

黑四二の時には、既に隅と邊とは、形が決まりまして、最早好點もなくなりましたか

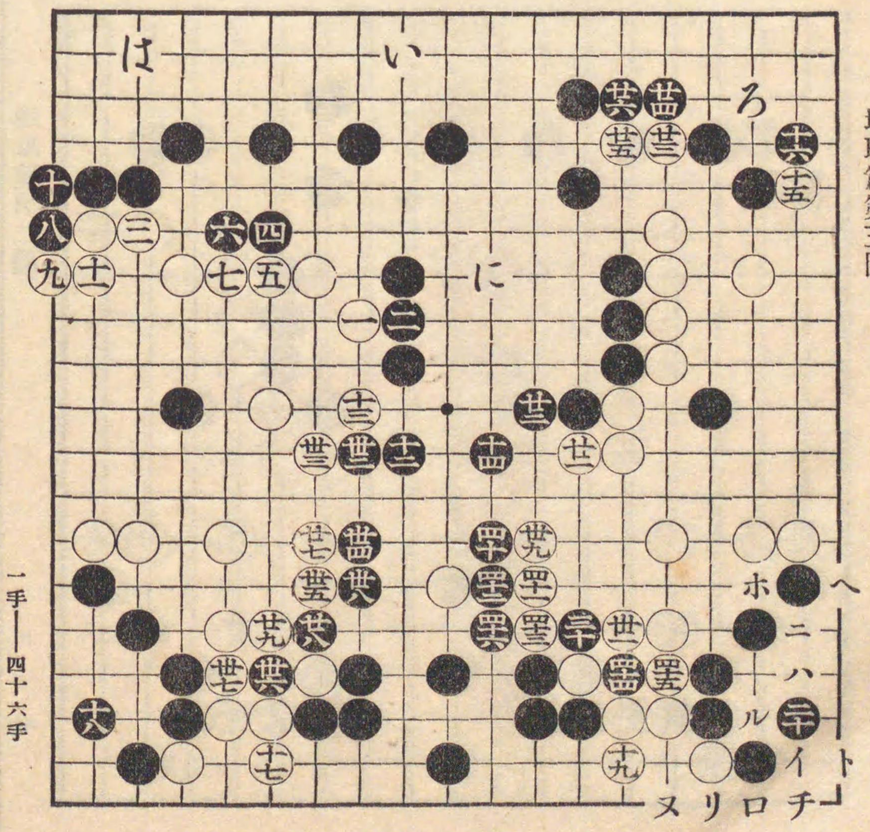


三十一手——五十六手

地取篇第二圖

ら、今度は、中に向ひ黑四二に打ちましたので、此點は中に打つとすれば、一番善い場所で此一着でロの方面に十數目の地を圍ふ事が出來ます。斯樣に黑五六は、極く確かな手で、八目の碁では、安全第一に打つて居つて、勝は確かであります。

第三圖　黑二十の守りは之を怠つて白からイに附けられるのを防いだ手であります。若し此手を打たず白からイに附けられると、其結果は如何なるかと云ふと、此時に



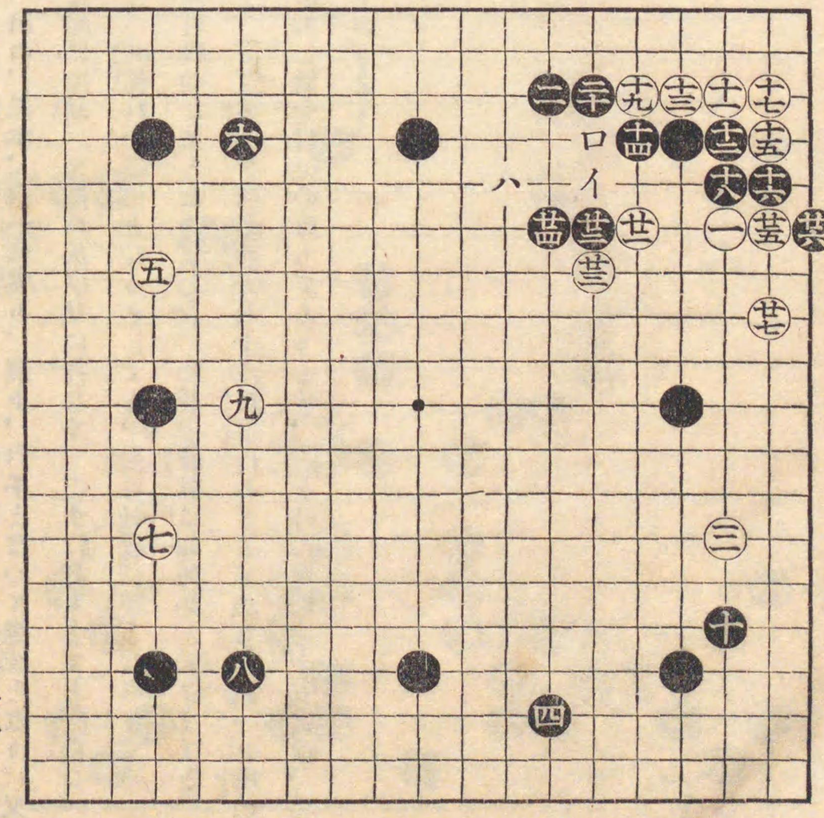
地取篇第三圖

黑ロに下りますと、白ハ、黑二十、白ニ、黑ホ、白ヘに盤り、黑ト、白チとなつて黑死となり。又初めの黑ロをリに綽ますと、白ヌと應けて劫。又黑ロ及びリに打たず、二十に打ちますと、白ロ、黑ル、白ハと打つて一眼となるので、其何れの變化となりましても、黑は劫或は死となります。

此碁は黑四六の約へまでゞ、大略打終つた形となりました。此碁の勝敗は如何かと云ひますと、黑は上邊及び兩隅「い」、「ろ」、「は」、「に」等一ヶ所の地で七十八目位はありますから、此一ヶ所の地で、白の全部の地、六十八目位に對し猶十目位の餘りがあります、之と外の黑地三十五目位、合して四十目以上は黑の勝となる譯であります。

第六局第一圖　白十一の打込以下の變化は前の定石の中にもある通りで、此形は白二七の飛までゞ一段落となつて居ります。

斯樣に、白は直に隅に打込むのは、却て早く黑をして其形を固定さしてしまふ樣なもので、白としてはあまり善い手段とも云へぬが、然し、又隅に打込む時機を前圖の樣に黑から十二と締られ、隅を守られるので何らにしても、白としては此隅に對する打方は六ヶ敷いのであります。此手



地取篇第六局第一圖

二十七手

順の中、黑二二の附けは、前の定石の中にもある通り肝要の處でありまして、黑若し手を拔けば、白からイに覗かれ、黑ロ、白ハと飛ばれるか、或は征によつては、ロと切られる手があるので、黑はこれらの意味を防ぐ爲に、イと掛粘ぐより、一歩進んで二二と附けたのであります。

又之れ以前の配置で、白九と帽子に掛けた手であります。白としては、六目以上の碁では、圖の樣に兩方から掛り（圖の樣に白の二間高掛りに限らず、小斜走、或は大斜走懸りの時も同じ）、次に帽子に掛けて黑の應答を見、臨機の手段を取つて、勝敗を決しようとする、白の常套手段であります。

之に對して、黑の應手に二種あります、一つは前の布石にもある通り、此一目を捨て、其代りに隅を占領して、無事に勝を取らうとする打方と、今一つは直に此一目を活動し、却て攻勢を取つて一氣に勝を得ようとする手であります。

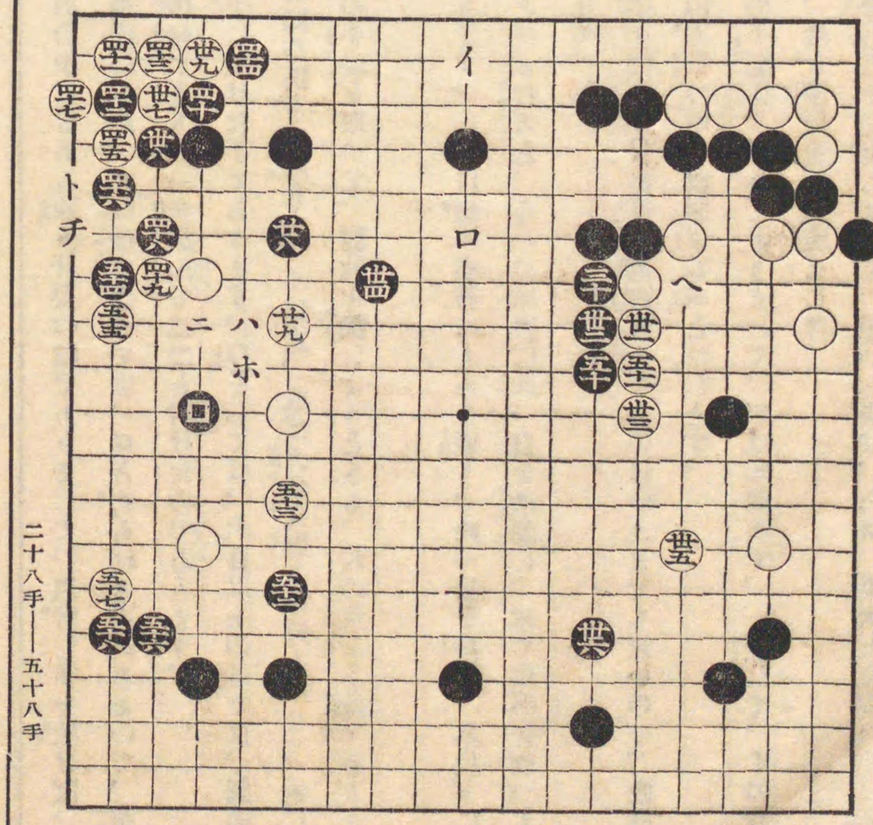
何らの方法を取つても、黑は應手を誤らなければ、無論勝となるのは云ふまでも無いので、此處では、其二の應け方を八目と六目の布石の中で說明する事と致します。

第二圖　黑二八から三四までの手順は、巧妙でありまして、黑は此數着で、一擧して、イの方面の地を堅くし、又ロの方面にも、地を圍む事が出來ました。

で此手順の中、白二九の手で、若し三十に押しますと、黑ハと掛け、白二、黑ホとなるので、此

形はロの方面の地を、白は破る事が出來ますが、其代り黒回の一目は連續し、且つ白の前圖五の石とニと並んだ二目を攻めることゝなるので、白としては、ロの地を破る位に、代へられぬ大きい處であります。

白三七と、打込んで後の變化は圖の樣に以下四九となる位のもので、此結果は、黒は隅の地を破られましたが、白四九までゞ黒先手となり、且つ黒トの下り、或はチの尖みも利く形で、回の地をセバメ

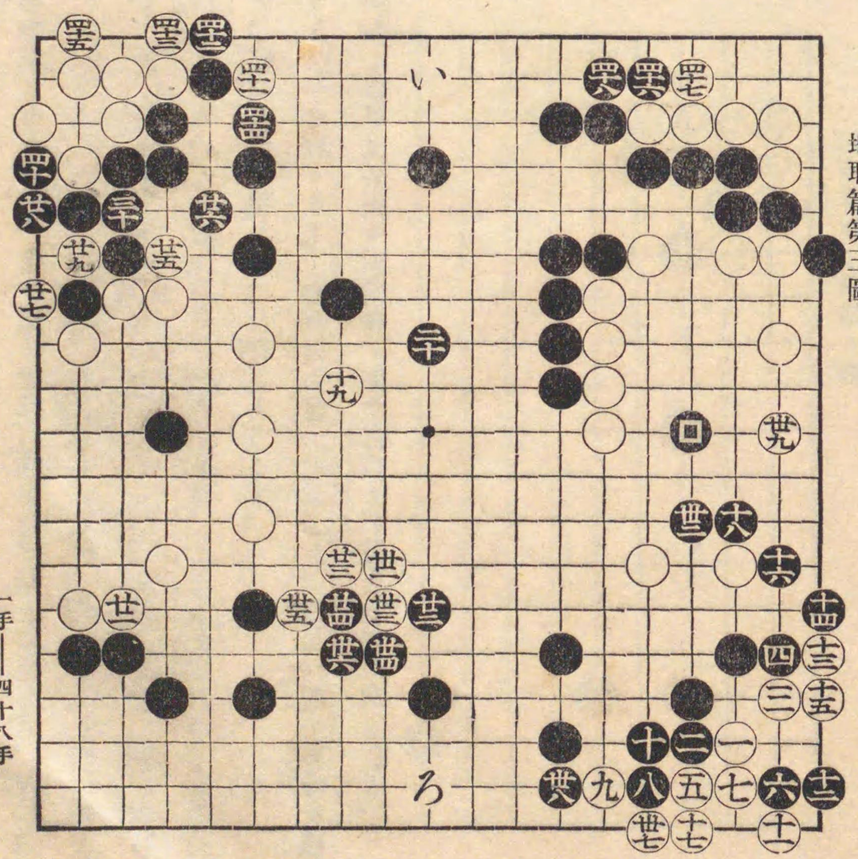


る事も出來ますから、之で黒惡しくはありませぬ。

第三圖　白一と、黒の堅い隅の中へ打込んでも、活丈は漸く得られますが、扨隅に活きた結果は如何かと云ひますと、却て黒の地を破つて損となるのであります。

何故かと云ひますと、其變化は圖にある通り、黒は此時二に約へ、白三、黒四、白五の時、黒六に置き、白七、黒八に約へます。

白九、黒十、白十一、黒十二となつた時、白若し只十五



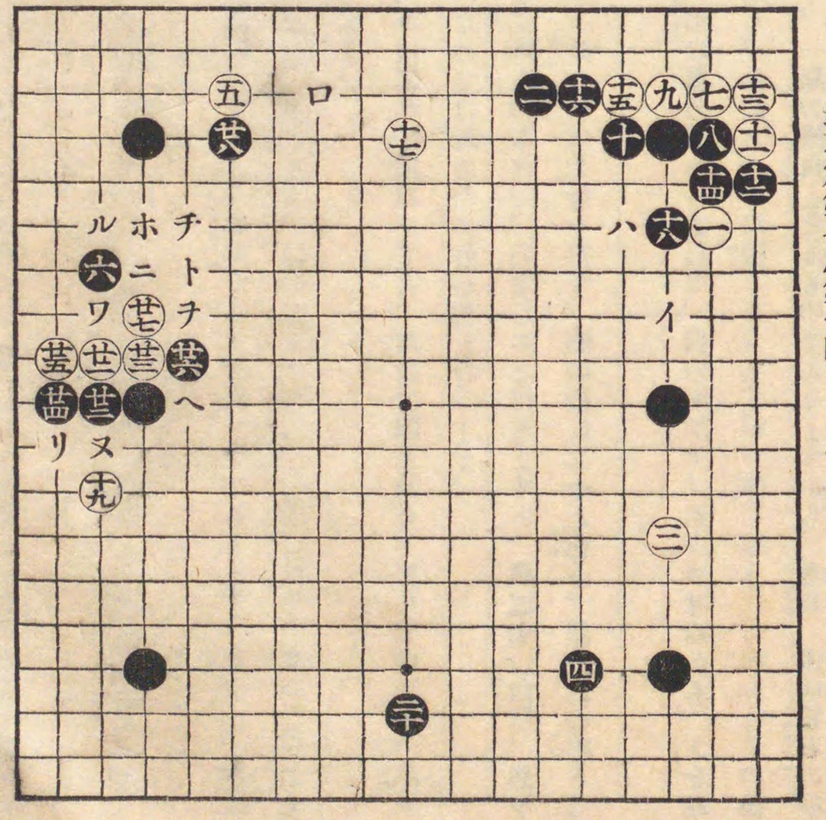
に下れば、黑十七に打つて死。又白十五を十七に打てば、黑に十五に盤られて死となります。故に白は、十三と綽ね、黑十四に約へ、白十五、黑十六、白十七に活となりますが、其時黑は十八に綽となるので、此結果を比較して見ますと、黑は隅を完全に守つたとして、隅の地約二十目。隅が地になりますと、㊀方面の邊の地は白地となるので此地の廣さが約二十五目。つまり此結果は、折角白は隅に打込んで活となりましたが、結局五目の損となつた譯であります。

扨此碁は黑四八まで、大略終りとなつて居ります。勝敗は如何かと云ふと、白は三隅の黑地を破つたけれども、又白に大きい地がなく結果は矢張り前同樣、四十目以上の敗となつて居ります。

第七局第一圖　黑六までの配置を終へ、次に七と直に隅に打込んで來ましたので、黑は八に約へ、白九以下黑十六の約へとなりました。

次に白は、前圖の樣に八に飛ばす、十七に打つて五を守り、黑十八に綽ねて此處を厚く打つたのであります。

此十八の綽は大層善い處で斯う打つて置きますと、此一隅は、非常に黑が厚い形となり、又イの方面は黑地に確定し、其上時機を見て、黑はロに打込んで白を攻める事も出



來ます。處が若し反對に、黑手を拔いて、白から**ハ**に飛ばれる形となりますと、白**十七**の一着が有効の石となつて、却て黑は攻められる形となります。

黑**二十**は、黑四に高くあり、且つ左の星との關係上、所謂大場で、此形勢では最好の點となつて居ります。

白**二一**、黑**二二**、白**二三**の時、黑**二四**の下りは、此形では大層善い手であります。此時に、白次の**二五**で、若し**二六**に打てば、黑は**二五**の盤となり、又白**二五**で先に**ニ**に附ければ、黑**ホ**、白**二五**黑**ヘ**と行、白**ト**、黑**チ**の押しとなります。

處が黑若し、**二四**と打たずに、先きに**二六**に綽ねますと、白は**二四**と綽ね、黑**リ**、白**二五**、黑**又**白**ニ**、黑**ル**、白**ヲ**となるので、斯うなつては却て白の好い形となります。

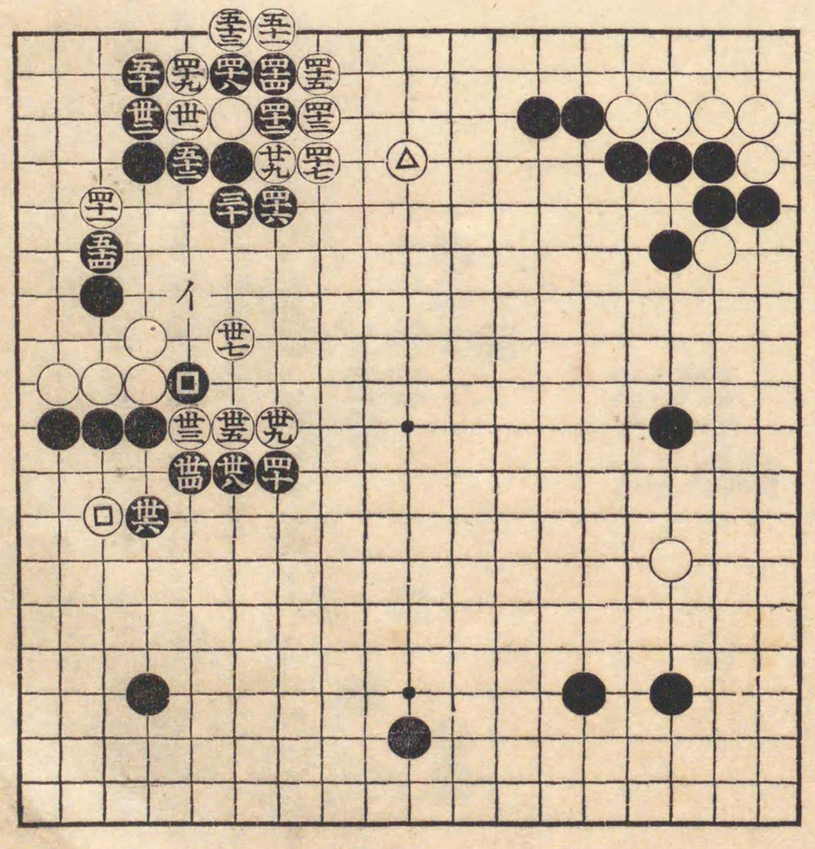
さて圖の樣に、白**二五**と約へ、黑**二六**と綽ねた時、白若し**ニ**と打ちますと、黑**二七**、白**ワ**、黑**ヲ**となつて、白の四目は死となります。故に白は止むを得ず、圖の樣に**二七**と曲り、黑**二八**の附となつたのであります。

で以上說明致しました變化は、只形の善惡でありまして、白の死活ではありませぬから、之を研究するにも、死活程直接の効果は無く、甚だツマラぬ樣でありますが、然し斯うした僅かな形の善惡でも、延いては全局の優劣となり、一局の勝負となるものでありますから、布石、或は定石の研

究の中では、此形の善惡を知るのが最も大切であります。

第二圖　黑**三十**と行び、白**三一**、黑**三二**に押へた手は隅を堅めながら、左邊の白四目を攻擊した手で、斯う云ふ形は布石には屢々見る處で、大層善い手筋であります。

白**三三**に切れば、黑は**三四**に綽ね、次に**三六**に掛粘いで黑は圓の一目を取られた代りに、白㊀を約へつけて居るので、形は互角でありますが、以下は黑**四十**に押となつて分り易い形勢となる丈、黑が優



地取篇第二圖

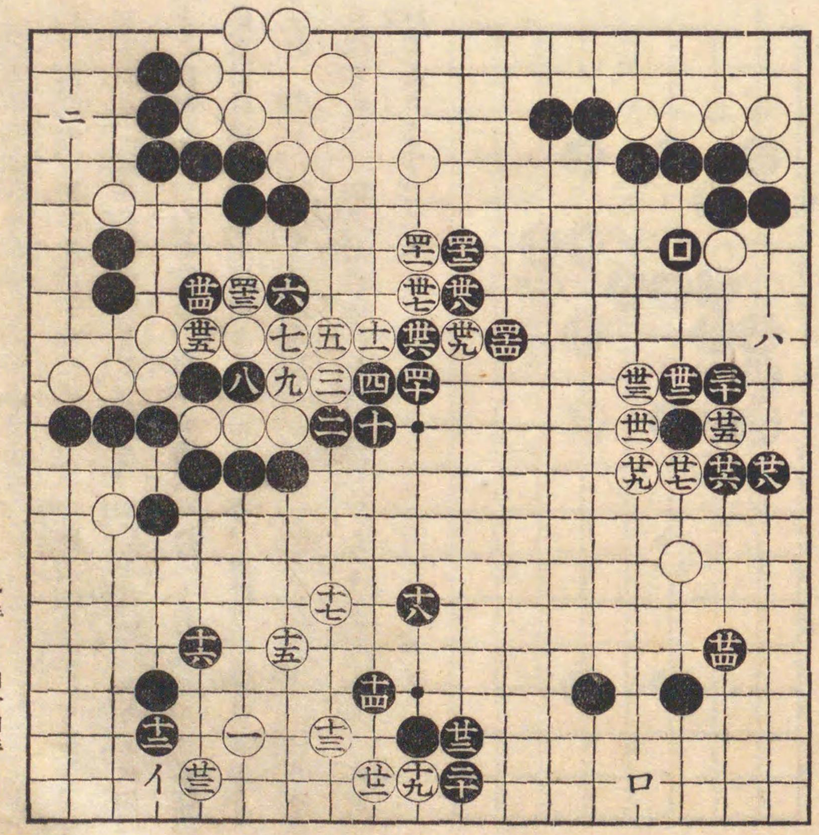
つて居ります。

白四一の打込に對し、黑四二の切は、此場合大層善い手であります。で斯う切を打つて、シボル手には形勢により、善い場合と、又惡い場合とあります、圖の樣に、白△の一目があり、又白四一の打込もある時は、白をコラシ、四一の打込を取る意味に於て、善い手となりますが、若し之等の石の無い時に、只切る手は、徒らに白を厚くするのみで惡い手となります。

黑五四に突當りで、白四一の一目は死となります、で此形、後に黑イの覗きを一着、打つて置けば一層安全であります。

第三圖　黑二、及び次の黑四の二段綽は、白を攻め、又中央の形勢を占める、善い手であります。黑十と粘ぎ、白十一、黑十二と下つた手は隅を占領しながら、白一を攻めたので、斯うなつては、地取りでも、又大勢から見ても共に黑は優つて居ります、故に以下は、只黑は、白を攻めながら、地を確定する樣に打てば、自然勝となる形勢であります。

黑十六と打つて、地を守り以下白二三に活を打つた時、



地取篇第三圖

一手——四十四手

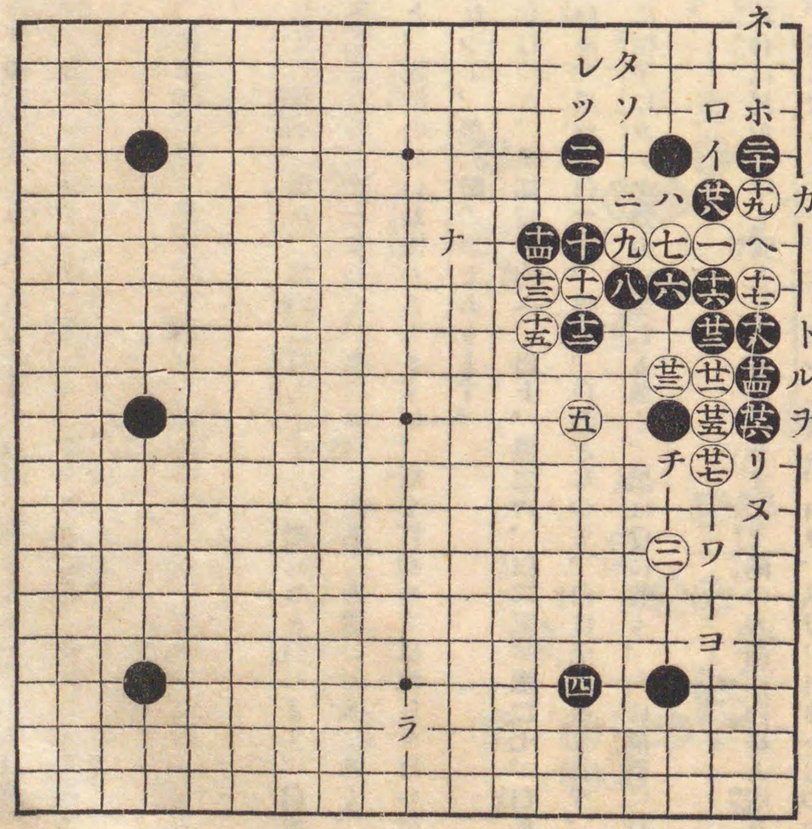
黑又二四に尖んで隅を守り、且つ二間高掛りの白を攻めたのであります。

白二五の時に、黑は二六に綽出し、白二七、黑二八と下つた手は、一方黑二四の尖みもあり、又一方黑㊀の方面は堅くなつて居りますから、此場合では斯う打つても、少しも危險はありませぬ。

黑三六と綽ね、白三七、黑三八と二段綽して、白を攻め、以下黑四四の抱へとなつて、この碁の大勢を見渡しますと、白二七以下の五目は殆んど黑石ばかりの中にあつて、何處で二眼を得ようと云ふ、あてのある石ではありませぬが、假りに之を無事に活きるものとしても地の廣さは白地は全部で約三十目、丁度黑イに約へるものとして、此方面の地一ケ所と同じでありますから、あと、ロ、ハ、ニの三ケ所丈黑勝となる譯であります。

第八局第一圖　白に五と帽子に掛けられる手は、前圖にも、屢々ある通りで、之は六目以上の碁では、斯う打つて變化を求めるより外に善い手は無いのであります。で此掛に對し、前圖では、黑は無事に此石を捨て、隅を堅くする手段を取りましたが、本圖は直に此石を逃げる、と云ふより寧ろ白を攻める意味で活動する手段を取つたのであります。

黑六に掛ける手は、稍急劇な打方でありますが、然し此



變化を一通り終りますと此戰は黑の有利の分れとなり、あとは却て打易い形となるのであります。

白七、次に白九と打ち、黑十の時、白十一の切は、黑を斷切り、戰とするには、如何しても斯う打つより外に手段はありませぬ。

黑十二に綽ね、白十三、黑十四、白十五の時、黑十六と約へつけたので、之で白一以下の三目と黑の四目と攻合の形となりました。

黑二十の時、白二一の手で、若しイに綽込、黑ロ、白八に打ちますと、黑はニと約へます。白ホと切ると大劫となりますが、然し黑先二八の劫提となつて、次には白に何處にも善い劫拋は無く、（前述の通り中盤すぎになりますと、死活の好い劫拋もありますが、斯く打初めでは決して好い劫拋はありませぬ）黑ヘに打拔きとなつて、黑大勝の形であります。

白二三の手で、若し二四に盤りを打つと、黑二三と約へ、白ト、黑二六、白二五、黑二七、白ル黑チ、白リ、黑ヌ、白ヲ、黑ワ、白イ、黑ロ、白二八、黑ホ、白カとなつて、白は活となります。

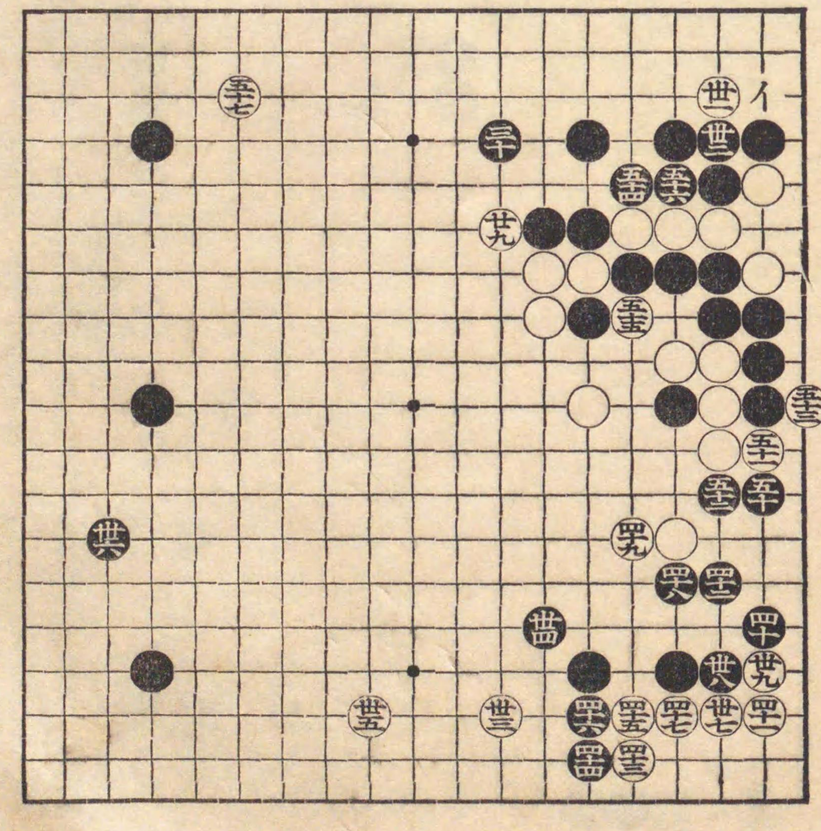
然し斯うなつては、初めに白五に帽子にカケタ効力は少しも無く、黑はワに盤り、次に黑ヨに打つて、隅も堅くする事が出來ます。

白二七の時、黑二八と打つて此攻合は黑が二手も勝となつて居ります。又隅の方面は白ロと覗き黑イ、白ホ、黑カ、白タに打てば、活になりますが、次に黑レに打ち、白ソ、黑ツ、白ネとなつた

時、黑は先手を取つて、ナ、或はラの大場に打ちます。

第二圖　白三七の打込は少々無理でありますが、六目の碁で、止むを得ず斯う打込んで黑の眼を取り、此黑を攻めようと云ふのでありますが然し黑は圖の樣に、強いて打込んだ白を取らうとせず、只外から此石を包圍して外を厚くすれば、自然外の白にも影響して來ますから、從つて黑は眼を作るにも、困難ではありませぬ。

黑四八と打つて一眼を作り



地取篇第二圖

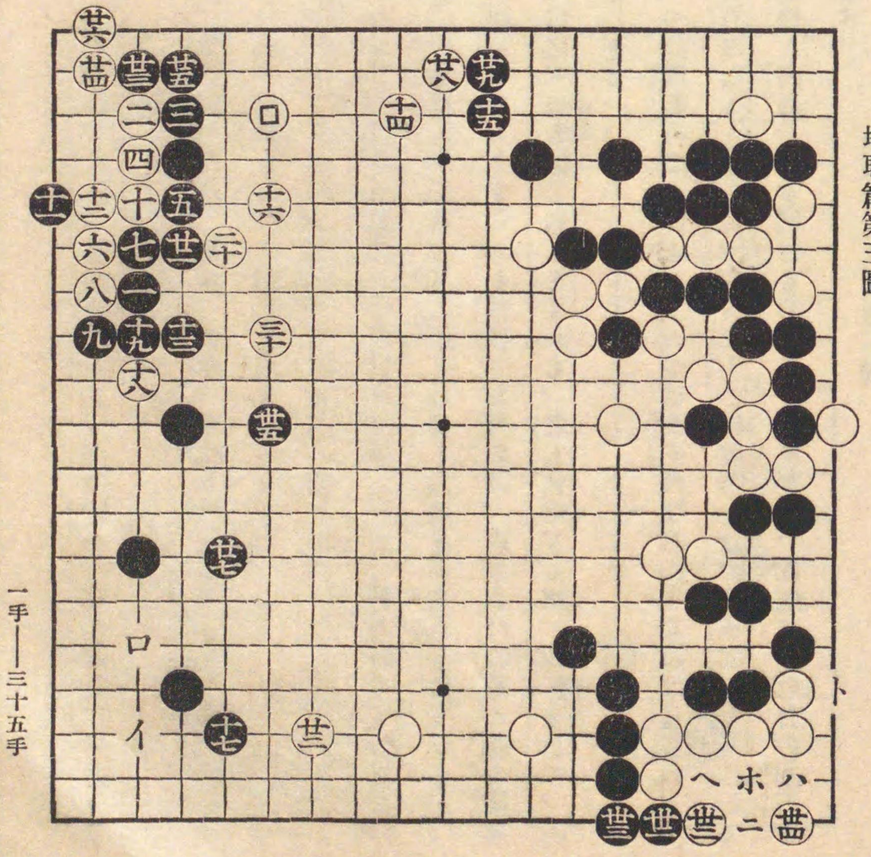
二十九手——五十七手

次に黑五十、五二と打つたので、斯う打つて置けば、此石は安全となります。

白五五、黑五六と打つて白五目を當りとしたので、斯う打つと、次に白イの盤もキカズ、白三一の一目の、活も無くなつてしまひます。

第三圖　黑一、白二の打込、以下黑十三まで、互に通常の應答を經て後、白は二五の處に綽を打たず、只十四と拓いて居る方が此形では白㊀の石に影響せず優つて居ります。

黑十五は善い處で、斯う打つと、黑は此處に二十五目の地を確定する事が出來ました黑十七の手で、廣く二二に拓く手は、一見此方が善い樣でありますが此手は、あまり隅が廣すぎて、却て白にイに打込まれて此地を破られてしま



地取篇第三圖

一手——三十五手

ひます。

黑**二七**は中央の模様を消す手で、又白から**イ**或は**ロ**と打込まるゝ手を防いで居る善い手であります。

白三四で、若し手を拔きますと、黑三四、白**ハ**、黑**ニ**、白**ホ**、黑**へ**と劫となります。又白**ハ**の手を**ト**に打ちますと、黑**へ**に打込、白**ホ**、黑**ニ**と打つて同じく劫となります。

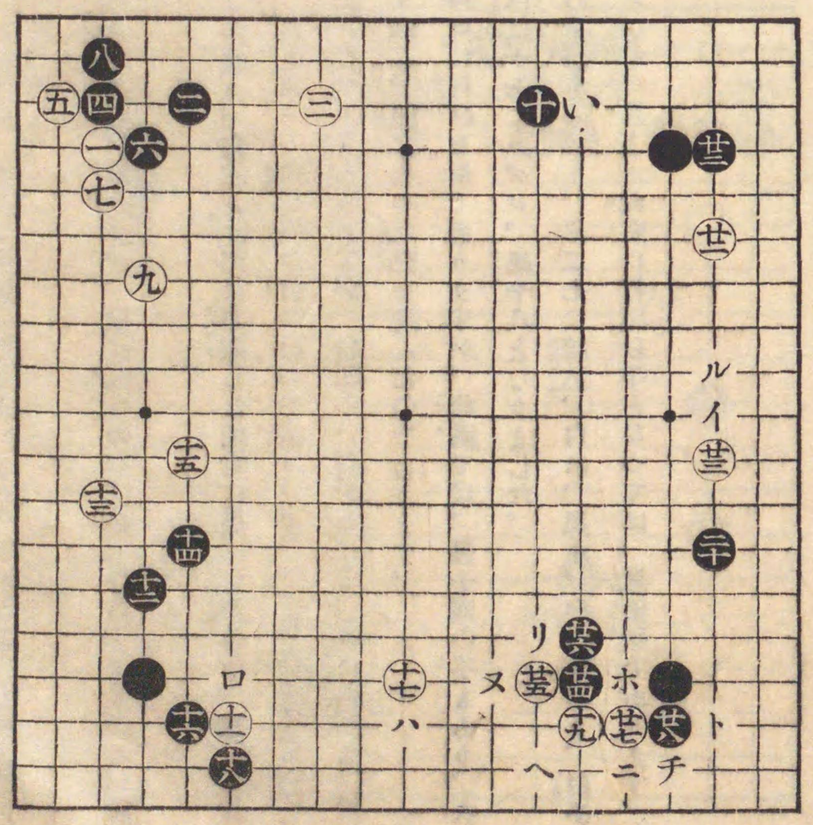
此碁の形勢は白地合して三十五目位、黑地は右上隅丈で、白五目の提を合せて、三十七目位、丁度白の全部の地と同じでありますから、左隅邊の黑地三十五目は黑勝となつて居るのであります。

第九局第一圖　布石は、前卷には九目と、五目。又之迄で八目と六目との布石を終りました。殘りは七目、四目、三目、二目の四つでありますが、七目は、九目置碁、或は六目置碁と略々同意味でありますから、省略し、又四目は五目と似て居りますから、之も省略する事と致しまして、次には三目の布石を研究する事と致します。

で此三目と二目の布石とは、一つは置碁の定石により、一つは互先の定石によらねばならぬ、つまり互先と置碁の兩方を兼ねた布石でありますから、四目以上の純置碁とは、多少其趣を異にして居ります。で此二つも前四目、五目と同樣、略々似たものでありますから、此處には三目の布石を揭げて二目は省略する事と致します。

次に互先の布石となりますと、之は置碁の樣に、星に先きに數目を置いてかゝるのと異り、双方互角で對戰するのでありますから、其打方も堅く守るより、進んで戰ふ手段を選ばなければならぬので、之については第八卷に互先定石と共に研究する事と致します。

先づ三目の布石では、一隅に黑の置石なく、此處は白先手でありますから、白としては、此一隅に據りて、形勢を占める手を工夫しなければな



地取篇第九局第一圖

二十八手

らぬので、若しも此處が互角の分れとなると、他隅は皆黑の置石ばかりで、到底白として勝を得る望は無いのであります。

從て黑としても此隅を互角の分れとする事が出來れば、他は味方の石ばかりでありますから、勝とするのも容易いのであります。

で白は先づ**一**と小目に打ち、黑**二**の懸り、白**三**と二間に夾擊した此時に黑は此形の中一番分り易い變化を選び四に附け、六に綽ね、八と下り、隅に活を打つたのであります。（次卷互先定石參照）

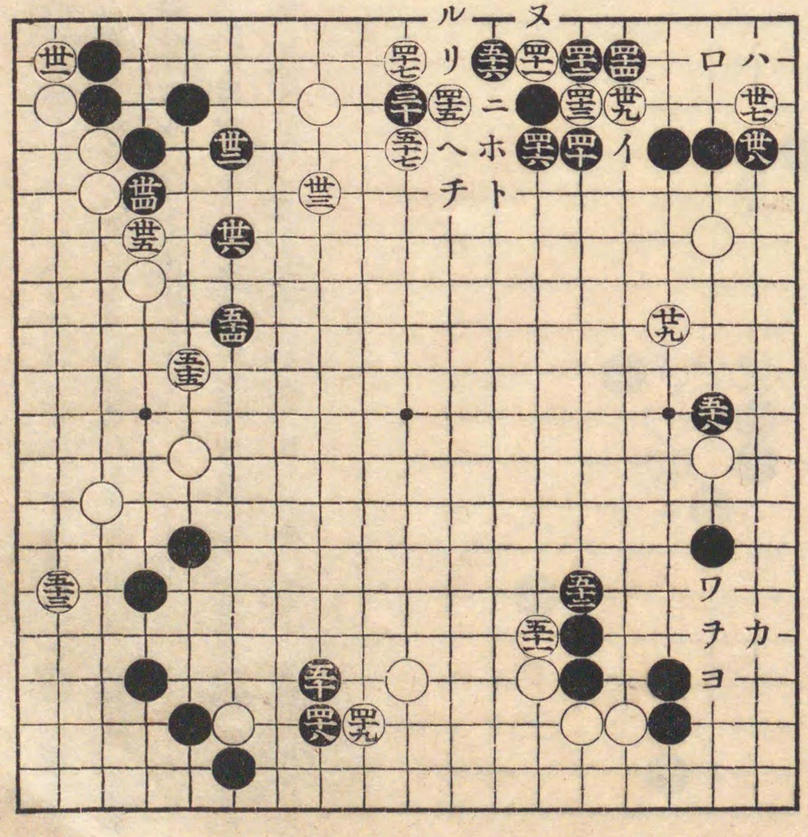
黑**十**は、此形では、**イ**、或は**十三**と打つ手もありますが、白**三**の一着があつて、次に白から「**い**」にカヽられるのが善い處でありますから、黑は先づ此點を選んだのであります。

黑**十六**と尖附けた時、普通は、白**ロ**に行びる形でありますが、此處では、黑**十四**の手もあり、次に黑から**ハ**に攻められますから、白は**十七**にハズシ、黑**十八**となりました。

白**二七**で、若し**二八**に附ける定石を打ちますと、黑**二七**に綽込、白**ニ**、黑**ホ**、白**ヘ**、黑**ト**、白**チ**黑**リ**、白**ヌ**の時、黑**ル**の打込となるので、黑より此處に打込む手となつては、黑優勢であります。

第二圖　白**三一**に打てば黑**三二**と尖むのが定石であります、白**三三**の時、黑**三四**、次に**三六**と打つので、斯う打てば、黑は確かに眼の形となつて居ります。

白**三七**を先に打ち、次に白**三九**に打込めば、黑は**四十**に尖み、白**四一**、黑**四二**と綽出す手が好い手であります。で之は白**三七**の置が先にあるからで、若し此置無しに、先きに白**三九**と打込みますと、黑**イ**、白**四三**、黑**四六**、其時白**三七**と打込めば、黑**ロ**、白**三**



地取篇第二圖

二十九手——五十八手

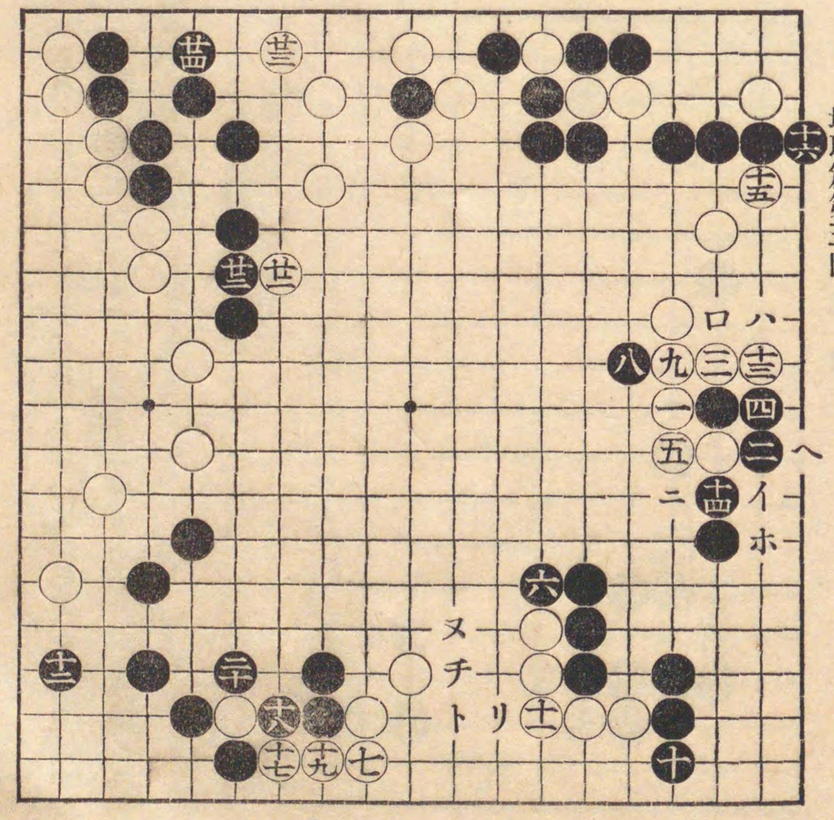
八、黑**八**と打ちます。

白**四五**は手筋であつて、此形に於ける妙着であります。黑**四六**を若し**五七**と行びれば、白**四六**と切り、黑**二**、白**五六**、黑**ホ**、白**ヘ**、黑**ト**、白**チ**と打ちます。又黑**四六**を**五六**に打てば、白**リ**、黑**四七**、白**四六**、黑**二**、白**ホ**、黑**又**、白**八**、黑**ル**、白**イ**と逃出します。

黑**四六**は、白の之等の手を防ぐ、極く確かな手であります。白**五一**と押し、黑**五二**の行となれば早速次に白から**ヲ**と打込む筋は無くなりました、若し白**ヲ**に打込めば、黑**ワ**、白**カ**、黑**ヨ**と打つて白に手はありませぬ。

第三圖　黑**二**、手筋であります。白**三**の手で若し**四**に切れば、黑**三**、白**イ**なれば、黑**九**と突出し。又白**イ**の提を**十三**に打てば、黑**ロ**、白**八**、黑**五**、白**十四**、黑**二**、白**イ**、黑**ホ**、白**ヘ**、黑**九**と打つて、何れの變化も黑優つて居ります。

黑**六**の時、白若し**七**を手拔きしますと黑直に**ト**に打込む酷しい手筋があります、その時白**チ**なれば、黑**リ**、白**十一**、黑**七**と盤り。又白**チ**を**七**に下れば黑**チ**、白**又**、黑**十一**



地取篇第三圖

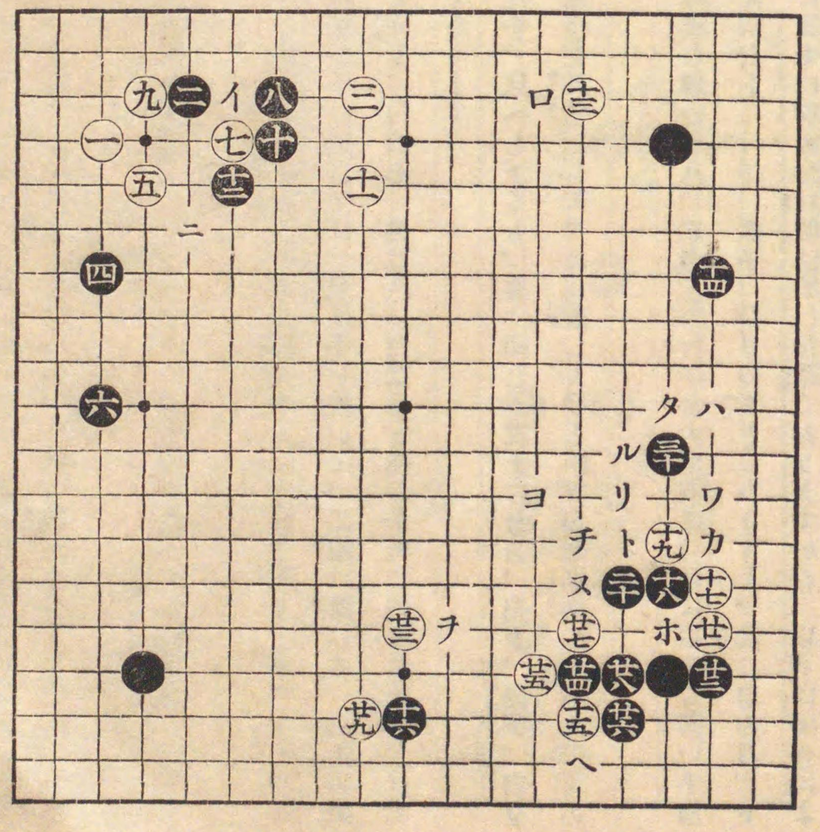
一手——二十四手

と切つて黑勝となります。

扨此碁は黑二四までゞ、大要打終つた形となりました。形勢は、中央の勢は白黑互角、又地の廣さは、白の全部の地、約五十目に對し、黑は約七十目、先づ二十目位の差でありまして、前の六目或は八目の碁に比較しますと、其勝の數はずつと少なくなります。

第十局第一圖　白三に、三間に夾んで黑二を攻擊すれば、黑は四に夾返し、白五、黑六に打ち、場合によつては黑二を捨てる打方が、一番安全であります。

白七の時、黑八を手拔して白にイと取りきらるゝ形は、幾分黑損でありますから、黑八、白九、黑十と打つたのであります。處が白若し七を打たずに、只九と尖附けた場合は、黑は二の一目を捨てる手もあります。即白七を九なれば、黑ロ、白七と二の一子を



地取篇第十局第一圖

三十手

取れば、黑**八**と打ち。又白**七**を**十一**に打てば、黑**二**、白**七**の時、同じく黑**八**の大場を占めて、黑優勢であります。黑**十六**は、**十八**に受けて居ても、惡しくはないが、又圖の樣に**十六**と三間に夾む手も、善い手であります。

白**十七**の時は、黑は**十八**と附け、白**十九**、黑**二十**と打つて一方白**十五**を攻めるのが定石であります。

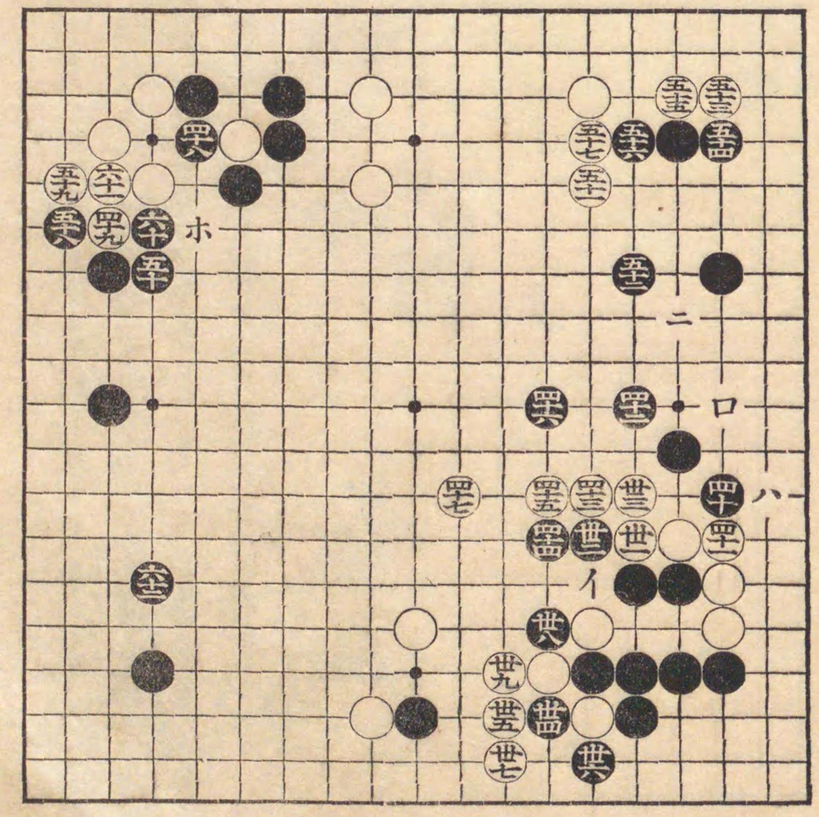
白**二三**は、黑の應手如何によりて、後に**ホ**の出切りを狙ふ變化のある打方でありますが、斯かる白**二三**の帽子の樣に黑に直接影響の無い手に對しては、黑は手を拔いて、**二四**に附けて、白**ホ**の出切りを防ぎ、白**二五**、黑**二六**と隅を守り、白**二七**、黑**二八**、白**二九**と黑の**十六**に迫つた時、黑は猶手を拔いて**三十**と白を攻擊したのであります。

で此變化の中、白若し**二七**を打たず、只**へ**と下るも、黑は同じく**三十**に打ち、白**ト**、黑**チ**、白**リ**黑**又**と打ち、白**ル**に打てば、黑は**三十**を其儘にして今度は劇しく**ヲ**と附け白を斷切つて戰ふのであります。

で此黑**三十**は前にもある通り圖の樣な黑の**十八**、**二十**と附行びた大形では、常に用ゆる善い手筋でありまして、前の變化の樣に、此時白**ト**に行び、黑**チ**、白**リ**の形となりますと、既に白の**リ**、**ト****十九**の形惡しく、黑としては、既に**三十**に攻めた目的は達した譯でありますから、以下は場合によつて此**三十**を捨てゝ他に打つ手もあり。又場合により黑**ワ**に覗き、白**カ**、黑**ヨ**、白**ル**、黑**タ**と打ち、白を攻めながら右邊の地を堅くする打方もあります。

第二圖　黑三四、三六と一目を打拔き、黑**三八**、白**三九**となれば、白からは、**イ**と切り手は無くなりましたから黑は次に**四十**に覗き、白**四一**黑**四二**と打つて白を攻めたのであります。

黑**四八**に一目提り、白**四九**黑**五十**と行び、黑は先づ此方



地取篇第二圖

三十一手——六十二手

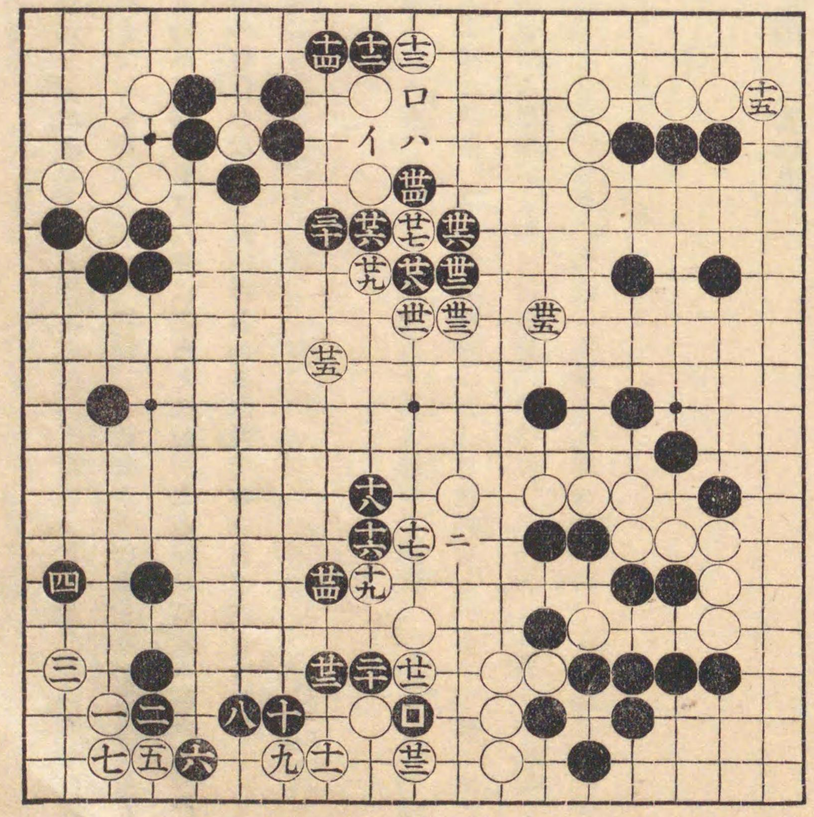
面を厚く打つたのであります。

白五一の手に對しては、通常は黑は五五に締る形でありますが、此處では、次に白ロと深く打込黑八、白二に打つて、却て黑四十、四二等を攻めらるゝ形となりますから、黑は五二に守り、白五三の時、黑五四と約へ、白五五、黑五六、白五七の時、先手を取つて黑五八、白五九、黑六十と當りを打つて白からホに尖み出さるゝ手を防ぎ、白六一の時に、黑は六二の好點を占領したのであります。

第三圖　白一に打込以下黑八までは、共に普通の應答であります。白九に斜走、黑十、白十一と打つた手は、隅の活を兼ねて、黑ロを確かに取つた善い手であります。

黑十二に附けました時、白十三を若し十四に打ちますと黑イ、白ロ、黑ハの替りとなるので、此替りは、黑は上が厚くなつて來ますから、優つて居ります。

黑十六は、次に二と附けて白を攻める意味と、又此手で左に大模樣を張る意味を兼ね



地取篇第三圖

て居る、布石では最好の手筋であります。

黑二四と一方を完全に封鎖した爲に、白は二五と深く敵地に打込んだのであります。で斯く白に深く打込まれた時は黑は守つて此處を地にするより、白を攻擊し、其響きで白地を消す方法を取る方が遙に優つて居ります。故に黑は先づ二六に附け、次に二八と綽ね、上の白地に迫りながら、白二五を攻めたので、此結果、黑三六の打拔となつては、黑大いに優勢であります。

基礎篇（其の八）

着手

第一卷以來、基礎篇の中で說明致しました、着手の活力、直線と斜線の別、行、尖、飛の石の活動、著手の要領、善い手と、惡い手とを知る簡單な方法、切と凝の形の別、位置による着手の善惡、形の用ゐ方と其得失、布石の手段、手筋と形等、種々に說明致しました意味は、つまり、盤に向つて次の一着を如何打てば宜いかと云ふ、大意によりて、之を色々な方面から研究し、說明したに過ぎぬのであります。

此次の一着の可否を知るには、前の色々の說明を了解し、應用するの外は無いのでありますが、此處には其等の大要を一括し、大體の着手の要領を說明して此基礎篇を終る事と致します。

元々着手は、一卷で說明致しました通り、同樣に直線上四方に、發展する力を持つて居りますが之等の平等に與へられた着手の活力も、一旦盤上に下されたとなると、彼我の形勢の關係によりまして、有効に活躍して非常に善い手となる事もあれば、又は反對に惡手となり、此手の爲に石の連絡を絕たれるとか、又大石の眼を取られて、死となる樣な結果を招く事もあります。

何故斯樣に、善い結果となり、又惡い結果となるかと云ひますと、云ふまでも無く、只着手の活力が有効に働いて居るか、否か、只之丈に盡きるのであります。

で着手の活力を活用するについては、二つの場合があります、一つは其石個々について見る場合つまり敵味方の石が接せずに單獨に打つ場合と、今一つは敵味方の石が相接し、之等の接する一つの連絡せる形の中へ着手する場合とであります。

初めの單獨に打つ石の善惡については、

一、布石の初めで、まだ空漠として居る盤面に着手する場合。

二、死活に際して、其石に點するか、又眼とする場合。

三、敵地に打込む場合。

此三つの場合があります。此三つの場合とも、其石の活力が、最有効に用ゐらるゝ點を選ぶのは云ふまでも無いのでありますが、其手段に至つては、形によりて、多少趣を異にして居ります。

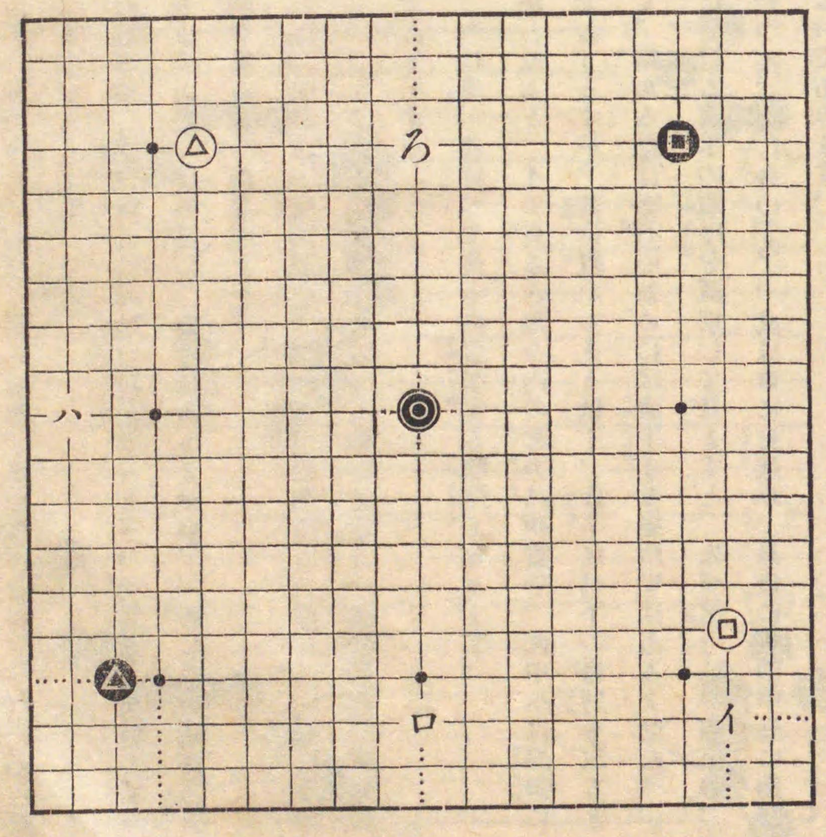
第百十五圖　先づ布石の時、單獨に打つ場合には、其位置によりて善惡は定まるのであります。最終の線で、初めから活力が三ノ(邊)、或は二ノ(隅)より無い場所は別として、其他の點では、活力は皆同樣、四つを持つて居ります。

其中で、中央◎の點は如何かと云ひますと、此點は四方に發展するには、最好の位置で、形勢を

張るには此點に優る處は無いが、しかしあまりに空漠として居て、勢力を獨占するには不適當の位置であります。

此意味に於て、隅或は邊は中よりは優つて居ります、其中でも、隅、黑回、△又は白回、△等の位置は、一隅に確かな勢力を張る事が出來る手で、之を假りに黑△について見るとしますと、黑は此一着手で、「……」內隅の一角には、容易に敵に侵入を許さぬ勢力を持つて居ります。

しかし强いて敵が侵入しよ



基礎篇第百十五圖

うとすれば、這入る事も出來ませうが、其代りに其石は、壓へられ、且つ攻められて、折角隅に這つても其効なく、却て惡い結果となるのであります。

で隅の次は、「ろ」、或はロなどの邊の第三線、或は第四線の順となります、此點も、點線にて示す方面には獨占的勢力を持つて居りますので、隅の樣に二方ではありませぬが、若し二着或は三着を費しますと、容易に其勢力の範圍を定める事が出來ます。

さて、中はどうかと言ふに、前に述べた通り、盤の端まで無限に、發展する力は持つて居りますが、しかし此三百六十一の盤上では、それ程有効に活用せらるゝものでもなく、彼我の石の關係により活力は或る程度に止まるものであります。

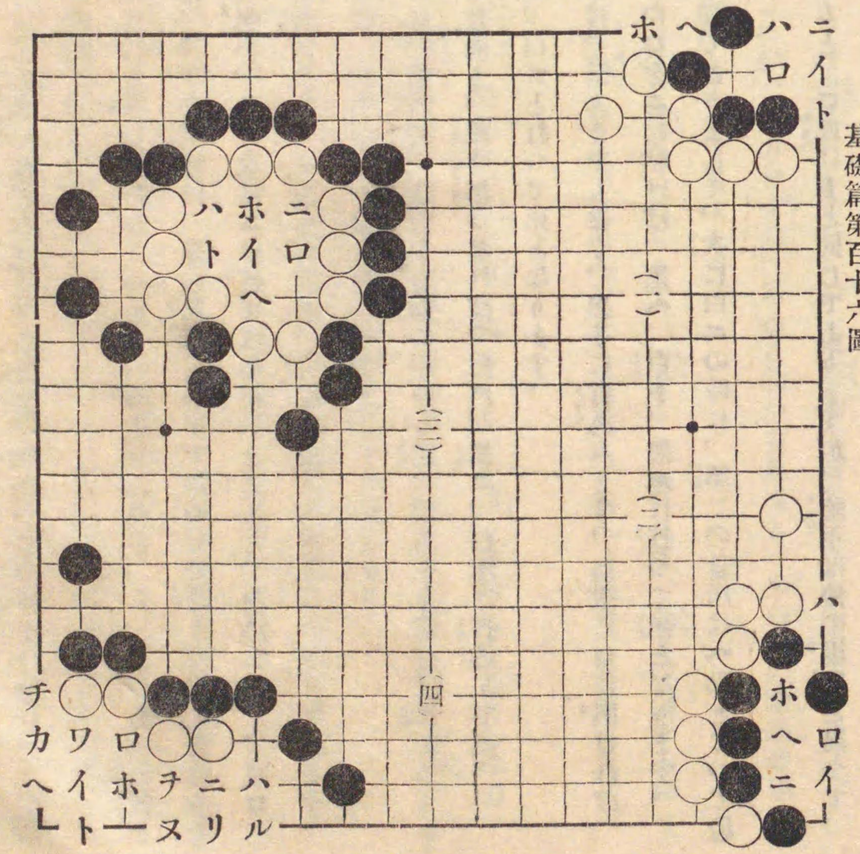
故に布石の初めは隅を第一とし、次に邊、邊終つて後中に着手する順序となります。

次にイ、或はハなどの點は如何かと云ふと、イで見ると點々内の勢力は確實で、此中へは絶對に敵の侵入を許さぬと云つて宜い位でありますが、其位置があまり低く、此手は只下の場所を取ると云ふ丈で、中の發展には効果は無く、斯かる點は布石の初めには着手する場所ではありませぬ。

以上の通りでありまして、布石に於ける着手の順序を區別して見ますと、先づ第一に、隅黑◎、◬白◎、◬等を占め、之等の點が終つて、次に邊の「ろ」、或はロに打進み、最後に◎の中央に向ひ其勢力を發展さするのを順序とするのであります。

從つてイ或はハなどは、大體の配置が終つて、敵地に侵入する場合とか、或は石の死活の場合、又は終局侵分に移つて後、着手する場所であります。

第百十六圖　次には死活の場合について、石を死、或は活とするに、其要所は、如何云ふ點を選ぶが宜いかと云ふと、之も其形の中で、一着手の活力が最有効に用ゐらるゝ點に打つのが宜いので、之は前の布石の際と少しも異りは無いのであります。



基礎篇第百十六圖

簡單な一例を擧げて見ますと、(一)此形で黑石を死とする急所、即活力を最有効に働かせる點は何處かと云ひますと、イ或はロの點であります。

此點は何れも白とすれば三つの活力を持つて居る、つまり一番活力の多い、そして一番の急所であるのであります。で斯う打てば、以下の變化は、前の死活篇の中で説明した通り、黑死となりますが、若し此手を二つの活力より無い、ハ、或はニに打てば如何かと云ふと、白ハの時は、黑ロ、白ホ、黑ニ、白ヘ、黑トに打つて劫となり。又白ニなれば、黑ロ白ホ黑ヘと打つて活となります。

又反對に黑先、之を活とするには、ロの點が一番有効の着手となつて居ります。

(二)、白先で此石を死とするには、前同樣、活力を有効に用ゆる點、即ちイを選べば死となります。以下の變化は、前にも説明した通り、此時黑ロなれば、白ハ、黑ニ、白ホに打込んで死。又黑ロをハに綽れば、白ヘ、黑ニ、白ロと打つて死となります。

(三)、黑先で此石の眼を取るには、云ふまでもなく、黑イに打込みます、白次にロに應ければ、黑ハ、白ニ、黑ホと打つて死。又白ロをニに粘げば、黑ヘ、白ト、黑ホに打つて死となります。

前述の通り此形での急所は、イ點でありまして、次に白ニの時に、第二の急所はヘ點となつて居ります。

これは只活力を用ゐる點から見ると、ロ或はトと同じでありますが、此手は他の場所と異つて、白を切つて居る意味がありますから、ロ或はトと異つて、一番有効の着點となるのであります。

(四)、黑先でイと打込むので、これが、活力を有効に用ゐる點から見ても、又白ロの缺點を狙ふ意味から見ても、此形での一番の急所となつて居ります。

此時に白ロに粘ぎますと、黑ハ、白ニ、黑ホに打ちます。白次にヘに打てば、黑ト、白チ、黑リ、白ヌ、黑ル、白ヲ、黑ワに打つて五目點となり。又白ヘをトに打てば、黑ヘ、白カ、黑リ、白ヌ、黑ルと打つて死となります。

第百十七圖　敵地に打込んで完全に活動し、其地所を破るにも、矢張り前同樣に其石の活力が最有効に用ゐらるゝ點を選ぶのが一番善いので、若し此意味で敵地に打込とすれば、何んな變つた形でも必ず其手は有効に活躍する石となるのであります。

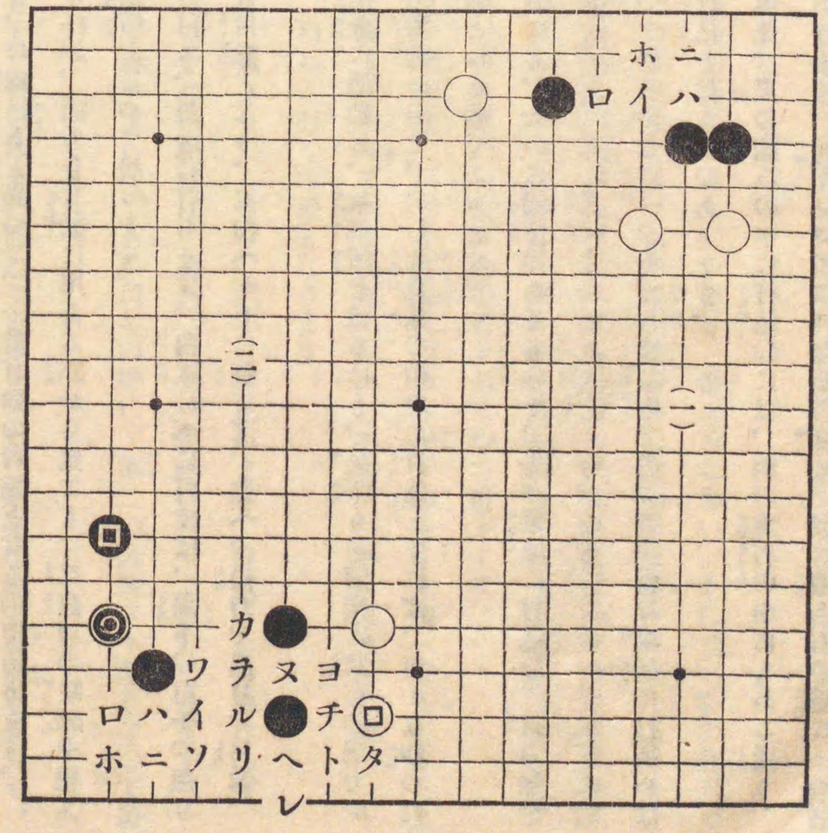
で之には其近くにある敵味方の石にも、大いに關係のあるもので、先づ敵地に打込むに何の點を選ぶかを考へるには、第一に其石の活力を見次に其近くにある味方との石の連絡を考へ、第三に敵の勢力に近寄つて居るか、遠ざかつて居るかを考へ、そうして其中での一番適當な場所に打込めば如何なる形でも、それが必ず善い打込となるのであります。

圖について見ますと、(一)では白先、黑の圍みの中に打込むには、前の定石の中にもある通り、イの手が一番善い打込となるのであります。此手はロ或はハなぞの樣に、既に敵の石の爲に一つ活

力を失つて居る石と異り完全に四つの活力を持ち、又四つの活力のある**ニ**或は**ホ**なぞの様に低い線とは異り、第三線の好點にあるからであります。

又味方の石に連絡を取る意味から見ても、又は敵の勢力から遠ざかる點から見ても、此**イ**の打込は、此形での一番よい場所となります。（以下の變化は前の定石の中にある通りで、茲に略する事と致します）

次に（二）の形で、何の黒が宜いかと云ふと、此形で活力



基礎篇第百十七圖

の最有効に活躍する點は、**イ**と**ロ**の點であります。活を得るには、**ロ**の隅の方が優つて居る譯でありますが、然し此形では黒◎、◉との石があつて、嚴重に圍つてありますから、假令そう打込んでも黒に**ハ**と約へられて活る手はありませぬ。

故に此形では、白は白の石に多少連絡の意味を含み、**イ**の點を選ぶのが宜いのであります、此打込は斯く打込んで後是非此石を活きようとするので無く、黒の應け方により、場合によつては之を捨てようと云ふ意味を持つて居ります。

其變化は、此時に黒**ハ**に約へますと、白**ニ**、黒**ホ**、白**ヘ**に附け、次に黒**ト**から約へますと、白**チ**黒**リ**、白**ヌ**、黒**ル**、白**ヲ**、黒**ワ**、白**カ**と打つて、白は初めに打つた、**イ**の石を捨てゝ外と替り。又黒**ト**を、**リ**の方から約へると、白**ル**、黒**ト**、白**ヌ**、黒**チ**、白**ヨ**、黒**ソ**、白**タ**、黒**レ**、白**カ**と打つて初めに打込んだ**イ**の一目を逃出します。

第百十八圖　次には互先の配置について、二、三其打込の要所を研究する事と致します。

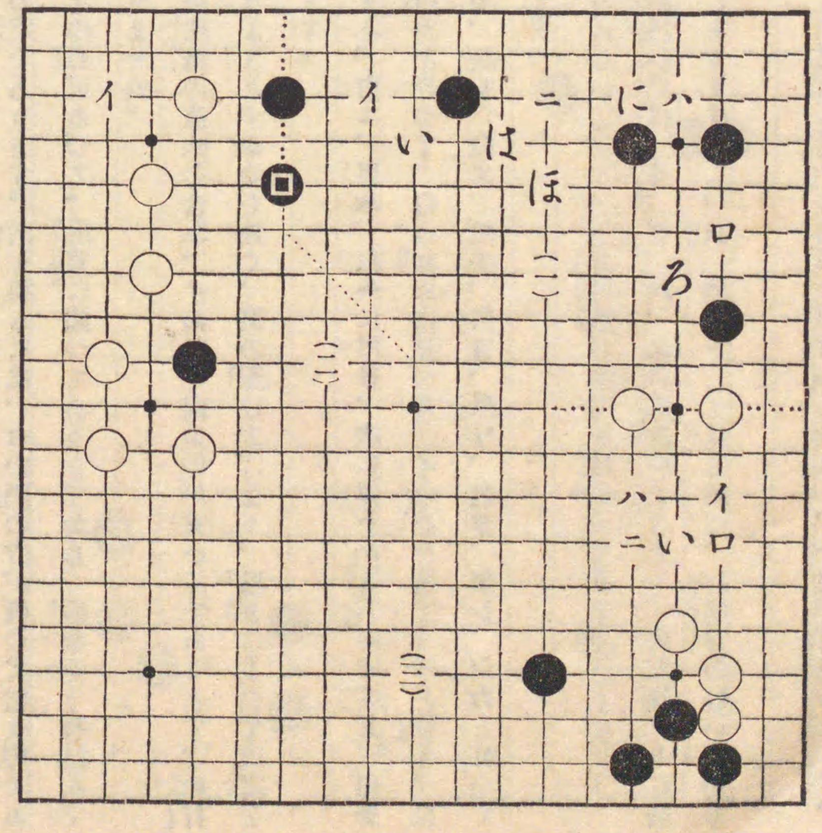
先づ（一）の形で、白から此中へ打込むには、**イ**、**ロ**、**ハ**、**ニ**の四點があります、此四點ともに活力は完全であり、又位置も第三線にありますから、只一着手として見る時は、皆同等の好い場所であります。

さてこれ等の着手が、圖中の白石、黒石に對する關係は如何かと云ふと、今白が打込むとして、

先づ**イ**について見れば、左隅に白の締りがあつて、此石との連絡には、此點が一番優つて居ります。けれども黒回の飛びがあつて、此處が堅くなつて居りますから、次に黒に「**い**」に尖まれて、外に逃出す手が無くなつてしまひます。

若し黒回の飛の無い形では、**イ**の打込が一番好點となりますが、此飛の爲に、此打込は無理となつて居ります。

次に**ロ**は如何かと云ふと、之も白との連絡の意味は、**ハ****ニ**より優つて居りますが、矢



基礎篇第百十八圖

張り隅に黒の一間締りがあるので、黒はこれを利用して「**ろ**」と尖むので、外側の白の勢力にはあまり効力なく、また同じく白は外に逃出す手も無いのであります。

次いで**ハ**はどうか、この點は位置が隅にあつて、活を得るには、一番便利でありますが、黒の此形では隅の締りが堅く整つて居るので、此打込も稍無理と云へます。

最後に白**ニ**の打込でありますが、この打込は、隅に活やうとする意味もあり、又外に逃出す意味もあるので、此形勢では、一番好い打込み場所であります。

此時に、黒若し「**は**」に打つて出を止めれば、白は**ハ**の要所に打つて、**ニ**の白との連絡を取りながら、隅或は邊で活とする事が出來ます。

又黒**は**の手を、「**に**」に打つて眼を取れば、無論白は「**ほ**」に一間飛して、中に逃出します。

(二)、此形での黒からの打込は、只一點**イ**でありまして、此手は黒回●との連絡もあり、また此點以外の處では、隅に活とする要所は無いのであります。

(三)、黒若し白の拓きの中へ打込むとして、前同樣、**イ**或は**ロ**の第三線を選びますと其近くにある白の石が高くなつて居るので、**イ**では白に**ハ**とカケラれ。又**ロ**では白に**ニ**とカケラれて、何れも白に圍まれ、之を逃げるには甚だ困難な形となります。

で斯う云ふ形では、黒は一路高く「**い**」と打込むのが宜いので、此點なれば、白にカケラれる恐れ

もなく、恰度白の勢力を兩分して、之を攻める事が出來ます。

第百十九圖　次には、石が相接して、互に連絡する形に於いての、好着手について說明する事と致します。

斯かる形では、之を二つに分ける事が出來ます、一つは只一部分丈の形で、切、又は粘とする場合と、今一つは全局の形勢によつて、着手を異にする場合とであります。

一部分丈の、切及び粘について見ますに、大要は、味方の方の石數の少ない時は、粘を打ち、石數の多い時は、切或は攻の手段に出るので、之は前の色々の場合にも說明した通りであります。

先づ(一)で見ますと、此形で黑先として、何う打つのが宜いかと云ひますと、黑**イ**と粘ぐ形であります。

此手は前の單獨に打つ場合と異つて、二つの石を連絡する爲に費せる着手でありますから、其石自身は既に二つの活力を失つて居りますが、其無くなつた二つの活力は、最有効に活用されて居ます。

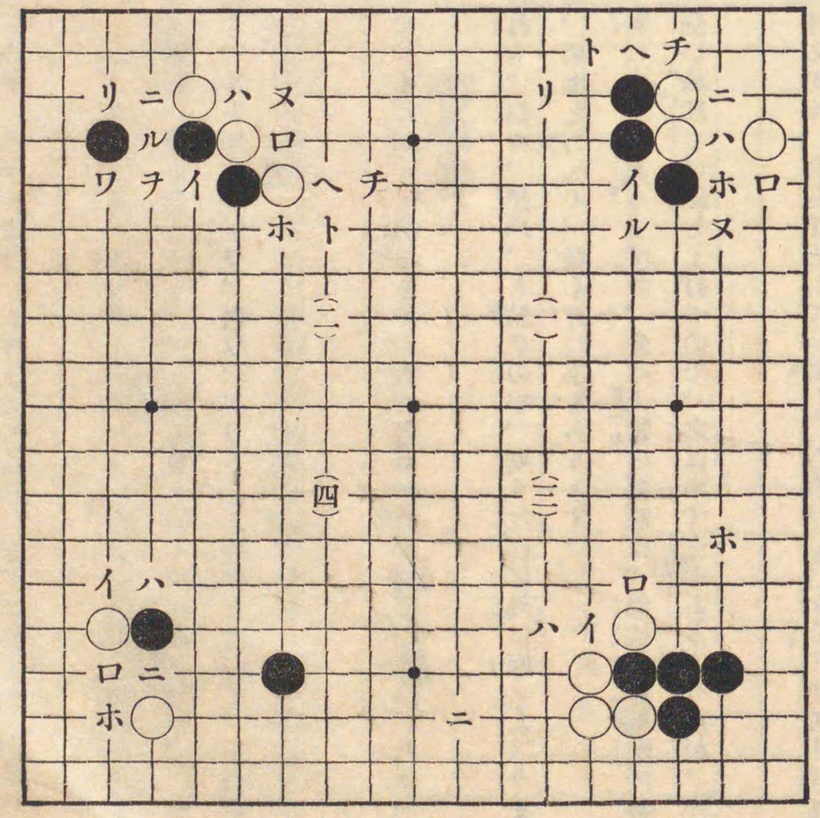
ですから無論黑は**イ**に粘ぐ處で、反對に白から此處を切らるゝ樣になつては大變でありますが、黑としては、**イ**に粘ぐ前に、先づ**ロ**に約へるのが手順であります。

白この時、**イ**と切れば、黑**ハ**に綽込み、白**ニ**、黑**ホ**、白**へ**、黑**ト**、白**チ**、黑**リ**、となるので、此

形になれば例へ白は**イ**に切つてあつても、隅を活きる爲に、外を黑に堅くされてしまひますから、左程の効果はありませぬ。

又右の手順中白**イ**の切で、**ホ**に綽込みますと、黑**ヌ**、白**ハ**の時に、黑は、**イ**の代りに、**ル**に掛粘となつて、黑の優勢な形となります。

(二)、此形は黑先手で無論で**イ**に粘ぐ手であります。次に白は**ロ**に粘ぐか、或は**ハ**に粘ぐ形でありますが、若し白**ロ**に粘げば、黑に**ニ**の好所を



基礎篇第百十九圖

打たれます。又ロの粘をハに粘げば、黑ホ、白ヘ、黑ト、白チとなつた時、黑にニと打たれるので、之も黑が好い形となります。

ですから白はこれらを嫌つて黑イの時、手强くニと出て戰ふでせう、此時若し黑が、平凡にリと約へれば、白ロの粘となつて、白が大層好い形となります。故に黑もリと約へずにロと切つて、白ハ、黑又となり、次に白も止むを得ず、ルと出て、黑ヲ、白ワ、黑リと云ふ變化となつて、黑白各々三分して劇しい戰となりますが、之は双方手筋によつて着手した結果自然の勢から斯く戰となる外はないのであります。

次に切の形では、(三)、黑先として、イに切つて戰ひます、次に白ロに行びれば、黑ハ、白ニの時、黑ホに打ちます。

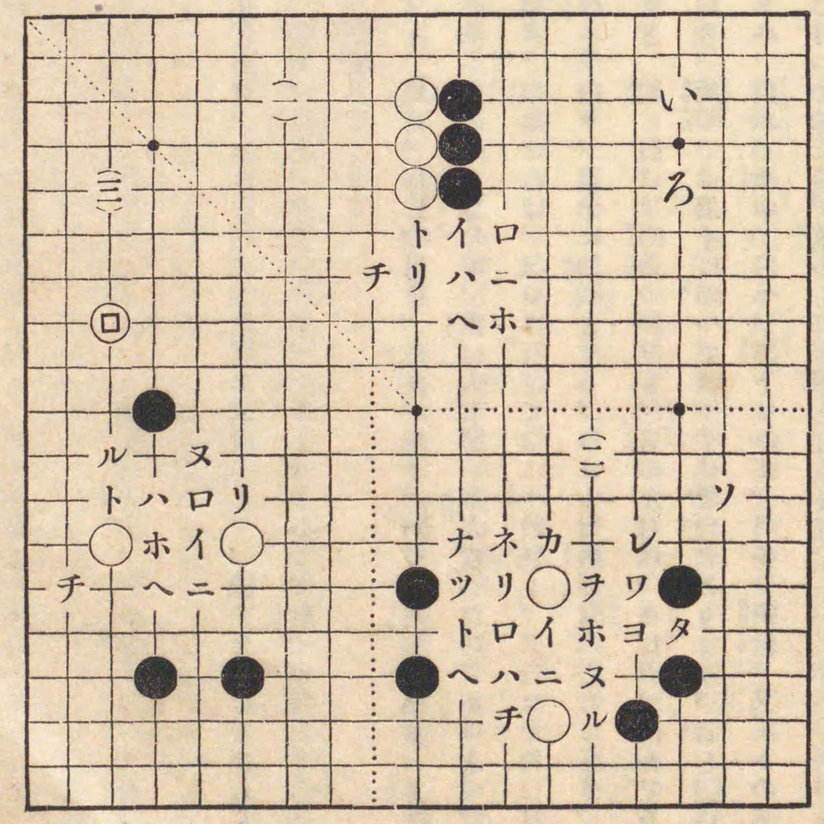
(四)、黑先で堅く打つには、イに打ち、白ロ、黑ハ、と粘ぐので、斯うなれば外は厚くなります。又黑イの手でロと綽出し、白ニ、黑ホと約へて、强く打つ手もあります。

第百二十圖　打方も其時々の形勢によつて異りますが、先づ大體の要領は、前述の通り敵の勢力範圍では堅く守り、味方の勢力の强い場所では劇しく打つので、之は申す迄もありませぬが、今實例によつて見ますと。

(一)、黑三目、白二目の石が相接する形で、白先手として、若し「い」及び「ろ」が白であるとすると、强く白イと綽ね、黑ロ、白ハ、黑ニ、白猶ホに綽ねて黑を攻めます。

しかし之は、形としては白少し延びすぎて居て、黑からへ或はトに切らるゝ手はありますが、元々白先手の處であり且つ「い」、「ろ」に味方もある形でありますから、黑へなれば、白チに飛び、又黑へをトなれば、白へに粘となつて、白には少しの危險もありませぬ。

又反對に、「い」、「ろ」が黑石であるとすれば、初めの白



基礎篇第百二十圖

イの綽は危險で、此手は堅くトに行び、黑イ、白リと何處までも、石を連絡して進むのが宜いのであります。

（二）、白は二間飛となつて居り、之に對する黑は双方共に、一間又は尖と、堅い形となつて居ります。

で斯う云ふ形では、黑は手強くイと附け、白ロなれば、黑ハに二段綽して、戰つて決して惡しくありませぬ。此時に白ニに切れば、黑ホ、白ヘ、黑ト、白チ、黑リとなるので、此形は白は下に活となりますが、上の黑は非常に厚く優勢となります。

又白ニの切でホから當りとしますと、黑ニ、白ヌ、黑リ、白ル、黑ヲ、白ワ、黑カ、白ヨ、黑タ白レ、黑ソとなつて、此形白は上に漸く逃出しましたが、黑は大層堅い形となつたのであります。

次に白ロをホから綽ねた時は、黑ヌ、白ニなれば、黑ロに行びて白に手段無く。又白ニをロに打てば、黑ニ、白ハ、黑リ、白ツ、黑ネ、白ト、黑ナに約へとなり、白は大層窮屈な石となります。

處が若し（二）の樣な形となりますと、同じ白は二間飛の形でも、黑の左右は、まだ石が薄弱であり、其上白に◎の一目がありますから、此形では黑イに切つて戰ふ手は無理であります。若し強いて黑イに附けるとすれば、白ロ、黑ハ、白ニ、黑ホ、白ヘ、黑トなれば、白チに掛粘。又黑トの手をリにつれば、白ト、黑ヌ、白ルに打つて却て黑が攻められる形となります。

第百二十一圖　此局は明治十六年、村瀨秀甫（八段）、水谷縫次（七段先番中押勝）兩氏の對局であります。で此處では、此局によりて、前述着手の活力を研究する事と致します。

先づ黑一、白二、黑三の三手は、前の說明にもある通り、各々隅の要所に據り。次に白四は、黑一に相對峙して互角の勢を張つたので、斯う打ちますと、此隅の優劣は、只後の打方如何によつて定まるのでありますが、若しこゝを、黑先で一着三三に締られるとすると、黑の隅の圍ゐは完全となり、最早白からは、深く隅に侵入する手は無くなるのであります。

黑五、白六は前と同意、次に黑七と尖のは極く堅い打方で、斯く黑が尖の形で、石を連絡し、此二着を以て、白四の一着に相對すれば、此隅は黑優勢となつて、次には白四を、隨意に攻擊する事が出來ます。

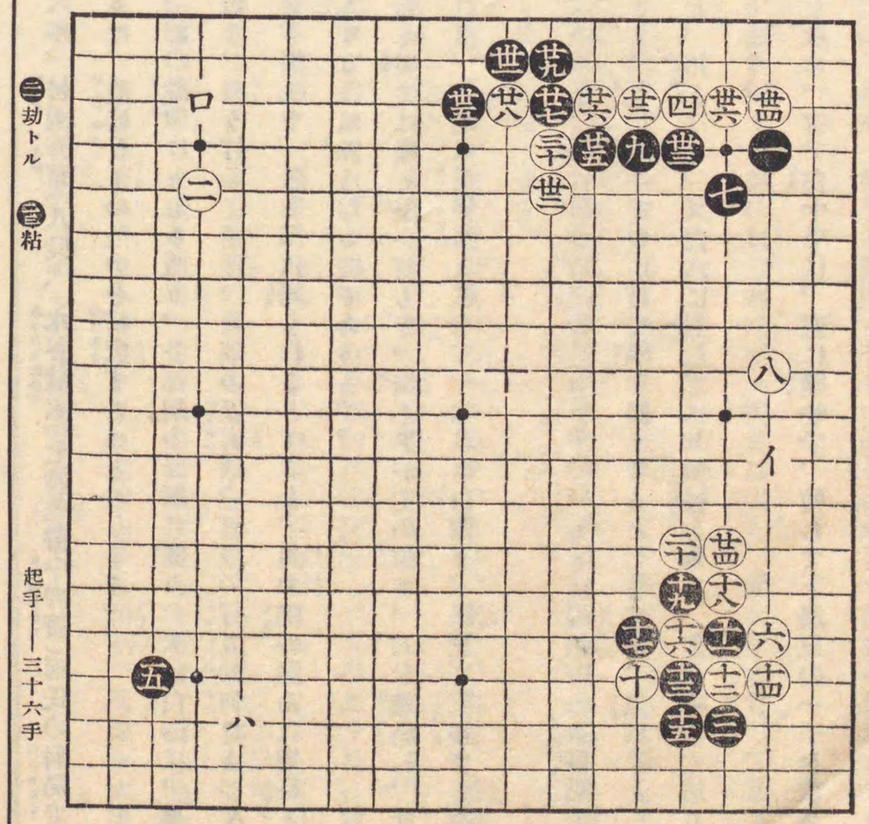
白八の拓は、まだ此處では口或はハなど、隅に打つ場所もありますが、こゝは邊の中の最好點で却て此形では隅よりも優つて居ります。若し此手でロに打て隅を堅くするとしますと、黑はイと三間に夾む、此夾は黑七から見ますと、拓となり、又白六に對しては其根據を奪ひ、之を攻めて居る手で、邊の中では絕好の要點であります。

黑九は、優勢を利用して白の四を攻め、次で白十では、直に應ぜず、轉じて下邊三の一子を攻めたのであります。

黑十一以下の打方は、次の互先定石の中にもありますから、此處には省略致しまして、以下白二四の粘ぎまでゞ此處の變化は一段落となつたのであります。

黑二五と行び、白二六、黑次に二七に約へた手は、鳥渡手筋としては無理でありますが、此處では白三目に對し、黑五目で攻めて居る形でありますから、斯う手强く打つて差支へありませぬ。

白二八は面白い手筋であります、てこの場合二八で、二



基礎篇第百二十一圖

九に綽ねますと、黑二八、白三一、黑三五となり、白は下を這ふ形となつて惡く。又白二九と綽ねずに、直ちに三十に切りますと、黑二八の行びとなつて、下の白三目は、活を得るのに困難な形となります。

故に白は二八と附けその時圖の樣に黑二九に下れば、白三十と切つて、戰ふのであります。又黑若し二九を三十に粘げば、白二九の盤となつて、之は白安全の形となります。

白三六の粘までゞ、白は隅に活となり、外側は、白三十、三二の二着に對して、黑は一、七以下の五目と、二七以下の四目と相對し、互に外に發展する形となつて居ります。

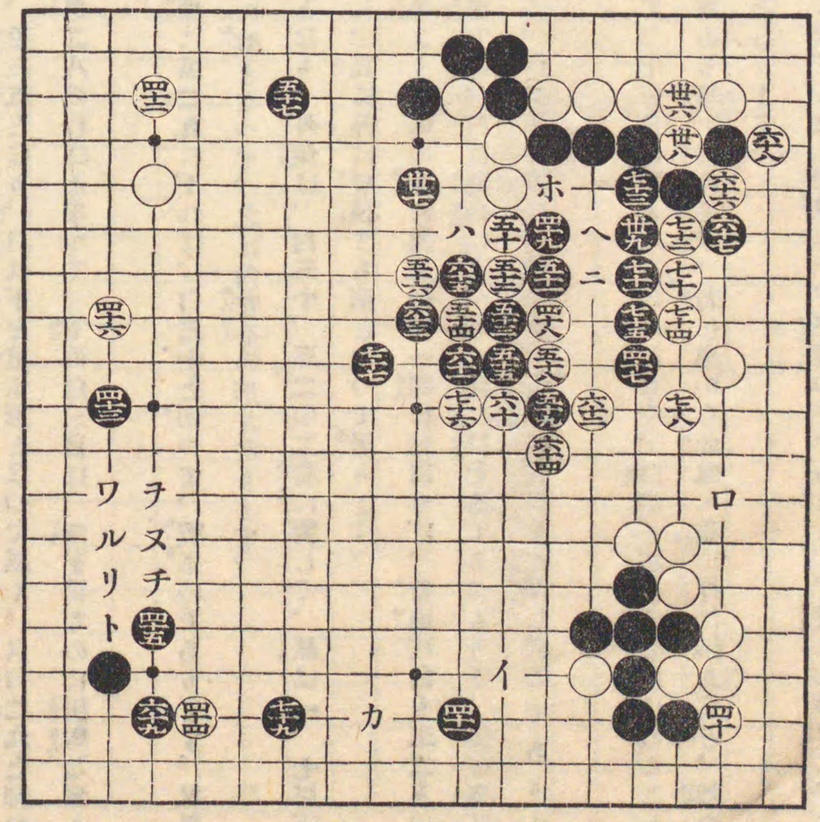
第百二十二圖　前圖黑三六の手より、圖の樣に黑三七に一間に飛出せば、普通は白も五二と一間に飛出す形でありますが、此形勢では、白は場合によつては此二目を捨てるつもりで、先づ三八に打つて隅を堅くし、黑三九の時に、白は手を拔いて四十と、下隅の要所を占領したのであります。

この四十は、所謂三ノ三と云つて二十目位の手となるのみならず、白が一着この要所にあることは、次に白イと打つてこゝの黑を攻める事が出來ます。若し黑から此處へ先に打たれますと、却つて黑ロと打込む筋も生じて來るのであります。

白四四に對し黑四五は、前圖四に對する七と同意味で、堅實の手であります。特に此形では、此

一着は必要であつて、若し黑が手を拔くとすると、白四五とカケ、黑ト、白チ、黑リ、白ヌ、黑ル白ヲ、黑ワとなりて、黑四三の一着は稍堅過ぎる手となり、其活動はニブルのであります。

黑四七で五二に掛ければ、圖の四七よりもキビシク白二目を攻める事は出來ますが、前に述べた通り、白は場合によりて此二目は放棄して他の好所に打たうかとして居る際でありますから、斯く黑が狹く攻めますと、白は手を拔い



基礎篇第百二十二圖

三十六手——七十九手

て力の要所に先着を下します。

故に黑も廣く四七に打ち、右邊の白地をセバメながら、白二目を攻めたので、黑も斯う云ふ形で二目を圍つてしまへば惡しくはありませぬ。

で黑四七と打つた時、次に白は此二目を逃出すについての形は、大いに研究を要する肝要の處であります。原評には、白四八の大斜走は惡しく、五三に飛ぶ形であつたと評してありますが、其意味は、圖の樣に白四八と逃げますと、黑は四九以下五三と切つて、黑は大層善い形となつて居りますが、之に反して白五一等の四目は重い形となり、又白四八も逃出しにくい石となるのであります。

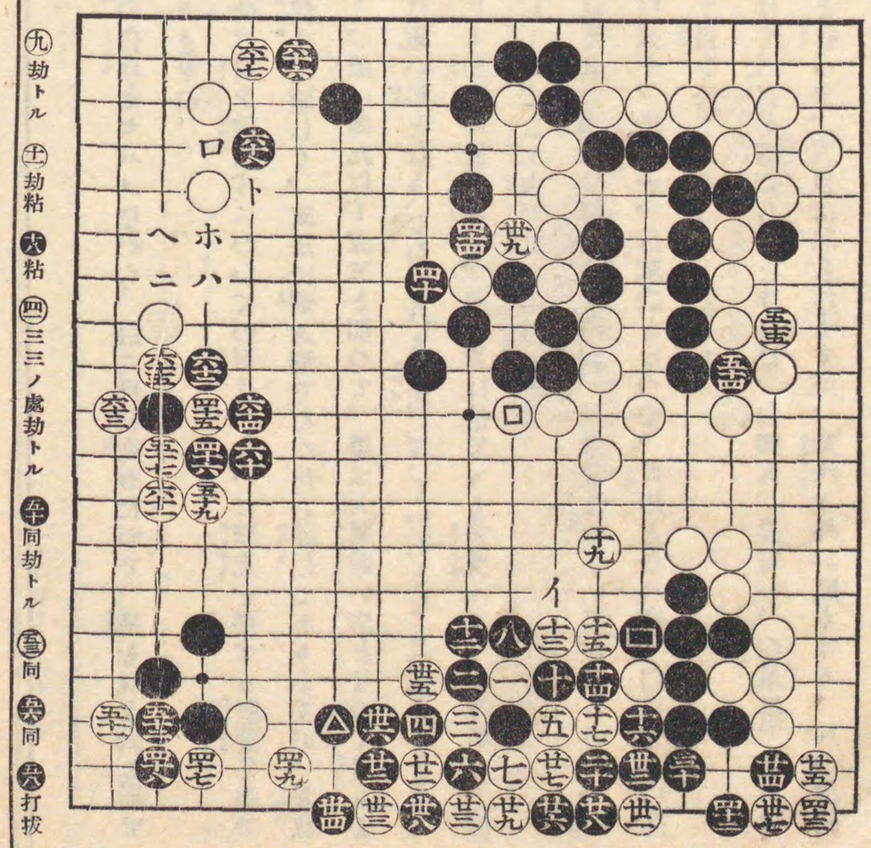
此邊、着手の至難の處で、白として初めの計畫通り、此二目は捨てゝも差支へありませぬが、同じ捨てるにしても、此二目を活用して捨てる工夫が肝要であります。

此意味に於いて、白四八の手では五三の點へ二間飛するのが、一番要領のよい手となるので、此時に、黑若し同じく四九に打てば白五十、黑五一、白五二となつて、此形となれば、白は完全に連絡し、强い石となりますから、白二目を捨てる要はありませぬ。

又右の手順中黑四九で五十に附けて二目を斷切らうとすれば、白四九、黑五一、白五二、黑八、白二、黑ホ白ヘ、黑七三、白七一と打つて、二目は取られますが、其代り外が厚くなり、且つ黑四七を隔てゝ白は大層好い形となります。

處が白四八と大斜走に打つた結果は、白は以下六四に打抜きとなり、黑も六五の提となりましたが、此替りでは、白は幾分の損を免れぬのであります。

第百二十三圖　白一の附も、大いに研究すべき要點で形としては、初めに黑石のある處へ、後から密接して打つのは、只此場所丈で見ると、先手後手の相違がありますから、戰となつては不利な譯であります、斯かる手は、餘程外側の形勢の優つて居る



基礎篇第百二十三圖

時とか、又は敵に數目を置かした場合、强いて碁を六ヶ敷打たうとする時の外は、多くかゝるツケは無理となつて居ります。

處で此碁の形勢では如何かと云ふと、中央白(四)の邊は、白の勢力範圍で、若し此處へ近く白黑が打つ樣になれば、無論白有利でありますが、此厚みは、あまりに白一の方面には遠く、其上黑には、直接(四)、(△)等の石がありますので、若し此處で戰となれば、皆有効の石となつて白一を攻める手となります。故に此白一の附は何の方面から見ても無理と云はねばなりませぬ。

原評にも、「此一は、只黑の應手を試すつもりで、斯く打つたのであるが、黑に强く應ぜられ、勢ひ此處に戰となつたが、其結果甚だ惡しく、之が敗因であつた」とありますが、斯かる一つの失着でも、遂には一局の敗因となる程の、惡手となるのであります。

次に黑は、前述の意味に從ひ、强く二と綽ねたのであります。處が若し此手で、五或は三と引いて居る樣では、白一の無理を遂げしめる譯で、結果黑は、只低地を堅くしたと云ふに過ぎませぬ。

白三では、黑に二と綽ねられた以上、勢ひ止むを得ず、斯う切つたので、之より以下白九までは所謂着手の連絡とも云ふべく、白黑共に斯う打つの外はありませぬ。

黑十は、普通は面白くない筋でありますが、此處では白を壓へ、且つ攻める意味で、善い手となります。

白十九の手で二一と切り、黑二二、白二三、黑二十、白二六と打てば活となりますが、其代り黑にイと二目を取られ、之も白敗の形であります。

白二七では此處を打たず、只四五に附れば、白は此一以下の石は取られて居ても、次いで三五に切つて、黑の二以下の三目を攻めるなぞの意味もあり、まだ勝敗を爭ふ機會があつたかも知れませぬが、圖の樣に劫となり、次に之を打拔かるゝ形となつては、此意味は消滅し、茲に勝敗を決したと云つて宜いのであります。

圍碁獨習第七卷終

昭和七年九月廿五日印刷
昭和七年十月一日發行

（圍碁獨習　第七卷）
定價一圓
郵稅六錢

著作者　鈴木爲次郎
發行兼印刷人　東京市麹町區永田町二丁目一番地　八幡恭助
印刷所　東京市赤坂區田町一丁目十五番地　三京社
發行所　東京市麹町區永田町二丁目一番地　日本棋院
電話銀座七〇五番
振替東京六八五八六番

著作權所有